

特別史跡讃岐国分寺跡
—第16~21・25~35次調査—
如意輪寺窯跡
国分中西遺跡
兎子山遺跡

2007.3

高松市教育委員会

例　　言

1. 本書は、旧国分寺町教育委員会によって実施された特別史跡讃岐国分寺跡、如意輪寺窯跡、国分中西遺跡、兎子山遺跡の発掘調査報告書である。このうち、讃岐国分寺跡については、昭和63年度から平成17年度における史跡地内の現状変更申請に伴って実施した確認調査についての報告である。なお、平成18年1月の市町合併をもって旧国分寺町教育委員会の事務を高松市教育委員会が引き継いだ。

2. 報告する各遺跡の調査期間、調査地、調査原因等については下記のとおりである。

(I) 特別史跡讃岐国分寺跡：香川県高松市国分寺町国分字上所

	調　　査　　期　　間	調　　査　　地	面　　積	調　　査　　原　　因
第16次調査	昭和63年11月20日～12月1日	国分2019-2	36.8m ²	住宅新築に伴う現状変更
第17次調査	昭和63年	国分2037-4	12.5m ²	駐車場造成に伴う現状変更
第18次調査	平成元年10月9日～10月10日	国分2024	25.0m ²	水田畠畔設置に伴う現状変更
第19次調査	平成2年1月8日～2月4日	国分2087	90.0m ²	集水弁設置に伴う現状変更
第20次調査	平成2年3月1日～3月10日	国分2040	54.0m ²	住宅新築に伴う現状変更
第21次調査	平成2年3月12日	国分2037-3	141.0m ²	確認調査に伴う現状変更
第25次調査	平成3年5月20日～5月21日	国分2080-1	10.0m ²	門改築に伴う現状変更
第26次調査	平成3年11月5日～11月8日	国分2055-3	66.0m ²	アパート新築に伴う現状変更
第27次調査	平成6年5月10日～5月13日	国分2031-1	68.0m ²	アパート新築に伴う現状変更
第28次調査	平成6年10月20日～10月30日	国分2080-2	100.0m ²	講堂新築に伴う現状変更
第29次調査	平成8年4月2日～4月5日	国分2019-2	10.0m ²	住宅新築に伴う現状変更
第30次調査	平成8年10月15日～10月16日	国分2059-1	27.0m ²	駐車場造成に伴う現状変更
第31次調査	平成8年10月17日	国分2032-2	2.0m ²	住宅増築に伴う現状変更
第32次調査	平成13年4月10日～5月1日	国分2032-1	60.0m ²	住宅新築に伴う現状変更
第33次調査	平成14年6月3日～6月10日	国分2019-3	40.0m ²	住宅新築に伴う現状変更
第34次調査	平成16年5月17日～5月18日	国分2080-1	50.0m ²	庫裡増築に伴う現状変更
第35次調査	平成17年7月5日～7月22日	国分2037-2	110.0m ²	住宅新築に伴う現状変更

(II) 如意輪寺窯跡：香川県高松市国分寺町国分字中西

	調　　査　　期　　間	面　　積	調　　査　　原　　因
不時発見	平成11年3月～4月	60.0m ²	如意輪寺公園整備事業

(III) 国分中西遺跡：香川県高松市国分寺町国分字中西

	調　　査　　期　　間	面　　積	調　　査　　原　　因
不時発見	平成16年1月11日	12.0m ²	町道中西中原線道路改良工事

(IV) 兎子山遺跡：香川県高松市国分寺町新名

	調　　査　　期　　間	面　　積	調　　査　　原　　因
確認調査	平成17年12月5日～6日	7.0m ²	NTTドコモアンテナ基地開設工事

3. 本報告書には、讃岐国分寺跡における昭和63年度、平成元・3・6・8・13・14・16・17年度の確認調査、如意輪寺窯跡、国分中西遺跡、兎子山遺跡の調査成果を収録した。
4. 発掘調査は、昭和63年～平成14年度は松本忠幸（国分寺町教育委員会）が、平成16年度は松本和彦（香川県教育委員会）が、平成17年度は渡邊誠（国分寺町教育委員会）が行った。
5. 本報告書の編集・執筆は、渡邊が行った。但し、平成16年度以前の調査については史跡の現状変更の終了報告に添付する実績報告文を編集し直して収録している。そのため、平成14年度までの讃岐国分寺跡の調査、如意輪寺窯跡の成果については松本忠幸、平成16年度の讃岐国分寺跡、国分中西遺跡の調査成果については松本和彦の実績報告文をもとに編集し直したものである。ただし、調査成果に関する個々の表現・図面等については、統一を図るために原文を参考に一部変更した部分があり、その文責は渡邊にある。しかし、諸々の事情から統一が取れていない部分もある。
6. 調査・整理作業・報告書執筆を行うにあたり下記の関係機関、土地所有者ならびに多くの方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい（敬称略、五十音順）。
- 香川県教育委員会文化行政課、香川県埋蔵文化財センター、香川県歴史博物館、鼓岡神社（鼓岡文庫）、安藤文良、上原真人、片桐孝浩、北山健一郎、白川雄一、田村久雄、信重芳紀、蓮本和博、日詠寅市、藤好史郎、松本和彦、宮崎哲治、山下平重、山中敏史、山本清、渡部明夫
7. 採図として、国土地理院発行の1/25000の地形図「白峰山」を一部改変して使用した。
8. 本報告書掲載の遺物写真撮影は、杉本和樹（西大寺フォト）の協力を得た。
9. 発掘調査で得られた資料は、高松市教育委員会が保管している。

凡　例

1. 本報告書中に掲載している図面の北方は讃岐国分寺跡が座標北（G.N.）で、それ以外は磁北（M.N.）である。
2. 本報告書の高度値は海拔高を表す。
3. 本報告書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
SB…獨立柱建物跡 SD…溝 SK…土坑 SP…柱穴 SX…不明
4. 出土遺物の実測図は、土器やその他土製品等は1/4、石器1/2、遺構の縮尺については、図面ごとに示している。
5. 本報告書において、各器種の呼称や時期決定などについては下記の文献を参照した。

片桐孝浩1992「第5章考察 -古代から中世にかけての土器様相」『中小河川大東川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
川津元絆木遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター

九州近世陶磁学会2000「九州陶磁の編年」

佐藤竜馬1993「香川県上板山窯跡群における須恵器編年」『岡西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論叢』岡西大学考古学研究室

1995「備井窯土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 国分寺備井遺跡』香川県教育委員会

1998「十歳山窓と龜山窓」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』Ⅵ 財団法人香川県埋蔵文化財センター

2000a「第5章まとめ第1節高松平野と両辺地域における中世土器の編年」『空港跡地遺跡IV』香川県教育委員会

2000b「西村盟土器編」の系譜『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』Ⅷ 財団法人香川県埋蔵文化財センター

2003「第6章まとめ第3節近世在地土器の検討」『高松城跡（西の丸町地区）II』香川県教育委員会

重根弘和2003「中世備前焼に関する考察 -形態と変遷と年代について-」『山口大学考古学論集』近藤一・先生退官記念論文集
瀬戸市史編集委員会1999「瀬戸市史」陶史編六

東京大学埋蔵文化財調査室1999「東京大学構内出土陶磁器・土器の分類（1）」

松本和彦2003「第6章まとめ第4節西の丸町地区出土陶磁器について」『高松城跡（西の丸町地区）II』香川県教育委員会

2003「香川県における火鉢・混炉類の動向」『第5回四国城下町研究会 四国と周辺の土器II』四国城下町研究会

目 次

第1章 地理的環境・歴史的環境	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第2章 特別史跡讃岐国分寺跡	
第1節 調査の経緯	7
第2節 調査の方法	9
第3節 調査の成果	9
(I) 第16次調査	9
(II) 第17次調査	11
(III) 第18次調査	14
(IV) 第19次調査	14
(V) 第20次調査	23
(VI) 第21次調査	21
(VII) 第25次調査	27
(VIII) 第26次調査	27
(IX) 第27次調査	28
(X) 第28次調査	30
(X I) 第29次調査	33
(X II) 第30次調査	34
(X III) 第31次調査	35
(X IV) 第32次調査	35
(X V) 第33次調査	36
(X VI) 第34次調査	37
(X VII) 第35次調査	39
第3章 如意輪寺跡跡	

第1節 調査の経緯	51
第2節 調査の経過	51
第3節 調査の方法	51
第4節 調査の成果	51
第5節 まとめ	54
第4章 国分寺跡跡	
第1節 調査の経緯	57
第2節 調査の経過	57
第3節 調査の方法	58
第4節 調査の成果	58
第5節 まとめ	60
第5章 兎子山跡跡	
第1節 調査の経緯	60
第2節 調査の経過	61
第3節 調査の方法	61
第4節 調査の成果	61
第5節 まとめ	61
第6章 総括	
第1節 35次調査で確認された掘立柱建物跡SB01から派生する問題	63
第2節 如意輪寺窯跡採集軒瓦の時間的位置づけとその意義	70
第3節 讃岐国分寺跡を取り巻く問題	77
遺物観察表	80

挿 図 目 次

第1図 高松市国分寺町の位置	1
第2図 周辺の遺跡分布図	3
第3図 特別史跡讃岐国分寺跡内確認調査位置図	7
第4図 16次調査造構平面図	10
第5図 16次調査上層断面図	10
第6図 16次調査南北トレンチ出土遺物	12
第7図 16次調査東西トレンチ出土遺物	13
第8図 17次調査造構平面・土層断面図	14
第9図 18次調査造構平面・土層断面図	14
第10図 19次調査造構平面・土層断面図	15
第11図 19次調査第2層出土遺物①	16
第12図 19次調査第3層出土遺物②	17
第13図 19次調査第3層出土遺物③	18
第14図 19次調査第2層出土遺物①	18
第15図 19次調査第2層出土遺物②	19
第16図 19次調査第2層出土遺物③	20
第17図 19次調査第2層出土遺物④	21
第18図 19次調査試掘坑出土遺物	22
第19図 20次調査造構平面図・土層断面図	23
第20図 20次調査出土遺物	24
第21図 21次調査造構平面図・土層断面図①	24
第22図 21次調査造構平面図・土層断面図②	25
第23図 21次調査造構平面図・土層断面図③	26
第24図 25次調査造構平面図・土層断面図	27
第25図 26次調査造構平面図・土層断面図	28
第26図 26次調査出土遺物	29
第27図 27次調査造構平面図・土層断面図	30
第28図 27次調査出土遺物①	31
第29図 27次調査出土遺物②	32
第30図 28次調査造構平面図・土層断面図	33
第31図 29次調査造構平面図・土層断面図	34
第32図 30次調査造構平面図・土層断面図	35
第33図 31次調査造構平面図・土層断面図	35
第34図 32次調査造構平面図・土層断面図	36
第35図 33次調査造構平面図・土層断面図	37
第36図 34次調査造構平面図・土層断面図	38
第37図 34次調査出土遺物①	39
第38図 34次調査出土遺物②	40
第39図 35次調査造構平面図	41
第40図 35次調査土層断面図	42
第41図 SB01平面図	43
第42図 SP001-SP015平面・断面図	44
第43図 SP001-SP015出土遺物	44
第44図 SP015出土遺物	45
第45図 SP005-SP009-SP012-SP013平面・断面図	46
第46図 SP005-SP009-SP012-SP013出土遺物①	46

第47図	SP005・SP009・SP012・SP013出土遺物②	48
第48図	その他の柱穴出土遺物	49
第49図	その他の遺構平面図・断面図	50
第50図	その他の遺構出土遺物	50
第51図	如意輪寺窯跡位置図	52
第52図	レンチ配置図	52
第53図	1号窯・2号窯跡平面図・断面図 および出土遺物	53
第54図	窯跡周辺採集遺物①	55
第55図	窯跡周辺採集遺物②	56
第56図	窯跡周辺採集遺物③	57
第57図	国分中西遺跡位置図	57
第58図	レンチ平面・断面図	58
第59図	出土遺物①	59
第60図	出土遺物②	60
第61図	兎子山遺跡トレンチ位置図	61
第62図	トレンチ平面図・断面図	62
第63図	周辺採集遺物	62
第64図	讃岐国分寺跡の伽藍とSB01遺構	63
第65図	寺院の空間構造	65
第66図	上総國分尼寺の寺院地と政所院の 建物配置	66
第67図	讃岐国分寺周辺の残存地形	68
第68図	阿野郡端岡村大字国分字上所周辺の 土地利用（明治期）	69
第69図	NRH01と同一文様をもつ軒平瓦	71
第70図	文様間の比較	71
第71図	NRM01と同一/近似文様をもつ軒丸瓦	74
第72図	NRM01と同一文様をもつ軒丸瓦の 各属性	75

挿表目次

第1表	遺跡一覧	4
第2表	特別史跡讃岐国分寺跡における確認 調査一覧表	8
第3表	寺院空間呼称法	64
第4表	遺物観察表	80

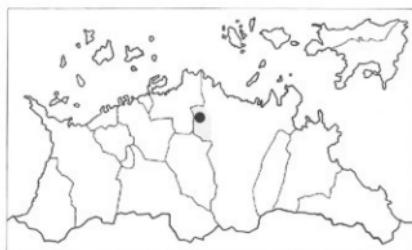
写真図版目次

図版1-1	16次調査東西トレンチ全景（西から）	
図版1-2	16次調査南北トレンチ全景（西から）	
図版1-3	17次調査トレンチ全景（北から）	
図版1-4	18次調査トレンチ全景（西から）	
図版1-5	19次調査トレンチ全景（北から）	
図版1-6	20次調査トレンチ全景（西から）	
図版1-7	21次調査トレンチ全景（東から）	
図版1-8	21次調査トレンチ全景（南から）	
図版2-1	21次調査トレンチ全景（西から）	
図版2-2	21次調査トレンチ全景（西から）	
図版2-3	21次調査トレンチ全景（南から）	
図版2-4	25次調査トレンチ全景（南から）	
図版2-5	26次調査トレンチ全景（東から）	
図版2-6	27次調査トレンチ全景（西から）	
図版2-7	28次調査トレンチ全景（南西から）	
図版2-8	29次調査西トレンチ全景（北から）	
図版3-1	29次調査東トレンチ全景（東から）	
図版3-2	29次調査中央トレンチ全景（南から）	
図版3-3	30次調査トレンチ全景（東から）	
図版3-4	31次調査トレンチ全景（南から）	
図版3-5	32次調査トレンチ全景（北から）	
図版3-6	33次調査トレンチ全景（東から）	
図版3-7	34次調査トレンチ全景（東から）	
図版3-8	35次調査トレンチ全景（東から）	
図版4-1	35次調査南西部トレンチ全景（南から）	
図版4-2	SB01南西隅柱穴検出状況（東から）	
図版4-3	35次調査SP001-015（北から）	
図版4-4	35次調査SP015①（南から）	
図版4-5	35次調査SP015②（南から）	
図版4-6	35次調査SP005（西から）	
図版4-7	35次調査SP009（北から）	
図版4-7	35次調査SP012（西から）	
図版5-1	35次調査SP013（南から）	
図版5-2	35次調査ピット群（東から）	
図版5-3	如意輪寺窯跡 1号窯跡（南から）	
図版5-4	如意輪寺窯跡 1号窯跡（北から）	
図版5-5	如意輪寺窯跡 2号窯跡（南から）	
図版5-6	如意輪寺窯跡 2号窯跡（北から）	
図版5-7	国分中西遺跡トレンチ全景（南から）	
図版6-1	国分中西遺跡北側土層（南から）	
図版6-2	国分中西遺跡出土の五輪塔	
図版6-3	兎子山遺跡Aトレンチ全景（南から）	
図版6-4	兎子山遺跡Bトレンチ全景（南から）	
図版6-5	19次調査出土丸瓦（凸面）	
図版6-6	19次調査出土丸瓦（凹面）	
図版6-7	19次調査出土平瓦の印き目	
図版7-1	19次調査出土半瓦の印き目	
図版7-2	19次・35次調査出土半瓦の印き目	
図版7-3	35次調査SP015出土丸瓦	
図版7-4	35次調査SP015出土平瓦	
図版7-5	35次調査SP005出土平瓦	
図版8-1	35次調査SP005出土平瓦	
図版8-2	NRM01	
図版8-3	NRM02	
図版8-4	NRM02	
図版8-5	NRH01	
図版8-6	NRH01	
図版8-7	NRH01	
図版8-8	如意輪寺窯跡出土遺物	

第1章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

高松市は香川県のほぼ中央に位置し、北は国立公園の瀬戸内海に面し、南は緩やかなこう配をたどりながら讃岐山脈へと連なっている。県都である高松市も平成の大合併という時代の流れを受け、平成17年9月・平成18年1月に近隣6町と合併し、市域375.09km²、人口約42万人の都市へと生まれ変わった。本書で報告する特別史跡讃岐国分寺跡をはじめとした諸遺跡も、その新・高松市の西部に位置する旧国分寺町に所在している（第1図）。



第1図 高松市国分寺町の位置

旧国分寺町域は、四方を山に囲まれた盆地状の小平野を形成している。北には卓状を呈する国分台、東には円錐形の伽藍山・六ツ目山・堂山が連なり、西には鷺ノ山・火ノ山が連なる。平野部の中心部には、高松平野南部の香南町を源とする本津川が北流し、国分台丘陵から水を集めた野間川と平野北東部で合流して、北東へと流れ、海へと注ぐ。本津川の周辺には低地さらにその背後に台地が広がり、低地部は砂礫層、砂層、泥層などから形成され、台地は花崗岩を基盤層としてその上に砂岩と泥岩の地層が堆積している。隣接する高松平野と坂出平野とは狭隘な平地で繋がっており、南西部では、綾川流域とも山塊間の低い谷部を介して容易に行き来が可能であるが、比較的閉鎖的な一地域を形成している。

平野の北部に位置する国分台は、五色台の南部を占め、今から1,000万年前の火山活動によって形成された広い溶岩台地が侵食によって形成されたもので、開析熔岩台地（メサ）と呼ばれる非常に珍しい地形を形成している。一方、伽藍山や六ツ目山などの円錐形を呈する孤立丘（ピュート）は、国分台のような緻密な讃岐岩質安山岩の分布が頂部に限られていたため、風化や浸食が進行し、形成されたものである。国分台はサヌカイト（讃岐岩）が露出し、原始より良好な石材の原産地として利用され、利器として使用されなくなった現在では、独特な音色からカンカン石として親しまれている。また、南東の谷部には凝灰岩の石切場も存在している。国分台の南西に位置する鷺ノ山の中腹には石切場の跡が三箇所ほどあり、良質の石英安山岩質凝灰岩が採掘されていた。この石は、古墳時代より石棺の石材として使用され、最近まで「鷺ノ山石」や「石舟石」と呼ばれ石臼、墓石や灯籠などの石材として使用されており、現在でも石工業者が近くに軒を並べている。このように、国分寺平野の周辺部は、原始・古代より良質な石材の産地としても知られている。

本書で報告する特別史跡讃岐国分寺跡は、蓮光寺山の東南麓の、国分台扇状地の南端に位置している。史跡地内には、現在もなお四国八十八ヶ所第八十番札所である白牛山国分寺があり、参詣者の列が絶えない。境内には、金堂跡、塔跡の礎石が原位置で残り、講堂跡の上には鎌倉時代後期の建築として知られる本堂がある。また、香川県内最古の釣り鐘で平安時代初期の作と知られる銅鐘も本堂とともに重要文化財に指定されているなど、今もなお往時の佇まいを留め、法燈を守り続けている。讃岐国分寺跡の東方約2km、端岡丘陵を隔てた場所に国分尼寺跡（国史跡）があり、西南方約1kmの坂出市府中町と高松市国分寺町に跨つて国分僧寺・尼寺の瓦を焼いた府中山内瓦窯跡（国史跡）がある。国府も比較的近くに位置しており、古代の国営の施設が狭い範囲にまとまってみられ、古代における政治的・社会的中心地であった。

如意輪寺窯跡は讃岐国分寺跡の北東約1kmの山越池の北側に位置し、付近にも開析谷を堰きとめて造られたため池が点在している。現在では、窯跡は保護措置を講じて埋め戻し、周辺は如意輪寺公園として整備されている。

国分中西遺跡は、讃岐国分寺跡の東約500mの国分台扇状地の南端部に位置する。

兎子山遺跡は文字通り、平野部の南部に所在する兎子山の頂上部に位置し、国分寺町域を一望できる。

兎子山は、花崗岩の風化した土壌によって形成されているが、以前よりサヌカイトの石器や剥片などが散布していることで知られていた。

第2節 歴史的環境（第2図・第1表）

○旧石器時代

サヌカイト（古銅輝石安山岩）の原産地として知られる国分台・蓮光寺山周辺では現在も散布しているサヌカイトの状況から人々の活動の痕跡が確認できる。国分台遺跡では、翼状剥片石核、翼状剥片石材、ナイフ形石器、尖頭器、その他に加工する際に使用する砂岩系の叩き石などが散布しており、石材の切り出しのみならず、石器製作も行われていた。また、この国分台産のサヌカイトは、備讃瀬戸島嶼部でも利用されていたことが明らかとなっている（藤好2005）と同時に、石材によって規定される加工技術（瀬戸内技法）も同様な広がりを見せており、中国地方や四国島内の他の地域でも交流の一端を示す資料が確認されていることなどから国分台産サヌカイトを介した当時の人々の活動の広がりを確認することができる。

○縄文時代～弥生時代

人々の活動を伺い知ることのできる資料は現状では非常に希薄で、土器や石器が、六ツ目遺跡、下日名代遺跡、禮原遺跡などで確認されている程度である。しかしそのうちでも、調査区の一角で102点もの板状のサヌカイトの剥片が集積した状況で出土した六ツ目遺跡が注目される。周辺からは石器や石匙が出土していることからも石器製作の遺跡と考えられる。出土したサヌカイトの多くは、坂出市の金山から持ち込まれたもので、それに国分台産のものが一部含まれている状況である。このことは、旧石器時代の原産地であった国分台が細石器文化期から縄文時代にかけて、石材獲得地としての利用が減り、代わって坂出市金山へと移行していくことを示している（山下1999、森2005、藤好2005）。今後、石材流通の変化、さらにはその背後にある集團間関係の変化等を解明していく上でも重要である。一方、当地域における弥生時代の集落跡はまだ明確に確認されておらず、その構造や集落間の関係などを解明していくためには、本津川流域の平野部や下日名代遺跡のような低地部での今後の調査事例の増加が待たれる。また、蓮光寺山東斜面で中期後半の弥生土器が出土した禮原遺跡のような丘陵部立地の集落の存在についても今後の調査事例に期待したい。

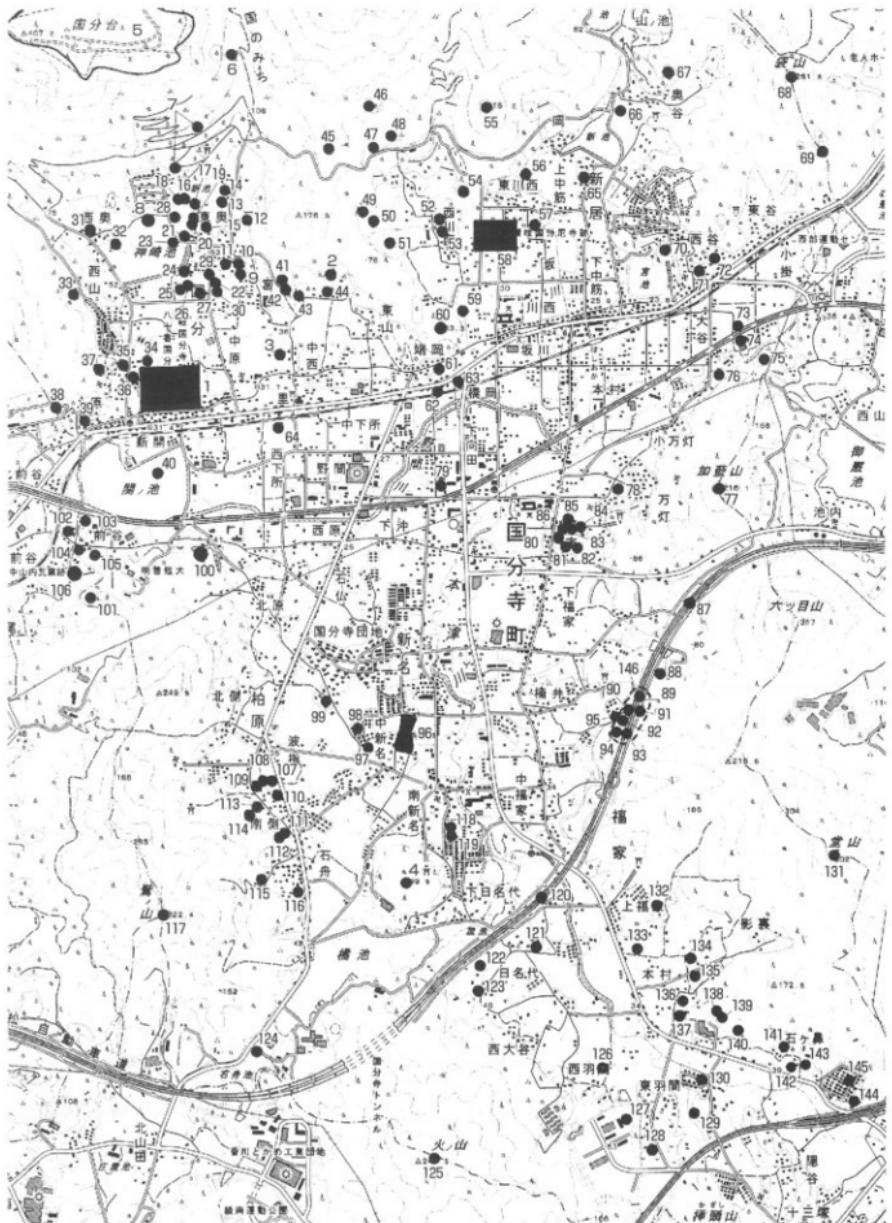
○古墳時代

弥生時代以前と同様に集落の様相はまだ明らかではないが、いくつかの古墳が確認でき、他地域との相対化を行えうる資料が認められる。まず、前期では、六ツ目古墳、本村古墳がある。これらの前期古墳は、生活空間とは隔絶した丘陵上に立地する点で東四国地域の前期古墳と共通している。六ツ目古墳は、小規模前方後円墳で、非安山岩系石棺・非東西棺主軸という古墳様式として認識でき、「石清尾山グループ（大久保1999）」を頂点とした階層の中でも、下位の首長層の古墳として理解されている（森下2000）。

本村古墳については、『さぬき国分寺町誌』の藏本氏の論考（藏本2005）に詳しいが、時期はやや下り、六ツ目古墳と同様に四国の北東部域に認められる秩序の中で理解される可能性が高いようである。古墳時代前期を考える上でももう一つ重要な事象が、石英安山岩質凝灰岩の產地として知られる鷲ノ山の石材を利用した剝抜式石棺である。この鷲ノ山の石棺は、前後半から中期前半にかけて大型前方後円墳に限定して棺として使用されたもので、県内の石清尾山石船塚古墳・丸龜市綾歌町快天山古墳などの近隣地域や大阪府柏原市安福寺など遠方という二つの分布様相が認められる。鷲ノ山産の石棺の型式組列の安定性からも、石棺製作者集団と首長層との緊密な関係、その首長層の地位が安定的に継続したことがうかがえることからも（渡部1995、藏本2005）、石棺を媒介として形成された諸関係の実態の解明は今後注目される点である。

また、石舟石棺が未製品であることから、出土地付近が石棺製作の工房であった可能性も指摘されており（渡部1995、藏本2005）、製作者集団および、それを掌握した首長層の居住空間の特定とその変遷などの解明が今後の課題と言える。

古墳時代中期になると、四国東部における中期古墳の偏在という広範に及ぶ現象と連動する形で、当地



第1表 遺跡一覧

NO	種別	遺跡名	時代	NO	種別	遺跡名	時代
1	寺院	濃姫国分寺跡	古代	74	墓	人骨塚2号	中世
2	宮跡	加賀輪守墓跡	古代	75	墓	鷦鷯塚	中世
3	墓?	圓分中西古墳	中世	76	墓	小力丘塚	中世
4	包含地	秀子山遺跡	旧石器	77	寺社	無光山発寺・御園山遺跡	中世
5	包含地	圓分台虎跡	旧石器	78	城跡	万歳山城跡	小堀
7	古墳	圓分台舊塚跡	旧石器	79	墓	向坂塚	中世
8	墓	圓分塚	中世	80	墓	万灯塚1号	中世
9	墓	東奥塚1号	中世	81	墓	万灯塚2号	中世
10	墓	東奥塚2号	中世	82	墓	万灯塚3号	中世
11	墓	東奥塚4号	中世	83	墓	万灯塚4号	中世
12	墓	東奥塚5号	中世	84	墓	万灯塚5号	中世
13	墓	東奥塚6号	中世	85	墓	万灯塚6号	中世
14	墓	東奥塚7号	中世	86	山城	末良城跡	中世
15	墓	東奥塚8号	中世	87	盆地	御園寺六ツ目遺跡	漢文～中世
16	墓	東奥塚9号	中世	88	古墳	圓分六ツ目古墳	古墳
17	墓	東奥塚10号	中世	89	古墳	燒谷古墳	古墳
18	墓	東奥塚11号	中世	90	古跡	櫛月1号古跡	小堀
19	墓	東奥塚12号	中世	91	跡跡	往來2号跡跡	中世
20	墓	東奥塚13号	中世	92	城跡	椿3号曲跡	小堀
21	墓	東奥塚14号	中世	93	寶跡	袖井4号曲跡	中世
22	墓	東奥塚(山元・荒神)14号	中世	94	寶跡	袖井5号曲跡	中世
23	墓	東奥塚15号	中世	95	その他	おまき遺跡	弥生
24	墓	東奥塚16号	中世	96	城跡	野名民原城跡(説名跡)	中後
25	墓	東奥塚17号	中世	97	墓	野長冢	中世
26	墓	東奥塚18号	中世	98	古墳	小力古墳	古墳
27	墓	東奥塚19号	中世	99	古墳	幕張野原	中世
28	墓	東奥塚20号	中世	100	古墳	赤城古墳	古墳
29	墓	東奥塚21号	中世	101	包含地	野上池遺跡	古墳～漢文
30	墓	東奥塚22号	中世	102	墓	伊路4号	中世
31	墓	西古塚	中世	103	墓	空塚2号	中世
32	墓	西高塚(内田塚)	中世	104	墓	空塚3号	中世
33	包含地	植原遺跡	弥生	105	墓	空塚4号	中世
34	墓	古塚2号	中世	106	宝跡	南山内瓦塚跡	古代
35	古墳	中家塚1号塚	古墳	107	墓	南山の塚1号	中世
36	寺院	水寺寺跡	古代	108	墓	南山の塚2号	中世
37	古跡	西山五輪塔	中世	109	墓	南山の塚3号	中世
38	包含地	瀬光寺山遺跡	旧石器	110	墓	所ノ原の塚4号	中世
39	塚	板塚	中世	111	墓	南山の塚5号	中世
40	包含地	西ノ池遺跡	中世	112	墓	南山の塚6号	中世
41	祭祀	圓分八幡社社址	中世	113	墓	南山の塚7号	中世
42	古墳	八幡神社内古墳	古墳	114	墓	南山の塚8号	中世
43	墓	川尻坊太郎の墓	近世	115	古墳	右谷古墳	古墳
44	寺院	妙昌庵寺	古代	116	島	立石島	中世
45	墓	笠地城塹	中世	117	墓	寅吉塚1号	中世
46	その他の	六条御	中世	118	墓	蟹の城跡	中世
47	古墳	西川西古墳	古墳	119	墓	西川新名塚2号	中世
48	祭祀	西川西遺跡(堆塚跡)	中世	120	盆地	國寺下田名代追跡	彌生～中世
49	墓	西川西塚2号	中世	121	墓	寛舟塚	中世
50	墓	西川西塚3号	中世	122	墓	川西塚	中世
51	寺跡	招安寺跡	中世	123	墓	川西の塚2号	中世
52	墓	西川西塚4号	中世	124	その他	石引天神社の石横造土地	古墳
53	古石	萬葉塚	中世	125	城跡	火ノ山城跡	中世
54	古墳	東川西古墳	古墳	126	墓	羽根塚・古墳	中世
55	山城	新宿氏会路(新宿城跡)	中世	127	河川	吉香瀬堤防越跡	古墳
56	墓	新柳賓虎・資友の墓	中世	128	島	三瓶の塚	中世
57	墓	川西塚	中世	129	墓	六六1号塚	中世
58	寺院	諏訪國分寺跡	古代	130	墓	六六2号塚	中世
59	包含地	橋岡山遺跡	旧石器	131	山城	壹山城跡	中世
60	古墳	橋岡山古墳	古墳	132	溝墓	北分水古塚	中世
61	墓	橋岡1号塚	中世	133	墓	北谷塚	中世
62	墓	橋岡2号塚	中世	134	古墳	本行古古塚(春川塚)	古墳
63	墓	橋岡3号塚	中世	135	墓	本行新川の塚(無名塚)	中世
64	寺院	里の宇須物那	古代	136	山城	福光城跡	中世
65	城跡	新宿氏船跡	中世	138	古墳	木村古墳	古墳
66	墓	鹿谷の塚1号	中世	139	古墳	福光城跡	中世
67	墓	鹿谷の塚2号	中世	140	寺院	多門院跡	中世
68	城跡	鬼州城跡(貨山城跡)	中世	141	古墳	石舟古墳	古墳
69	城跡	衣部城跡(貨山城跡)	中世	142	墓	右角松の塚	中世
70	新屋	向原跡塚・官尾城跡	中世	143	島	右角松の塚	中世
71	石塔	唐尼輪塔	中世	144	古墳	石舟2号塚	古墳
72	古墳	西大谷古墳	古墳	145	古墳	石舟3号塚	古墳
73	墓	大谷塚1号	中世	146	墓	圓分山船井遺跡	中世

域においても古墳築造の空白期間が認められる。その後、古墳時代後期(6世紀後半～7世紀初頭頃)にな

り、平野北部に西大谷古墳、東川西古墳（7世紀前葉）、端岡山古墳（6世紀後半）、六ツ日古墳の近くに楠井1号墳（7世紀前葉）、平野南東部に石ヶ鼻古墳（6世紀後半）、石ヶ鼻2号墳（7世紀前葉）が築造される。この他にも、既に破壊されてしまったが赤池古墳、小山古墳、塔原古墳なども存在したようである。いずれにしても、多くの古墳が築かれており、これらの古墳を築いた首長層と、本地域を挟む形で累代的に大型横穴式石室が展開する坂出市南部、高松市鬼無町域の首長層との間に形成されていた諸関係の解明は今後注目されるところである。

○古代

讃岐国分寺跡等が所在する当地域は阿野郡新居郷に属していたことが明らかであり、「阿野郡新居郷」は「倭名類聚抄」などによると「綾郡爾比之美」と呼ばれていたようである。古代以降、讃岐の東西を結ぶ南海道が平野北部を通り、交通の要所として機能していたことに加え、当地域から坂出市府中町にかけての範囲には、讃岐国府、讃岐国分寺・国分尼寺などの官営施設が集中的に整備された地域で、讃岐国における政治的・社会的侧面において主導的な役割を果たしていた。

その基盤となったのが地方豪族である綾氏であった。坂出市南部を中心に、6世紀後半から7世紀初頭における大型横穴式石室を持つ古墳の築造、およびそれに継続する古代寺院が展開することや、『続日本紀』等の記録などから、綾氏（綾君氏、綾朝臣）は、阿野郡周辺を本拠地として古墳時代後期以降勢力を拡大しながら、7世紀後半頃～8世紀にかけて台頭してきたことが明らかにされている（渡部1998、大山2005）。綾氏の本拠地に国府が置かれていた点からも当地域を含む阿野郡が讃岐国における一大勢力であったことがうかがわれる。全国規模で実施された国分寺・尼寺造営事業は順調に進まず、『続日本紀』によれば、郡司への協力要請が出されていることからも、讃岐国では、国司の指導の下、阿野郡の郡司層と考えられる綾氏が讃岐国分寺造営に関与したことが想定されるのである（渡部2003・2005、大山2005）。また、国分寺・尼寺の瓦を作製した府中山内窯跡や当該期の須恵器生産の中心であった十瓶山窯跡群（陶窯跡群）などの官営の生産施設が阿野郡に集中したことからも、古代讃岐における阿野郡の位置づけは重要であったと考えられる。さらに、それらの生産遺跡の解明は地域社会における手工業生産のあり方やそれを取り巻く集團間の関係を考えていく上で大変興味深い。

仏教文化や地域社会の一つの大きな拠点として機能したであろう讃岐国分寺は、古代における寺院の変遷の具体的なプロセスは明らかにされていない。しかし、平安時代以降にも瓦が葺きなおされ、築地塀など伽藍の主要部が廃絶したとされる古代末期までは、仏教の普及に大きな役割を果たしていたであろうと考えられる。

この他にも、下日名代遺跡では「巡方」と呼ばれる石帯や円面鏡が出土しており、識字層や官人の存在が注目される（古野編1999）。集落の様相を復元できる遺跡は、現在ではほとんど確認されておらず、今後、官営施設以外についても調査事例の増加が期待されるところである。

○中世～戦国期

平安中期から現在の本堂が建てられた鎌倉時代末にかけての讃岐国分寺は、現状ではあまりよく分かっていない。しかし、中世段階には全国的に国分寺は国家管理の形骸化などによる財政が逼迫した状況に陥り、官寺から私寺へと移行していった（追塩1998）。讃岐国分寺も同様に大和西大寺の教練拡大の動きとも相俟って西大寺の末寺となっていたことが確認されている（唐木2005）。この点は、発掘調査等からも明らかで、僧房周辺でも12世紀代にはそれまでとは異なる土地利用がなされており、古代の伽藍が廃絶し、中世の寺院へと変貌していったことは確実であろう。近世に描かれた『四国偏礼靈場記』、『讃岐国名勝図絵』、『金毘羅參詣名所圖絵』などにみられる国分寺の伽藍が、いつまで遡れるのかは今後検討が必要であるが、中世以降、国分寺はそれまでとはかなり趣を異にしていたことは明らかである。周辺では現在重要文化財に指定されている四天王立像が安置されている鷲峰寺が、柏原堂の建立に伴い堂塔がこの頃に整備され、真言系律宗寺院として国分寺とともに発展していくこととなる。

国分寺以外には、国分寺六ツ日遺跡・補井遺跡・下日名代遺跡などで中世段階に属する資料が確認されて

いる。特に、楠井遺跡の調査によって中世における生産遺跡の様相が明らかとなっている。楠井遺跡では、3基の窯跡が確認され、それらの窯で、土師質足釜・鍋・甕・捏鉢・瓦質擂鉢が生産されていた。それらの製品は国分寺出土資料でも確認でき、その他県内の各集落に搬出されており（佐藤1995）。土師質上器の生産が盛んに行われていたようである。このことから、楠井遺跡は十瓶山窯を含めて生産体制の変遷を考えていく上で重要な生産地遺跡である。

この他にも、発掘調査は行われていないため詳しいことは分からぬが、伽藍山廃寺、赤峰窯跡、楠尾神社経塚、中世石造物の摩尼輪塔・笠塔婆、石造物の素材である角礫凝灰岩の石切場である東奥石切場、穴薬師石切場などが知られている（歳本2005）。

中世以降当地域には、讃岐藤原氏の総領香西氏と同族関係にあった福家氏、新名氏らが割拠していた。北西部に拠点を置いていた新名氏の居館跡は土居の宮と呼ばれ、鷺ノ山の尾根から続く高地上に位置している。詰め城である鷺ノ山城は峻険な尾根斜面と深谷の要害地形を利用しており防御は固い。一方、福家氏は堂山南西麓の高台地にある現在の長然寺に居館を構えていたとされ、その背後の尾根の末端には福家城を構えていた。さらに、その尾根を登りつめた堂山の頂に治城として堂山城がある。堂山城は、国分寺町教育委員会によって測量調査が実施され、主郭である北峰の頂部の状況が明らかにされている（国分寺教委2005）。また、この他にも万灯新居氏の末澤城跡、新居城跡、官尾城跡、衣掛城跡なども知られている。

【参考文献】

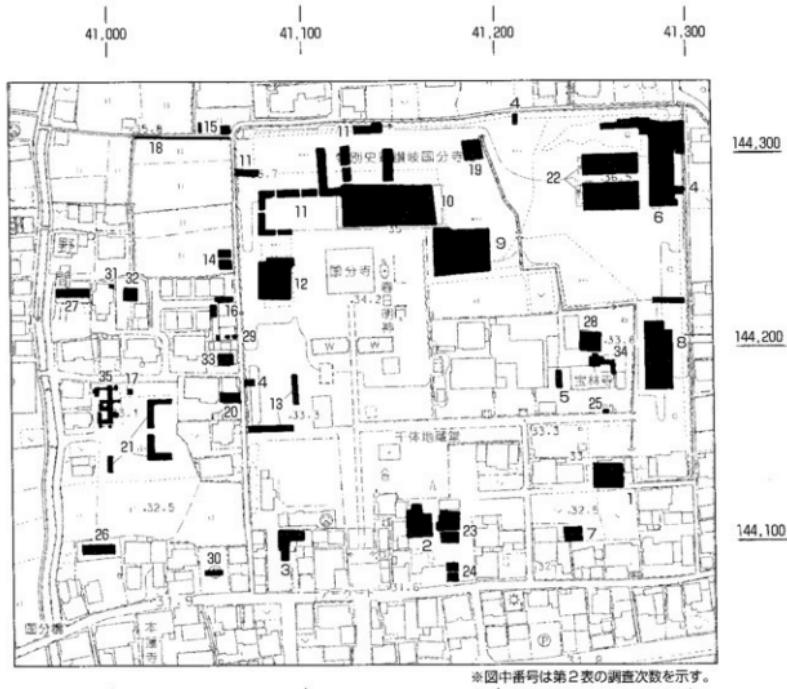
- 秋山 恵 2005「2 国分寺町における中世諸豪族の城館」『さぬき国分寺町誌』国分寺町
道塙千尋 1998『国分寺の中世の風景』吉川弘文館
香川県教育委員会編 2003『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』
唐木裕志 2005「中世社会と寺社」『さぬき国分寺町誌』国分寺町
川村教一 2005「第二章 国分寺町の自然環境の成り立ち 第二節 地形環境」『さぬき国分寺町誌』国分寺町
木原溥幸輔 1988『古代の讃岐』美巧舎
歳本哲司 2005a「1 原始 4古墳時代」『さぬき国分寺町誌』国分寺町
2005b「1中世 7中世の考古学」『さぬき国分寺町誌』国分寺町国分寺町教育委員会 2005『堂山城跡主要部の地形測量調査報告書』
佐藤庵馬編 1995『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 国分寺楠井遺跡』香川県教育委員会
薪見 治 2005「第二章 国分寺町の自然環境の成り立ち 第一節 自然のシンボルと自然景観を構成する要素」『さぬき国分寺町誌』国分寺町
藤好史郎 2005a「1 原始 1旧石器時代」『さぬき国分寺町誌』国分寺町
2005b「五色台・金山遺跡群と庵治諸島の旧石器時代遺跡群」『第19回予大学協会四国支部研究大会 原産地遺跡から時代を読む』古代学協会四国支部
古野徳久 2005『義歌郡の中世城館』『中世の讃岐』美巧社
古野徳久編 1999『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 国分寺下日名代遺跡』香川県教育委員会
松本忠幸編 1996『特別史跡讃岐国分寺跡保存整備事業報告書』国分寺町教育委員会
森 格也 2005「1 原始 2绳文時代、3弥生時代」『さぬき国分寺町誌』国分寺町
山下平重編 1999『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 国分寺六ツ日遺跡』香川県教育委員会
森下英治編 1997『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 国分寺六ツ日占墳』香川県教育委員会
波部明夫 1995『香川の剥抜式石棺—石棺の削出と移動—』『瀬戸内海地域における交流の展開』名著出版
1998「考古学からみた古代の綾氏（1）—綾氏の出自と性格及び支配領域をめぐって—」『財团法人香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要』VI 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
2003「平行叩き目をもつ讃岐国分寺創建時の軒平瓦」『香川史』30号 香川歴史学会
2005「天平勝宝以前の讃岐国分寺」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』I 香川県埋蔵文化財センター

第2章 特別史跡讃岐国分寺跡

第1節 調査の経緯

特別史跡讃岐国分寺跡は、昭和3年3月24日に南北220m、東西330mの範囲が国の史跡として指定され、昭和27年に特別史跡となった。昭和51年の史跡地内北側の宅地化に伴う現状変更申請を発端として、史跡の保存整備への機運が高まり、昭和52年度以降、文化庁・香川県教育委員会の指導の下、旧国分寺町によって史跡地の公有化が進められた。その後昭和58年度からは、史跡の保存整備のための発掘調査が行われ、僧房跡をはじめとして、築地附や鐘楼など伽藍を構成する多くの建物跡が発見された。その調査成果によって、伽藍配置や寺域の範囲等が確定されることとなり、当時の讃岐国分寺跡の状況が明らかとなつた。昭和62年度からは、調査成果に基づいた大規模な保存整備事業が発掘調査と併行して進められることとなり、僧房跡の一部が復元され、伽藍配置模型や讃岐国分寺跡資料館などが設置された。平成6年度に一連の調査成果と保存整備事業についてまとめた保存整備報告書が刊行され、第1期の整備工事が完了し、現在では史跡公園として開放されている。

特別史跡讃岐国分寺跡の史跡地の取り扱いに関しては、平成2年に特別史跡讃岐国分寺跡保存管理指針を作成し、今後の讃岐国分寺跡の整備方針を定めている。現在も史跡の保存と将来の史跡整備に備えて、隨時土地の公有化を進めているところである。



第3図 特別史跡讃岐国分寺跡内確認調査位置図 (S= 1 / 2,500)

第2表 特別史跡講岐国分寺跡における確認調査一覧表

年度	次数	報告状況	寺域内外	調査主体	原因	調査方法	調査区の位置
S.52年	1次	未報告	内	県教委	宅地造成に伴う現状変更	トレンチ	伽藍の東
	2次	未報告	内	県教委	宅地造成に伴う現状変更	面的調査	塔跡の南側
S.55年	3次	県報告	内	県教委	宅地造成に伴う現状変更	トレンチ	寺域の南西部
S.56年	4次	未報告	内	町教委	寺域確認調査	トレンチ	寺城の北部
	5次	県報告	内	県教委	庫裏等の増築に伴う現状変更	トレンチ	宝林寺境内
S.58年	6次	概報	内	町教委	寺域確認調査	面的調査	寺域の北東部
S.59年	7次	概報	内	町教委	住宅新築に伴う現状変更	面的調査	寺域の南東部
	8次	概報	内	町教委	寺域確認調査	面的調査	寺域の東側中央
	9次	概報	内	町教委	伽藍調査	面的調査	講堂跡東側
S.60年	10次	概報	内	町教委	伽藍調査	面的調査	講堂跡北側
S.61年	11次	概報	内	町教委	伽藍調査	トレンチ・面的調査	講堂跡北側
	12次	概報	内	町教委	伽藍調査	面的調査	講堂跡西側
	13次	概報	内	町教委	伽藍調査	面的調査	金堂跡西側
S.63年	14次	概報	外	町教委	確認調査	面的調査	寺域西側
	15次	概報	外	町教委	確認調査	トレンチ	史跡地外
	16次	本報告	外	町教委	住宅新築に伴う現状変更	トレンチ	寺域西側
	17次	本報告	外	町教委	駐車場造成	面的調査	寺域西側
H.元年	18次	本報告	外	町教委	水田畠跡の設置による現状変更	トレンチ	寺域西側
	19次	本報告	内	町教委	整備に伴う集水井の設置による現状変更	面的調査	寺域北側中央
	20次	本報告	外	町教委	住宅新築に伴う現状変更	面的調査	寺域西側
	21次	本報告	外	町教委	現状変更申請後取り下げ	トレンチ	寺域西側
H.3年	22次	概報	内	町教委	伽藍配置構型設置のための現状変更	面的調査	寺域北東地区
	23次	概報	内	町教委	伽藍配置等の確認調査	面的調査	塔跡の南東地区
	24次	板報	内	町教委	伽藍配置等の確認調査	面的調査	塔跡の南東地区
	25次	本報告	外	町教委	門の改築	トレンチ	宝林寺境内
H.6年	26次	本報告	外	町教委	アパートの新築に伴う現状変更	面的調査	寺域西側
	27次	本報告	内	町教委	講堂の新築に伴う現状変更	面的調査	宝林寺境内
H.8年	28次	本報告	外	町教委	アパートの新築に伴う現状変更	面的調査	寺域西側
	29次	本報告	外	町教委	僧家の新築に伴う現状変更	トレンチ	寺域西側
H.13年	30次	本報告	外	町教委	駐車場造成	トレンチ	寺域西側
	31次	本報告	外	町教委	住宅新築に伴う現状変更	トレンチ	寺域西側
H.14年	32次	本報告	外	町教委	住宅新築に伴う現状変更	面的調査	寺域西側
H.16年	33次	本報告	外	町教委	住宅新築に伴う現状変更	面的調査	寺域西側
H.17年	34次	本報告	内	町教委	住宅新築に伴う現状変更	トレンチ	宝林寺境内
	35次	本報告	外	町教委	住宅新築に伴う現状変更	トレンチ	寺域西側

*町教委：国分寺町教育委員会 県教委：香川県教育委員会

<参考文献>

- 波部明夫1981「国分寺跡」「香川県埋蔵文化財調査年報 昭和55年度」香川県教育委員会
 斎藤常雄1983「国分寺跡」「香川県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度」香川県教育委員会
 松尾忠幸編1983『特別史跡講岐国分寺跡』昭和58年度発掘調査概報 国分寺町教育委員会
 松尾忠幸編1984『特別史跡講岐国分寺跡』昭和59年度発掘調査概報 国分寺町教育委員会
 松尾忠幸編1985『特別史跡講岐国分寺跡』昭和60年度発掘調査概報 国分寺町教育委員会
 松尾忠幸編1986『特別史跡講岐国分寺跡』昭和61年度発掘調査概報 国分寺町教育委員会
 松尾忠幸編1991『特別史跡講岐国分寺跡』平成3年度発掘調査概報 国分寺町教育委員会
 松尾忠幸編1996『特別史跡講岐国分寺跡保存整備事業報告書』国分寺町教育委員会

*なお、上記以外に、40年代に現状変更に伴う香川県教育委員会によって立会調査が実施されたようであるが、現状ではその内容について把握できていない。

これまでに、整備事業に伴う発掘調査を含めた確認調査は35回におよび、その詳細は第2表および第3図のようになる。それらの調査成果によって、近年指定史跡地内における土地利用の状況が明らかになってきた。結論を述べると、確定した地域の西側の史跡地においては、讃岐国分寺跡との関連が指摘されるような遺構は後述する35次調査を除けばほとんど確認されておらず、このことから寺域西側一帯は、史跡地として指定されているもののその価値は未知数である。しかし、全国の国分寺周辺では、国分寺の維持経営のための施設が多数隣接していることが明らかにされており、讃岐国分寺に関しては、周辺地域に関連施設などが確認される可能性も予想されることから、土地所有者から現状変更許可申請が提出される度に、確認調査を実施し、調査成果に基づきながら、保護策等を含めた現状変更の方法を検討し、対応を行っている。

以上のようなことから、現在では、文化庁・香川県教育委員会の指導の下に、史跡地の保護および管理を以下の方向性で進めている。

- (i) 史跡地において史跡公園の整備に伴った発掘調査によって確定された寺域（東西220m、南北240m）に該当する範囲においては、基本的に現状変更是許可しない。
⇒ 現状変更の要望の際に公有地化を行い、その後保存整備を行うための準備を進める（ただし、史跡地内に存在する国分寺、宝林寺の両寺院に関してはこの限りではない。）。
- (ii) 寺域の西側で寺域外となる史跡地においては、現状変更許可申請の提出に伴い、確認調査を実施し、その結果によって現状変更の対応方法等について判断を行う。

今後は、(i)に該当する範囲、特に史跡公園の南側における確認調査を進めながら、保存整備・その後の史跡の活用を考えていくことが大きな課題である。さらに、西側の寺域外の史跡地の取り扱いを含め、国分寺周辺に広がっていたと想定される関連施設や当時の集落等の復元を含めた史跡周辺部での調査も課題となっている。

第2節 調査の方 法

これまでの確認調査は、史跡地内の現状変更によって地下遺構に影響を及ぼすと想定される範囲にトレーンチを設定し、重要な遺構が検出された場合および調査区外に遺構が延びる場合、遺構に影響のない範囲でトレーンチを拡張して調査を行ってきている。検出された遺構は、保護を目的とした調査のためすべての遺構の掘削は行わず、遺構の性格・時期などの把握に必要な部分のみに留めた調査を行っている。ただし、調査区の範囲・遺構や遺物の量、その内容や現状変更の内容などによっては、すべて掘削を行った場合もある。

第3節 調査の成 果

(I) 16次調査（第4図）

今回の調査は、賃貸住宅の建築に伴い、事前に確認調査を実施したものである。当該地は寺域を区画する西側の築地より西へ15m程離れ、昭和61年度に確認調査した掘立柱建物跡の西南方に位置する。発掘調査は、他の発掘調査との関係から、昭和63年11月20日～12月1日まで実施した。対象地区には、南北方向(5.2m×2.8m)と東西方向(11m×2.2m)のトレーンチを2本設置し、調査を行った。なお築地より西へ約10mの位置で設定している。

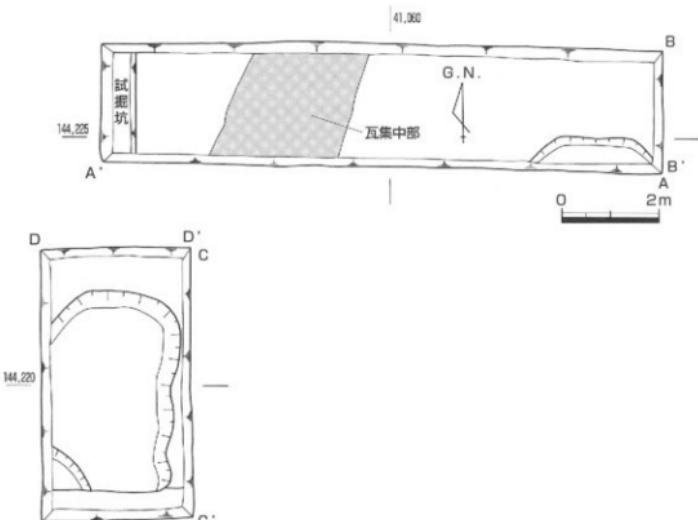
調査の結果、国分寺に関連する遺構は存在しなかったが、講堂跡西方地区でも見られた黒褐色粘質土がこの付近においても広がっていることが確認できた。

(i) 基本層序（第5図）

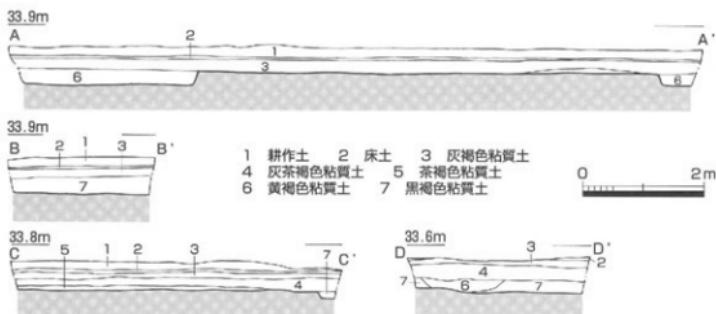
南北トレーンチ

上から耕作土、床土、灰褐色粘質土、灰茶褐色粘質土、黒褐色粘質土と堆積する。

東西トレーンチ



第4図 16次調査遺構平面図 ($S = 1/100$)



第5図 16次調査土層断面図 ($S = 1/80$)

上から耕作土、床土、灰褐色粘質土、黒褐色粘質土の順に堆積する。

(ii) 遺構と遺物

南北トレンチ

中央部で半円状の土坑を検出した。この土坑からは、少量の瓦、土師器、須恵器が出土した。須恵器は、この土坑上面の黄褐色粘質土から出土したものである。また、遺構面である黒褐色粘質土上面からは近世陶磁器片が出土した。

出土遺物（第6図）

SK01から1~10が、覆土から11~14が出土した。なお、先述した近世陶磁器片については、遺物として扱わず、現地に残したようである。

SK01（1～10）

1・2は須恵器で、1が蓋、2が蓋もしくは甕の肩部と考えられる破片である。3・4は土師器で3が壊、4が小皿である。5は丸瓦片で、凹面には布目が残り、凸面はナデ調整によって仕上げている。6～10は平瓦片で、凹面に布目が共通して認められ、凸面は繩目叩き（6～8）、平行叩き（10）によって整形している。6は叩き整形後、ナデ消している。

第2層（11～14）

11・12は土師器片で、11が小皿、12は壺の高台と考えられる。13・14は平瓦片で、凹面には布目が共通して認められ、凸面は繩目叩き（14）、格子目叩き（13）によって整形している。また14は、他の瓦と色調が全く異なる。

東西トレンチ

東南隅で瓦を少量含む土坑が検出されたほかは、特に造構は認められなかった。また、西側付近ではコシテナ2箱分の瓦が出土したが、西面築地の瓦の流れ込みと考えられる。

出土遺物（第7図）

本トレンチからは、15～27の遺物が出土した。15～17は須恵器片で、15は椀、16・17は壺の破片である。18は土師器椀の破片である。19土師質土器の足蓋で外面に煤が付着している。20は土師質土器の鉢もしくは甕などの底部と考えられる。21は軒平瓦で、瓦当面の右側面の破片である。これまでの調査では確認されていない文様で新型式と考えられる。全体の文様構成については不明であるが、半円形が瓦当右隅から同心円状に広がっていく。22は丸瓦片で、凹面には綴じ紐の痕跡が認められる。23～27は平瓦片で、凹面には布目や糸切り痕を残し、凸面は繩目叩き（24～26）、平行叩き（27）によって整形している。

（Ⅲ）まとめ

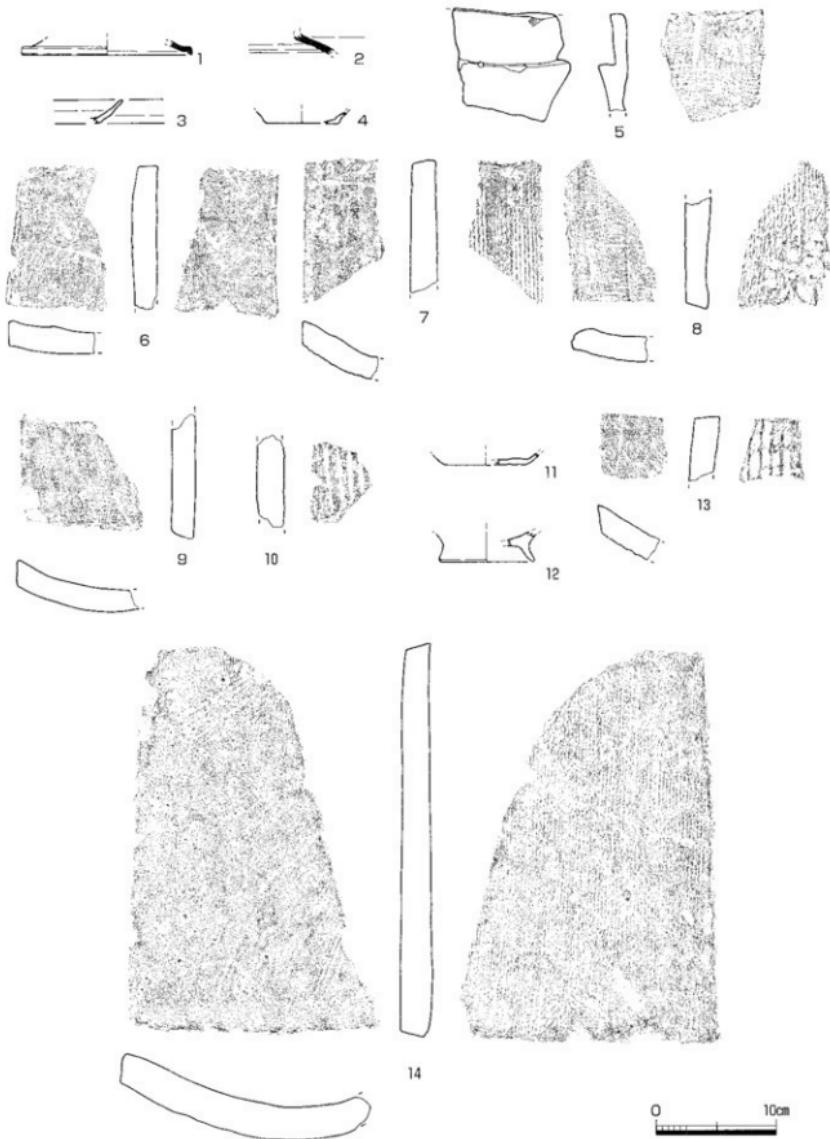
昭和58年度から昭和61年度まで行われた讃岐国分寺跡の発掘調査は、数々の新知見をもたらし、また造構の残存状況が良好であることも判明した。しかし、これらの調査は寺域内における調査であったため、寺域外周辺地域の調査は今回が初めてであった。調査区は建物の基礎部分を避けて東西方向と南北方向にトレンチを設定した。2箇所のトレンチからは少量の瓦が出土したが、造構に伴うものではない。東西トレンチ、南北トレンチとも、その造構面レベルとそれ程比高差はなく、ほぼ旧状を保っていると思われる。以上のことから、西端築地の西側には国分寺に関連する造構の存在が期待されたが、その痕跡は確認できなかった。後世の削平が特に著しいとは考えられず、讃岐国分寺に関連する造構は調査対象地には存在しなかったと考えられる。

（Ⅱ）17次調査

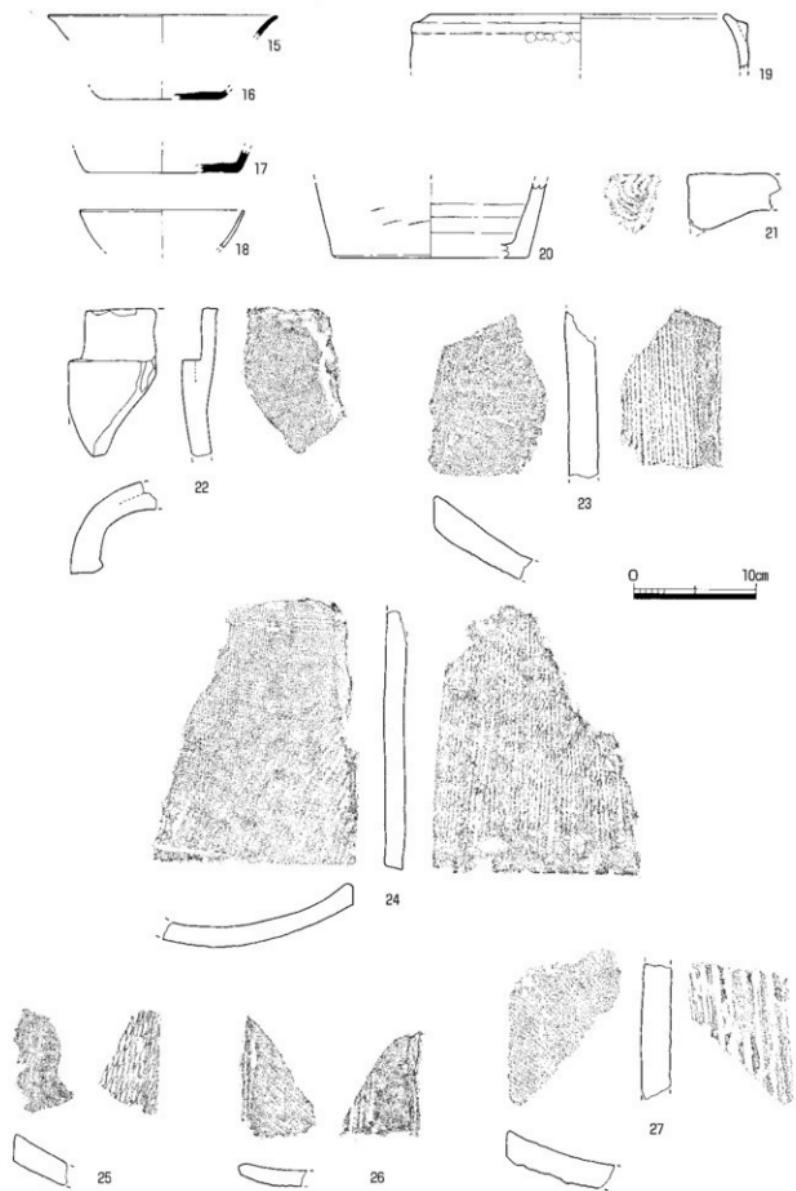
個人の専用駐車場造成工事に伴う確認調査である。当該地は金堂跡の西約110mに位置し、その南側周辺に住宅は建っておらず広い空閑地となっている。今後、この付近の発掘調査を行う重要な指針を与えるものと予想された。調査の結果、地表面まで削平を受けており、特に造構は存在しなかった。調査対象面積は狭く、東西3m、南北4.5mのトレンチを設定した。

（Ⅰ）基本層序（第8図）

上から耕作土、床土、灰褐色粘質土、地山（黄褐色粘質土）と堆積していた。灰褐色粘質土にはブロック状に黄褐色粘質土が混入しており、寺域内でも確認されたが、地表面直上には灰褐色粘質土が堆積していたと考えられる。



第6図 16次調査南北トレンチ出土遺物 (S=1/4)



第7図 16次調査東西トレンチ出土遺物 (S=1/4)

(ii) 遺構と遺物

遺構は確認されていない。遺物は瓦片、土鍋の脚等がわずかに出土した。なお、出土遺物については、細片であったため現地に残したようである。

(iii) まとめ

本調査は、調査面積も狭く遺構の残存状況も悪いため特に顯著な遺構は存在しなかったが、調査対象地付近は広い空閑地となっており、今後の発掘調査では国分寺周辺の集落遺構が検出される可能性は十分予想できる。

(III) 18次調査

平成元年5月15日に、土地所有者から水田畦畔の改修に伴う現状変更申請が旧国分寺町教育委員会に提出された。現状変更対象地が整備地区外であるが、全域の発掘調査を行うこととし、重要な遺構が確認された場合、設計変更によって保存を図ることで合意に達した。これにより平成元年度に調査を実施した。現状変更対象地に南北0.5m、東西50mの調査区を設定した。

(i) 基本層序（第9図）

上層は、上から耕作土、床土、灰褐色粘質土、地山（灰黄色褐色粘質土）の順に堆積している。昭和63年度調査区の北側で調査を行ったが、

本調査地の地山面と約30cmのレベル差があり、水田造成に際して削平を受けていることが分かった。

(ii) 遺構と遺物

第4層灰褐色粘質土上面で小ピットや浅い溝をいくつか確認したほかは、特に顯著な遺構は認められなかった。溝の年代は出土遺物からは明らかにできなかったが、第3層である灰褐色粘質土と溝堆積土が同じであり、近世の地割の溝である可能性が考えられる。また、ピットは径20cm程度のものであり、建物跡にはなりにくい。調査区は地境であるため、第3層には水田地割のための近世瓦片が多量に詰め込まれていた。

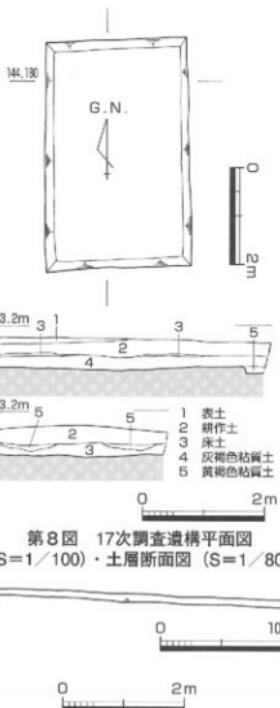
なお、出土遺物は近世瓦片であることから遺物として扱わず、現地に残してきたようである。

(iii) まとめ

今回の調査では、幅50cm程の調査区を東西に長く設定したが、検出された溝やピット群については、讃岐国分寺跡と直接関連した遺構とは考えられず、特に重要な遺構が存在しなかったことが判明した。また、周辺の地形や地山直上の遺物から近世に地形が改変されている可能性が強い。

(IV) 19次調査

本調査地は、指定地域北側からの浸水が著しく、遺構の保存状況に良い影響を与えるものではなく、信



第8図 17次調査遺構平面図
(S=1/100)・土層断面図 (S=1/80)



第9図 18次調査遺構平面図 (S=1/400)・土層断面図 (S=1/80)

房跡の覆屋内の遺構も常に湿润な状態であった。この付近は、近世の「讃岐国名勝図絵」の国分寺境内図には、不増減水という池が描かれている。したがって、寺域北側から浸水してくる水を排水するため寺域北辺中央部に集水升を設置する目的で事前に確認調査を実施した。僧房跡覆屋から北東約30mの位置に南北9.5m、東西9.5mの調査区を設定した。

(i) 基本層序（第10図）

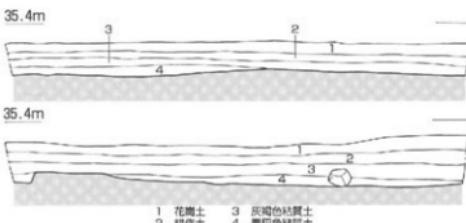
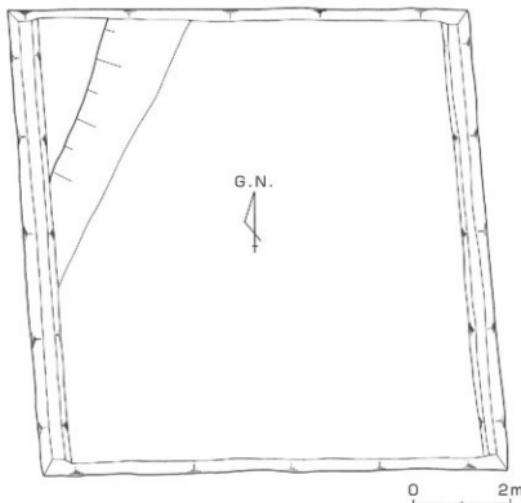
土層は、上から花崗土、耕作土、灰褐色粘質土、青灰色粘質土（滯水層）、地山（黄褐色粘質土）と堆積している。

(ii) 遺構と遺物

調査区北西隅から南東に落ち込みが確認でき、これが近世の池の落ち込みである可能性が強いが、東側で明確な立ち上がりを確認することはできなかつた。ただし、調査区北東で人頭大の石を4～5個検出しておあり、池の護岸に使われていた可能性も考えられる。地山直上の滯水層と考えられる青灰色粘質土は厚さ20cm程度である。

出土遺物（第11～18図）

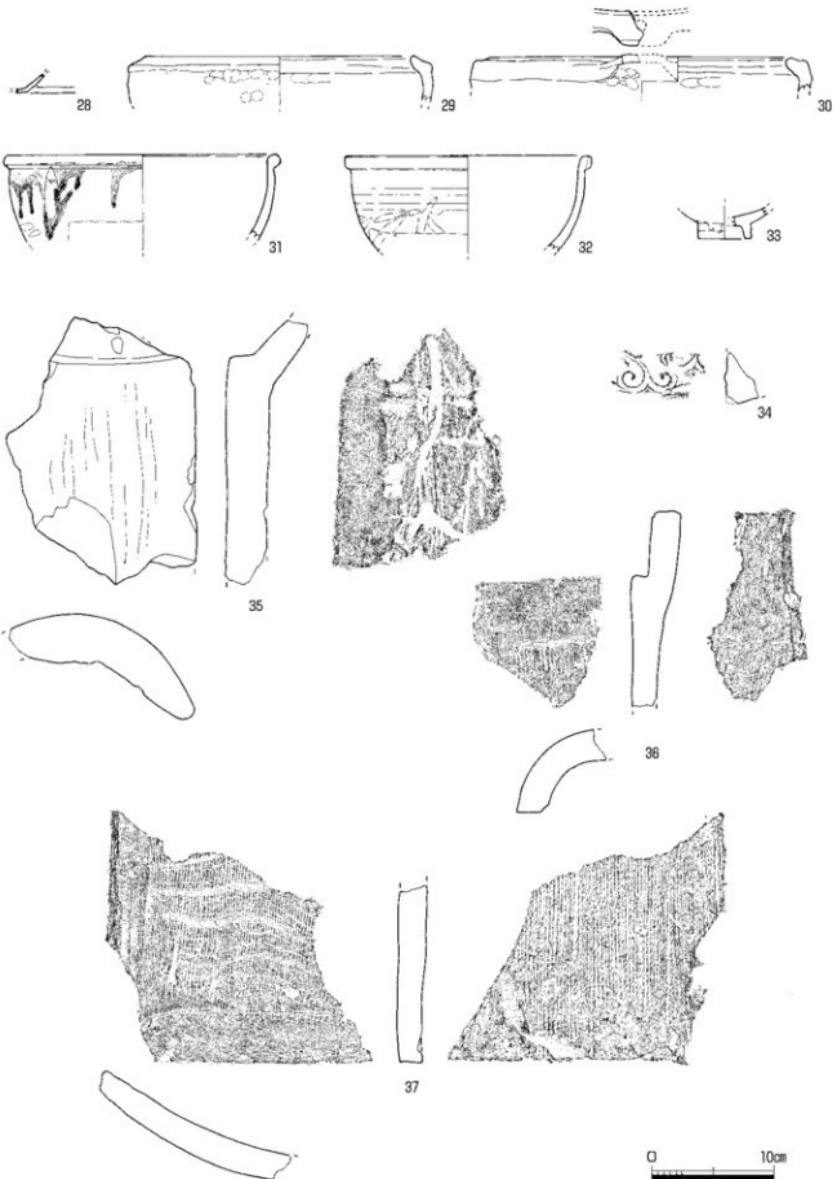
木片や瓦片、土師器片、須恵器片などがコンテナ20箱分出土した。各層別に主な出土遺物を紹介する。染付の陶磁器も出土しており、近世の所産であることが確認できた。28～47は第3層、48～74が第2層、75～79が試掘坑から出土した遺物である。



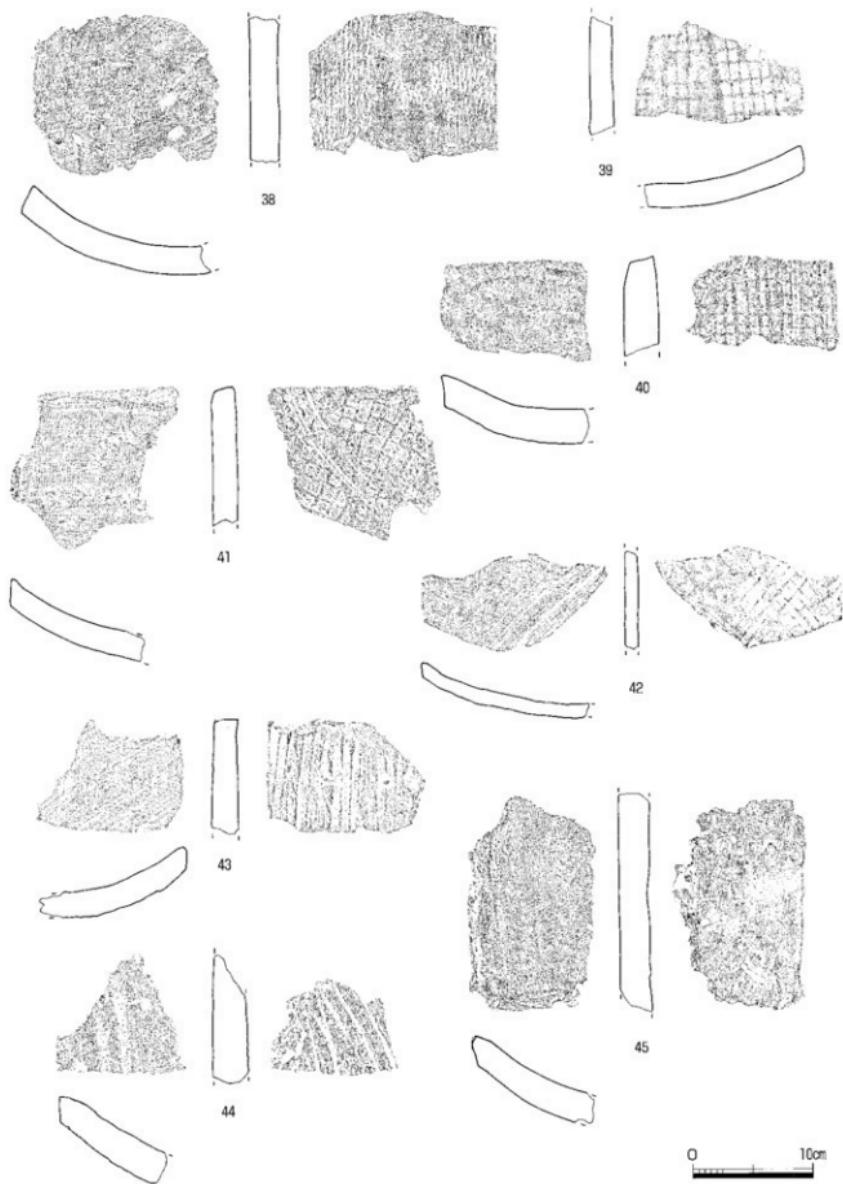
第10図 19次調査構造平面図・土層断面図 (S=1/100)

第3層（第11～13図）

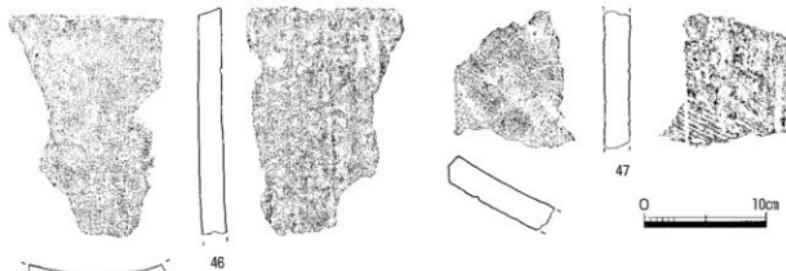
28は土師器坏の破片である。29・30は土師質上器の鍔をもつ土鍋で、外面に煤が多量に付着している。31・32は肥前系陶器の鉢で口縁部は玉縁状を呈し、口縁部を除き、体部上半の内外面に施釉されている。31は、刷毛によって白土を塗っている。33は肥前系磁器の碗で、外面に鉄釉、内面に透明色の釉を施す。34は、軒平瓦SKH01の破片である。35・36は丸瓦で、35は凹面ともに焼しており、凸面はナデ調整によって仕上げている。36は、凹面に布目が残り、凸面は綾位の繩目叩きによる整形後ナデ調整を施している。37～47は平瓦である。凹面は布目が残るもの（37～43、45・46）とナデ調整等による仕上げを行っているものとに分類できる。その中で37は、布の横方向の糸がたわんで糸と糸の間がかなり延びた状況を呈している。凸面は、繩目叩き（37・38）、格子目叩き（39・40）、斜格子叩き（41・42）、平行叩き（43）、繩状工具の平行叩き？（44）、板状工具による叩き（46）によって整形している。45はナデ調整による仕上



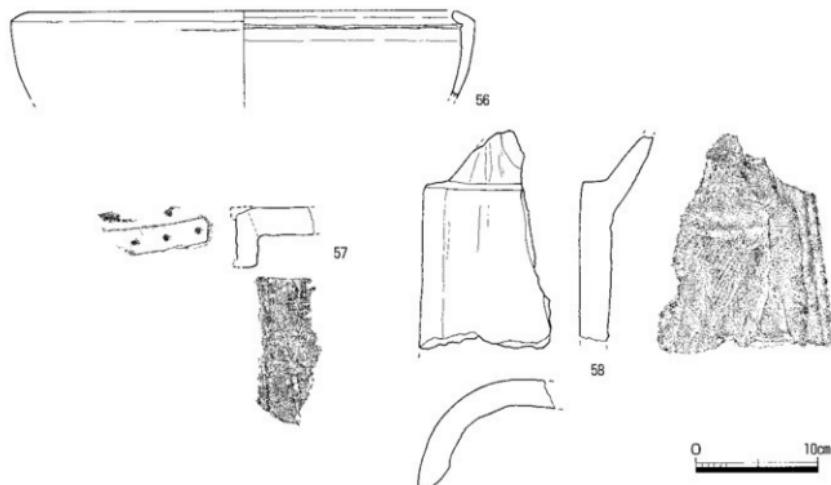
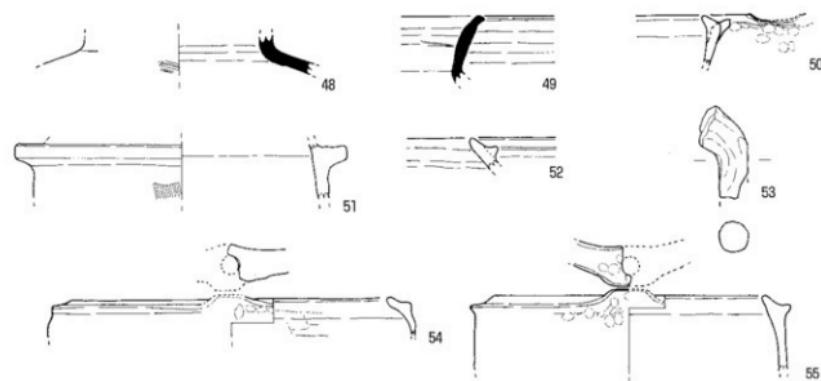
第11図 19次調査第3層出土遺物① (S=1/4)



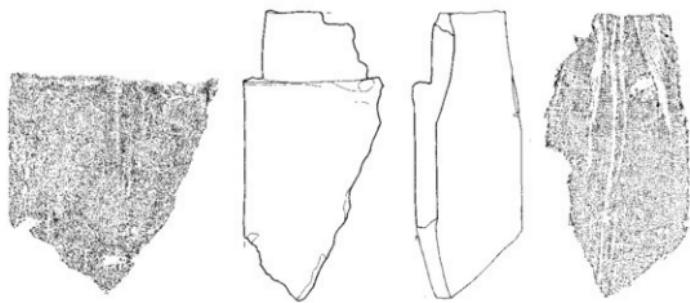
第12図 19次調査第3層出土遺物② (S=1/4)



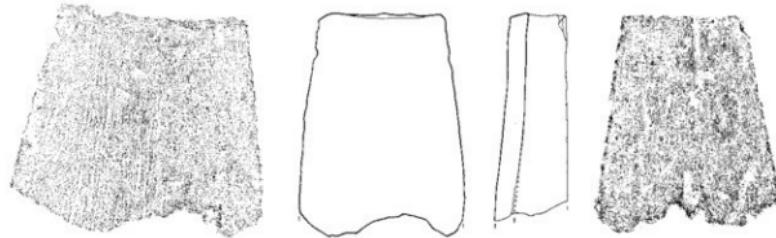
第13図 19次調査第3層出土遺物③ (S=1/4)



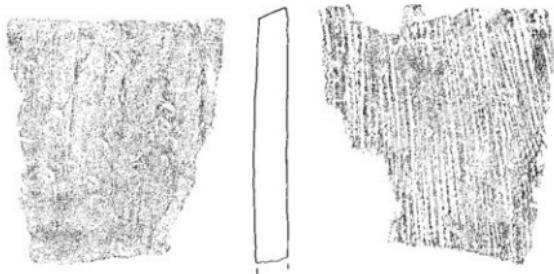
第14図 19次調査第2層出土遺物① (S=1/4)



59



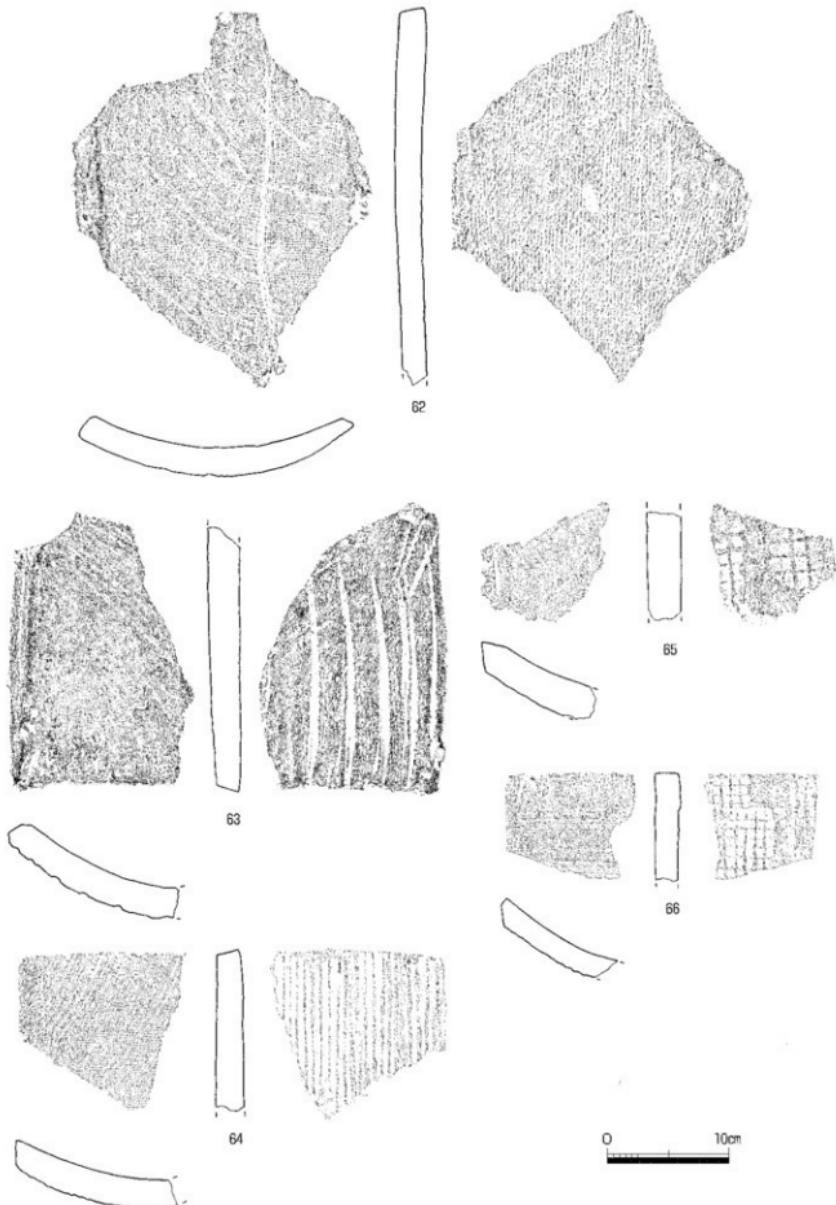
60



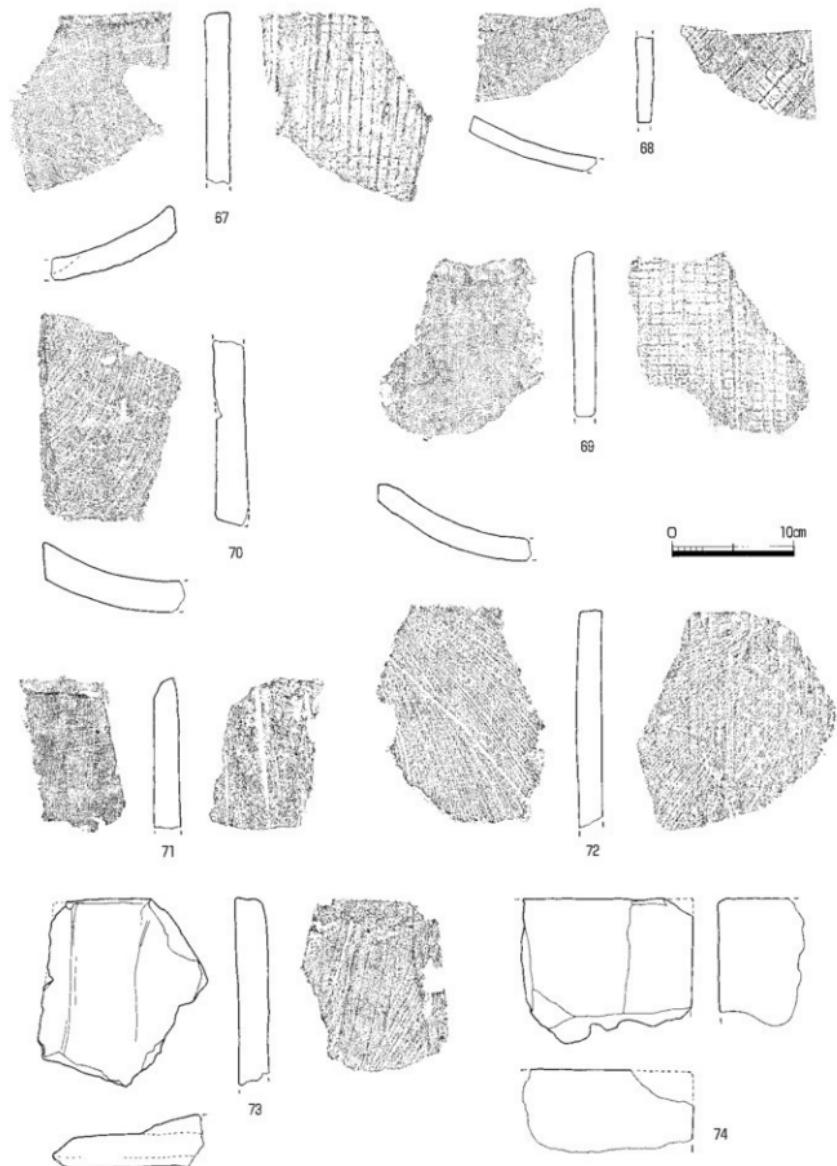
61

0 10cm

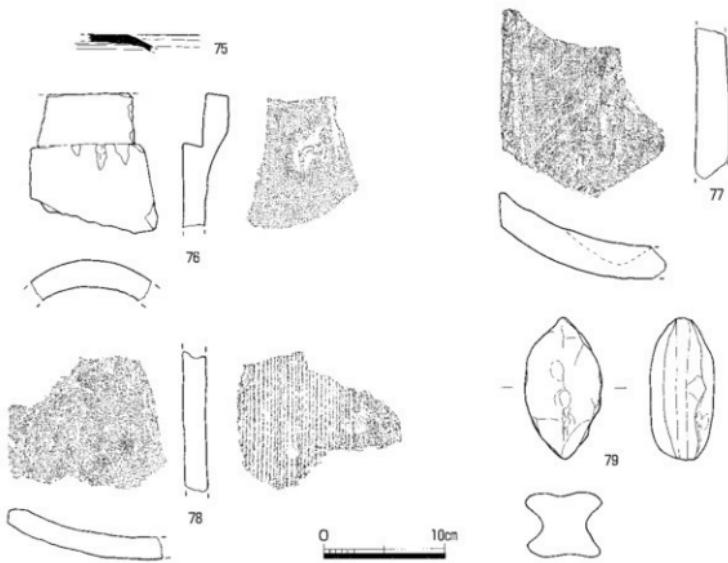
第15図 19次調査第2層出土遺物② (S=1/4)



第16図 19次調査第2層出土遺物③ (S=1/4)



第17図 19次調査第2層出土遺物④ (S=1/4)



第18図 19次調査試掘坑出土遺物 (S=1/4)

げで、47は凸面に粗い刷毛目状の痕跡が残る。凹面には、炭化物が付着している。平瓦の中では24は他のものに比べて非常に薄く、用途もしくは時期が異なるものと考えられる。また、39・40は他のものと異なり灰白色の胎土である。

第2層（第14～17図）

48・49は須恵器片で壺もしくは甕の破片である。50～56は土師質土器で、50が擂鉢、51が土釜、52・53が足釜、54・55が上鍋、56が鉢である。57は連珠文軒平瓦で、SKH21の系統のものであろう。58～60は丸瓦片である。58、59は玉縁式で、60は行基式である。いずれも凹面は布目を残し、凸面はナデ調整によって仕上げられるが、59・60は繩目叩き痕が残存している。61～72が平瓦である。凹面にはいずれも布目が残り、模骨痕（61）や糸切り痕（62～64、67、70、72）、縦じ縦痕跡（62）が認められるものもある。凹面は繩目叩き（61・62）、繩状工具の平行叩き？（63）、平行叩き（64）、格子目叩き（65～69）、板状工具による叩き（71）によって整形が行われている。ただし、67も格子目に含めているが、平行叩きの工具の使用多寡によって擬格子状を呈している可能性も想定される。また70は軒瓦片であると考えられる。その他の72は凹面とともに同様な調整によって整形が行われている。68は他のものより薄く用途もしくは時期が異なる可能性が想定される。73は、特殊瓦と考えられる。凹凸面ともに彫っている。凹面は板状の工具によるナデが施され、凸面には糸切り痕状の痕跡の上からナデ調整を施している。74は塙の破片である。

試掘坑（第18図）

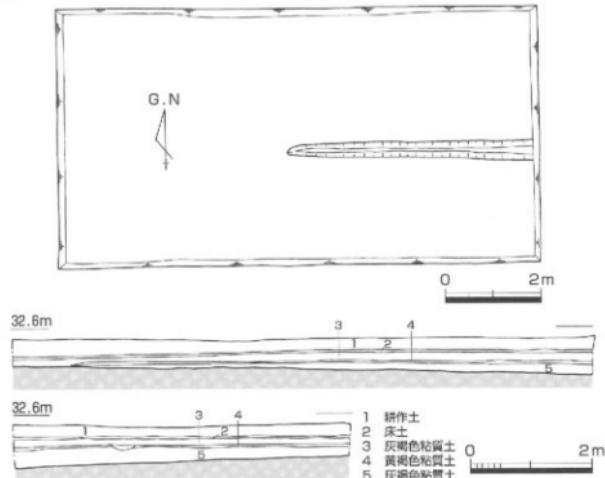
75は須恵器蓋の破片である。76は丸瓦片である。凹面には布目が残り、凸面はナデ調整によって仕上げられている。77・78は平瓦片で、77は非常に厚い。いずれも凹面に布目が残り、凸面は77が繩目叩きによって整形され、78は叩き整形後、ナデ調整によって仕上げられる。79は上鍤である。

(iii)まとめ

本調査区では、近世の池の落ち込みと考えられる遺構以外に全く遺構は存在しなかった。特に削平を受けているとも考えにくく、古代の遺構は存在していなかったものと思われる。昭和59年度の発掘調査では、鐘楼跡基壇中央を南北に断ち切る近世の溝が検出されたが、位置及び時期からこの池状遺構の排水溝である可能性も考えられる。

(V) 20次調査

平成元年9月25日に、土地所有者から家屋新築による現状変更申請が旧国分寺町教育委員会に提出された。現状変更対象地が整備地区外であるため、住宅建設地に限定して調査をすること、調査は、平成元年度に実施し重要な遺構が確認された場合、土地の公有化か設計変更等によって保存を図ること等について合意に達した。これにより平成元年度に調査を実施した。



第19図 20次調査遺構平面図 ($S=1/100$)・土層断面図 ($S=1/80$)

現状変更対象地の東側中央部に南北6m、東西10mの調査区を設定した。

(i) 基本層序 (第19図)

土層は、上から耕作土、床土、灰褐色粘質土、黄褐色粘質土、灰褐色粘質土、地山（灰黃褐色粘質土）の順に堆積している。

(ii) 遺構と遺物 (第20図)

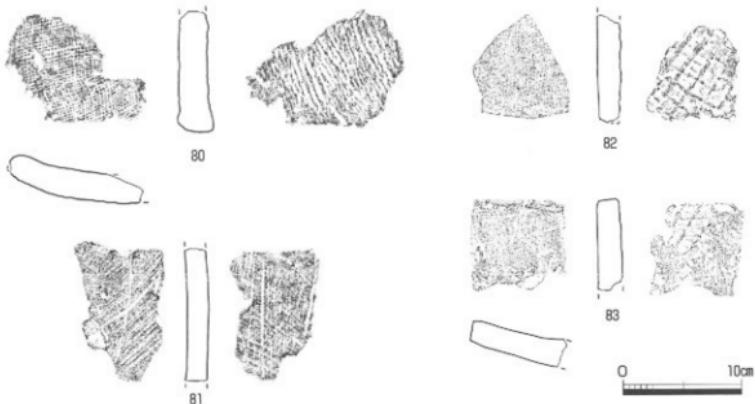
第4層の黄褐色粘質土上面で東西方向の近世の溝1条があるほかは、特に遺構は認められなかった。地形は東から西に向けて緩やかに傾斜しており、地山直上でも近世陶磁器片が出土た。昭和61年度の調査区東側の整備地区の調査では、築地塀基底部・回廊基壇跡を検出したが、本調査地との遺構面のレベル差はほとんどなく、削平されたとは考えにくい。

出土遺物

80~83が出土した平瓦片である。凹面に布目や糸切り痕が残り、凸面は縄目叩き(80・81)、斜格子叩き(82)などによって整形されている。このほか83の凸面に格子目状の圧痕が残る。なお、近世陶磁器片が出土しているが、遺物としては扱わず現地に残したようである。

(iii)まとめ

今回の調査では、寺域外の調査であるため周辺集落に関する遺構の検出が予想されたが、調査区では存在しなかった。また、地山直上の遺物から、近世に搅乱を受けている可能性が強い。昭和63年度から寺域外西側史跡地内で発掘調査を実施しているが、遺構面が削平を受けていないということを考えれば、西側



第20図 20次調査出土遺物 (S=1/4)

築地堀に近い位置であり、まとまった集落は立地しにくい環境にあった可能性が考えられる。

(VI) 21次調査

土地所有者から確認調査の依頼を受け、調査を実施した。

(i) 基本層序 (第21~23図)

3つのトレンチとともに、土層は上から花崗土、耕作土、灰茶褐色粘質土、灰褐色粘質土の順で堆積している。

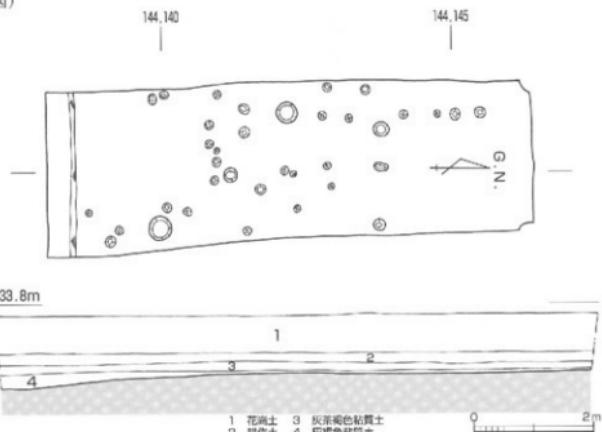
(ii) 遺構と遺物

多数の小型ピット群ならびに溝を検出した。南側トレントの南東隅では、比較的幅の広い溝を検出しているが、詳細については不明である。出土遺物については、記録等がなく詳細は不明である。

周辺の確認調査においても遺物が希薄であることを考慮すると皆無または細片であった可能性が高い。

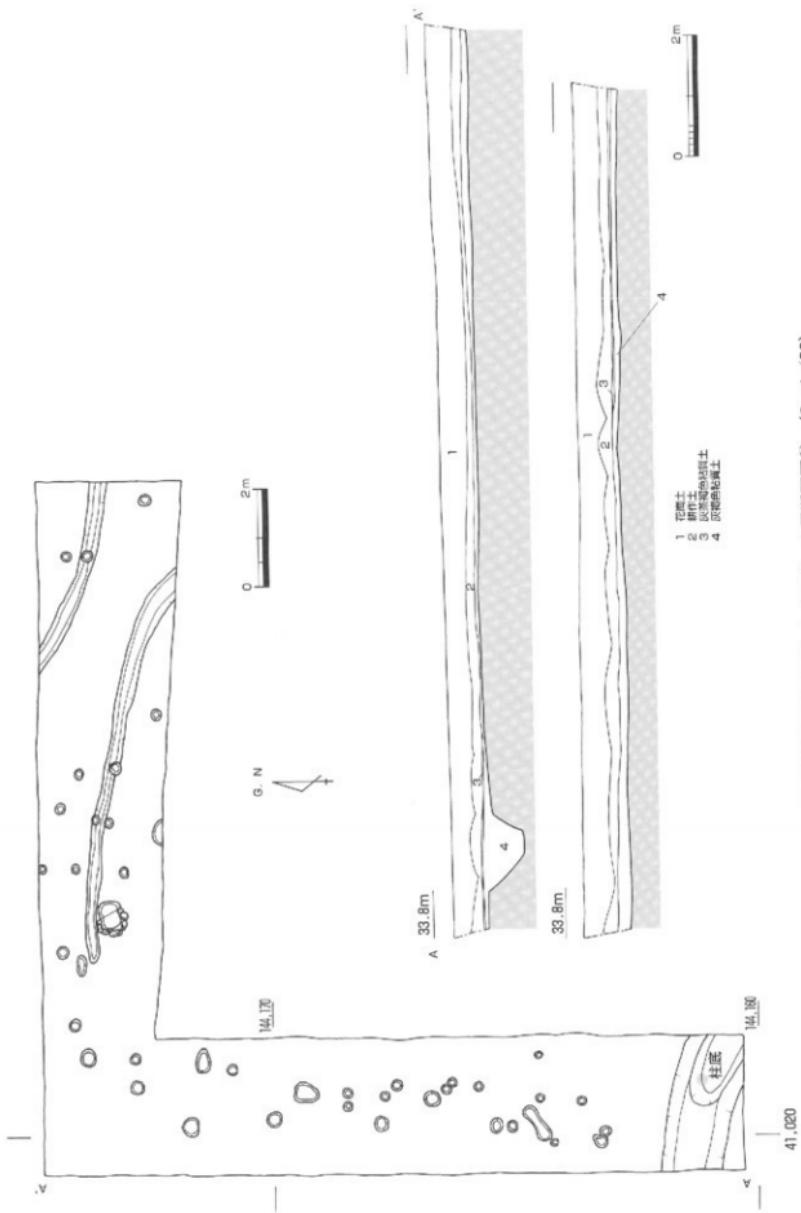
(iii) まとめ

後述する35次調査と近接しているが、今回の調査では特に関連する遺構は認められなかった。

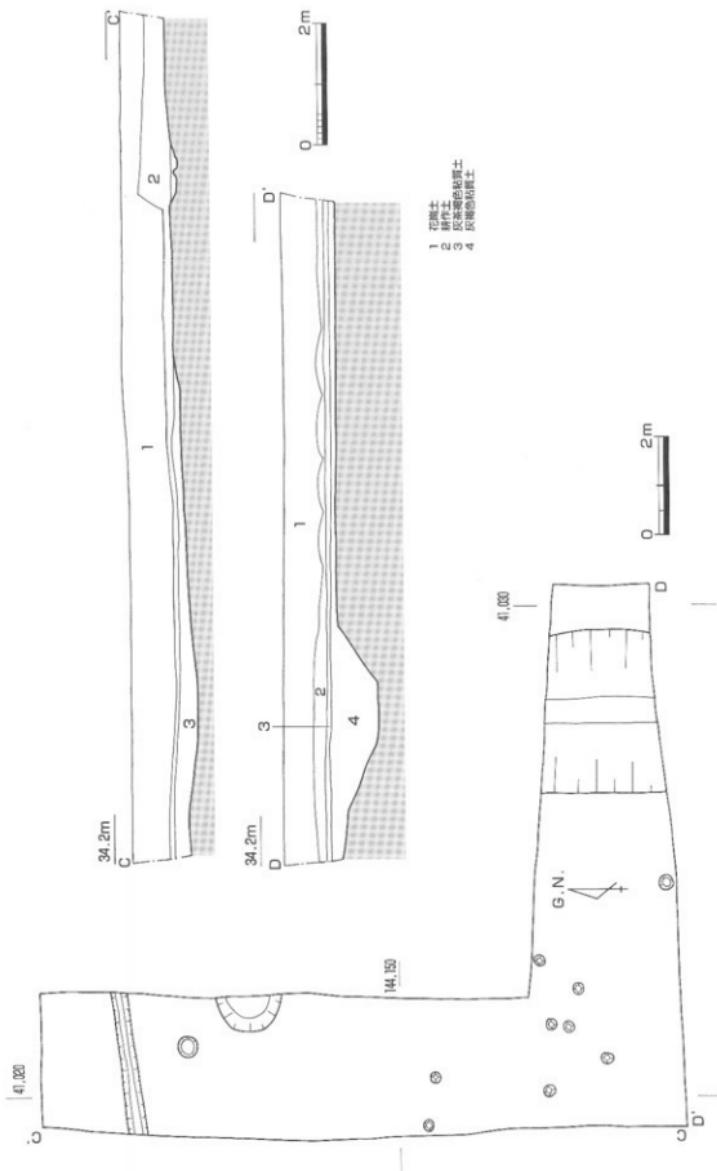


第21図 21次調査遺構平面図 (S=1/100)・土層断面図① (S=1/80)

第22図 21次調査遺構平面図 ($S=1/100$)・土層断面図(2) ($S=1/80$)



第23図 21次調査遺構平面図 ($S=1/100$)・土層断面図③ ($S=1/80$)



(VII) 25次調査

平成3年4月19日に、宝林寺から門改築に伴う現状変更申請が旧国分寺町教育委員会に提出された。門の改築が寺院の機能を維持するための改修と判断されたため、建設予定地に限定して調査すること、調査に際し重要な遺構が確認された場合、土地買上による保存措置を講ぜず設計変更等によって保存を図ることなどについて合意に達した。これにより平成3年度に確認調査を実施した。

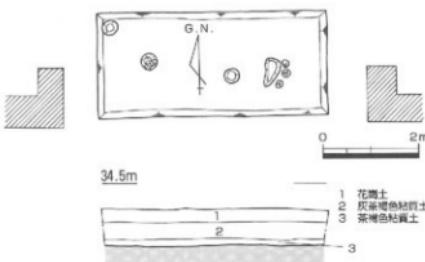
現状変更対象地に南北2m、東西5mの調査区を設定した。

(i) 基本層序（第24図）

土層は、花崗土、灰茶褐色粘質土、茶褐色粘質土、灰黃褐色粘質土（地山）の順に堆積している。表土から約80cm下で地山面を検出したが、地下水による湧き水が著しい。

(ii) 遺構と遺物

地山上面で小さな柱穴がいくつあるほかは、特に顕著な遺構はない。西側の柱穴は3つが隣接し、そのうち2つから斜めに打ち込まれておらず、柱痕が残っている。この柱穴からは陶磁器片が出土しており、近世の所産であることが分かる。そのほか、少量の古代の瓦は出土したようだが、東端築地に使われた瓦の流れ込みであると考えられる。なお、瓦片・陶磁器片については、細片であったり、新しい時期であるため、遺物として取り扱わず現地に残したようである。



第24図 25次調査遺構平面図・土層断面図
(S=1/100)

(iii) まとめ

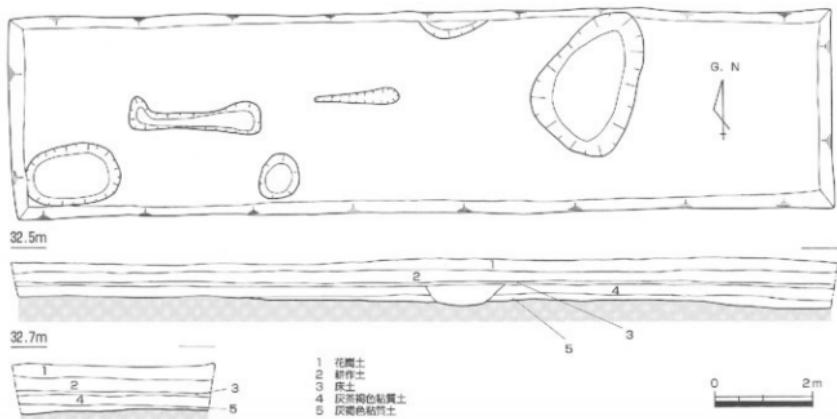
本調査では、過去の隣接する発掘調査の成果から、遺構面がかなり削平を受けていると考えられたが、近世の柱穴を6基検出した。このうち西側の柱穴は斜めに掘られており、建物跡などとは考えにくい。江戸時代初期に描かれた『金比羅參詣名所図会』の中には、斜格子状の垣が寺域を画しているのが確認できる。今回の柱穴もそうした垣に伴う柱穴である可能性が高く、現在の土塀の延長線上にあることから近世の宝林寺の寺域を画する跡であったと考えられる。

(VIII) 26次調査

平成3年8月28日に、大栄工業有限会社からアパート新築による現状変更申請が旧国分寺町教育委員会に提出された。現状変更申請地が整備地区外であるため、建設予定地に限定して調査すること、調査に際し重要な遺構が確認された場合、土地買上か設計変更によって保存をはかることなどについて合意した。現状変更対象地に南北4m、東西16.5mの調査区を設定して、確認調査を実施した。

(i) 基本層序（第25図）

土層は、上から花崗土、耕作土、床土、灰茶褐色粘質土、灰褐色粘質土、地山（灰黃褐色粘質土）の順に堆積している。



第25図 26次調査遺構平面図・土層断面図 ($S=1/100$)

(ii) 遺構と遺物

灰黒褐色粘質土上面で中世の上坑があるほかは、特に遺構は認められない。地形は、南から北に緩やかに傾斜しており、遺構面はかなり削平を受けている可能性が強い。平瓦、丸瓦、土師器、須恵器片がコンテナ1箱分出土した。

出土遺物（第26図）

遺物は、すべてトレンチ覆土中から出土したものである。84・85は須恵器片で、84は壺の肩部、85は高壺の壺部と脚部の接合部の破片である。86・87は土師器壺の破片で、88～94は土師質器である。88は擂鉢、89～91は足釜、92は土鍋、93は火鉢の脚部、94は野盃である。95は丸瓦の破片で、凹凸面ともに焼している。凹面に布目が残り、凸面はナデ調整によって仕上げる。96～100が平瓦である。凹面には布目を残すもの（96～99）とナデによって仕上げるもの（100）とがある。凸面は、繩目叩き（97・98）、格子目叩き（96）、平行叩き（99）によって整形が行われている。100の凸面は叩き整形後、ナデ調整によって仕上げている。

(iii)まとめ

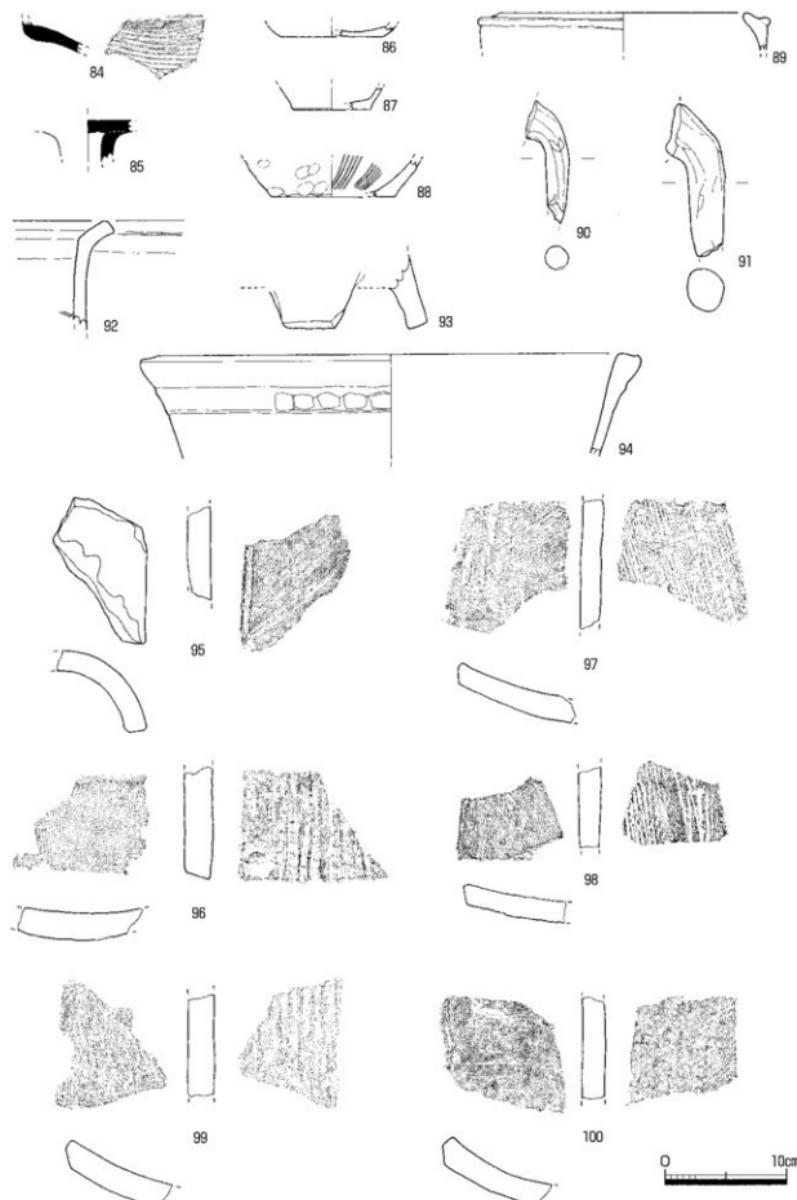
今回の調査では、数点の瓦の出土は認められたものの、讃岐国分寺跡に関連する遺構は認められなかつた。

(IX) 27次調査

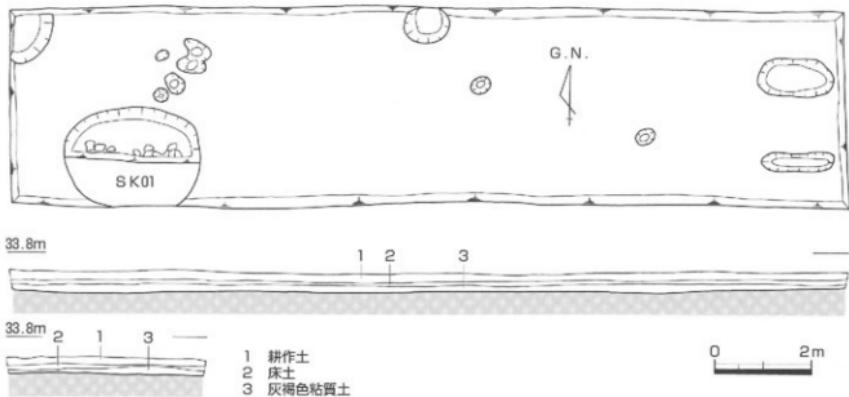
土地所有者から史跡地西端でアパート建設に伴う現状変更の申請があったため、事前に確認調査を実施することとなった。ただし、今回の予定地が寺域の外に位置しているため、調査に際して重要な遺構が確認された場合、土地買上か設計変更によって保存をはかることについて合意した。調査対象地の中央に東西方向のトレンチ（4m×17m）を設定し、調査を行った。

(i) 基本層序（第27図）

上層は上から、耕作土、床土、灰褐色粘質土、地山（灰黒褐色粘質土）の順に堆積している。



第26図 26次調査出土遺物 (S=1/4)



第27図 27次調査遺構平面図・土層断面図 (S=1/100)

(ii) 遺構と遺物

調査区西側で比較的多くの瓦が出土したが、近世の土坑（SK01）や焼土が存在するほかは、特に遺構はない。また、瓦は完形品が少なく、細片のものがほとんどで、2次堆積によるものと考えられる。

出土遺物（第28・29図）

101・102がSK01出土で、その他はトレーンチ覆土中からの出土遺物である。

SK01（101・102）

101・102は瀬戸・美濃系陶器で、101が広東碗で、102が腰錫碗ある。後者は、外面に鉄釉、内面には透明色の釉を施している。

表土・覆土（103～119）

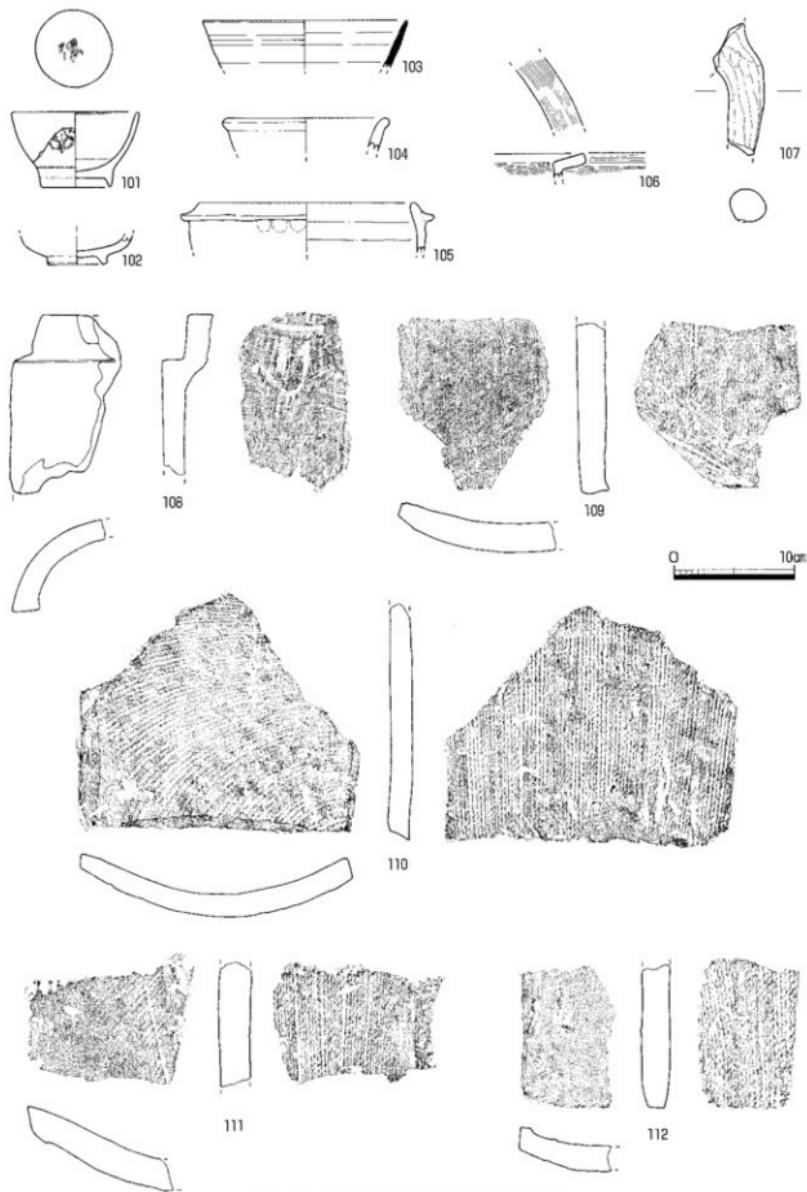
103は、須恵器壺の破片である。104は須恵質の壺の口縁部で、備前焼と考えられる。105～107は土師質土器で、105・107が足釜、106が土鍋の破片である。108が丸瓦で、109～117が平瓦である。平瓦の凹面は布目、糸切り痕（110・111・115・116）、模骨痕（109）が残り、109は丁寧なナデ調整によって仕上げている。凸面は、繩目叩き（109～113）、平行叩き（114）、格子目叩き（115・116）による整形である。117は側面付近のみに3条の波状の沈線を施し、その他はナデによって仕上げる。胎土や焼成も他の古代の瓦とは異なる。118は薄く、丸瓦のように湾曲した瓦で、凹面に布目、凸面に平行叩き痕が認められる。ただし、平瓦によく見られる平行叩き痕とはやや異なる。119は壇の破片である。

(iii) まとめ

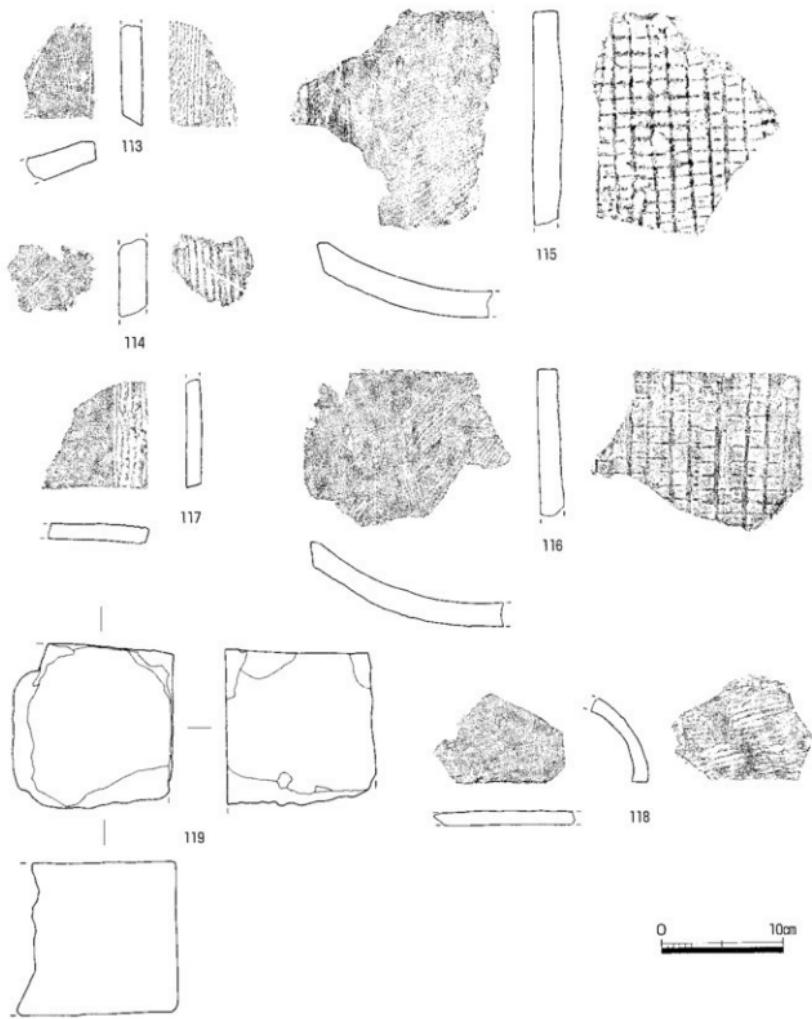
今回の調査では、比較的多くの瓦が出土したが、遺構に伴うものではなく、また、特に重要な遺構は認められなかった。地形的に遺構面が削平されているとは考えにくい。

(X) 28次調査

平成6年2月10日に宝林寺から現本堂北側に講堂を建てたいという旨の打診があった。旧国分寺町教育委員会では講堂の新築は寺院の機能を維持するために必要不可欠なものと考えられたが、保存管理指針でいう改修とは判断できなかった。国分寺町では史跡地の保存整備事業を実施しており、一般民家については家を建替える際には土地の買上げによる保存措置を講ずることでの住民からも理解を得ている。しかし、宝林寺の講堂建設予定地は伽藍中枢部からかなり離れ、遺構が希薄な部分と考えられたことから、史跡の



第28図 27次調査出土遺物① (S=1/4)



第29図 27次調査出土遺物② (S=1/4)

内容を把握するために確認調査を実施することとした。

調査に際し、重要な造構が確認された場合、土地買主による保存措置を講ずるが、特に造構が認められない場合は、再度協議し、できるだけ宝林寺の意思に沿った形で現状変更に対処することで合意した。講堂建設予定地に南北10m、東西10mの調査区を設定した。

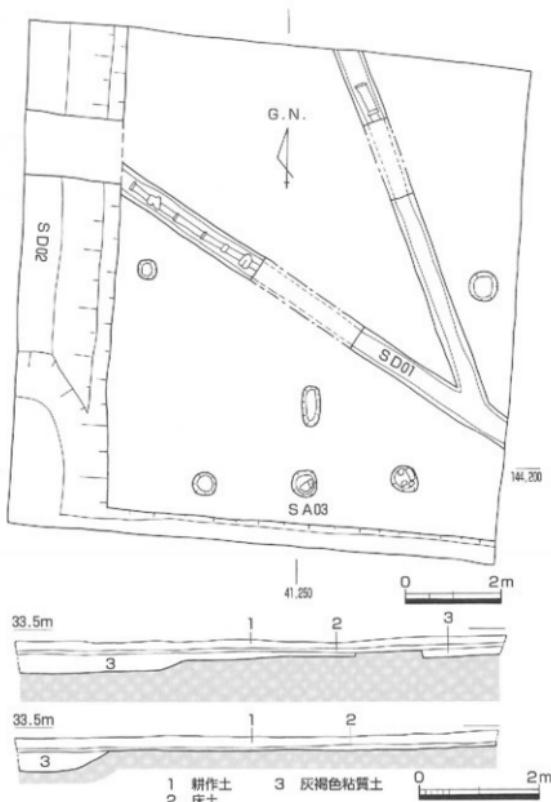
(i) 基本層序（第30図）

土層は、上から耕作土、床土、灰褐色粘質土、地山と堆積している。

(ii) 遺構と遺物

調査区中央部で放射状の暗渠排水SD01（昭和33年頃のもの）が検出された。また、西端では、幅1mの溝SD02を確認した。出土瓦から近世の所産であることが分かった。昭和56年度に宝林寺の家屋増築に係る確認調査においても近世の湿地帯を確認しており、一連の遺構と思われる。南側では、柱穴SA03を検出した。柱の芯間距離は2mであり、古代の瓦や塘が投入されていた。出土土器から平安時代末期頃のものと考えられる。

地形は北側より1m程低い場所で、昭和59年度に発掘調査を行った東大門推定地と同様に水田造成に際して遺構面がかなり削平されたものと考えられる。



第30図 28次調査遺構平面図・土層断面図 ($S=1/100$)

今回の調査では、古代の遺物が少なく、特に重要な遺構も認められなかった。全国的にみても国分寺跡における東大門推定地の内側で重要な遺構が検出された例は少なく、遺構が希薄な場所であったと思われる。また、地形的にも遺構面が削平を受けていることが明らかとなった。

(X I) 29次調査

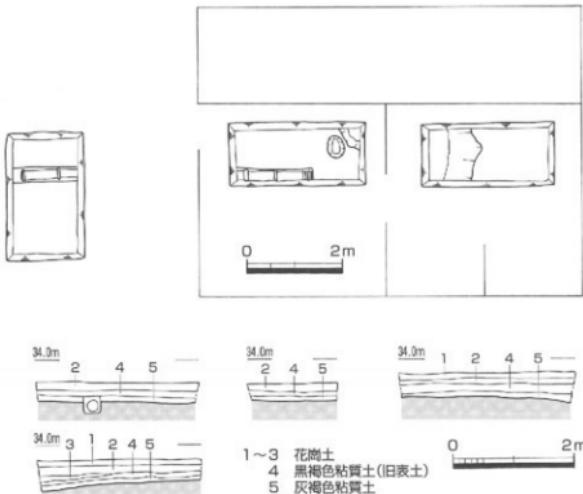
平成7年に土地所有者から旧国分寺町都市計画課に、寺城西側の史跡地で借家の建築確認申請が提出された。都市計画課から国分寺町教育委員会にその旨の連絡があり、所有者に確認すると、昭和63年すぐにすぐ北側で現状変更に伴う確認調査を実施しており、隣接地であるため今回は問題がないと判断して国分寺町教育委員会に連絡しなかったとのことであった。現地ではすでにコンクリート基礎を敷設しており、発掘調査場所等について県の指導を求めた。その結果、コンクリート基礎内の発掘調査を実施することとし、再度所有者と協議することとした。しかし、特に重要な遺構が認められない場合は、所有者の意思に沿った形で現状変更に対処することで合意に達した。コンクリート基礎内と西側3ヶ所にトレンチを設定した。

(i) 基本層序(第31図)

現地は既に厚く花崗土で整地されており、約40cm近く盛り土されている。土層は、その花崗土の下から、黒褐色粘質土(旧表土)、灰褐色粘質土、地山(黄褐色粘質土)となる。

(ii) 遺構と遺物

東側のトレンチでは、東から西へと傾斜しているが遺構とは考えられなかった。そのほか特に遺構は認められなかった。中央と西側トレンチでは現代の暗渠排水溝を検出したが、それ以外の遺構は認められなかった。旧表土



第31図 29次調査遺構平面図(S=1/100)・土層断面図(S=1/80)

から、現代瓦が出土しただけで、古代の遺物は認められなかった。

(iii) まとめ

今回の調査では、古代の遺物は確認されず、また、遺構も認められなかった。すでに、周辺では昭和63年度、平成2年度と現状変更に伴う確認調査を実施しているが、古代の遺構は確認されていないことから、この付近には、特に古代に関連のある施設等はない可能性が考えられる。

(X II) 30次調査

平成8年7月24日に土地所有者から旧国分寺町教育委員会に、寺城西側の史跡地で駐車場造成の現状変更申請が提出された。その内容が駐車場の造成であり、特に遺構に影響を与えるものではないと考えられたが、香川県教育委員会の指導を仰ぐこととした。協議の結果、当該地付近の基礎資料を得るために確認調査を実施することとした。調査の結果、重要な遺構が確認された場合、本格的な発掘調査に取りかかることとし、再度、所有者と協議することとした。しかし、特に重要な遺構が見られない場合、所有者の意思に沿った形で現状変更に対処することで合意した。調査においては、対象地のほぼ中央に東西9m、南北3mの調査区を設定し実施した。

(i) 基本層序(第32図)

現地は雑種地で近年まで家が建っていたようで、その残土の30cm大の石や瓦片が残っていたため、表土は機械を使って取り除いた。土層はその下から、黒褐色粘質土(表土)、地山(茶褐色粘質土)となっている。

(ii) 遺構と遺物

調査区中央では、土坑に現代の瓦や礫が充填されていた。また、東側では南北溝、西側で柱穴を検出したが、比較的新しいものと考えられる。それ以外、特に顯著な遺構は認められなかった。旧表土から現代瓦を出土しただけで、古代の遺物は出土していない。

(iii) まとめ

今回の調査では、古代の遺物は出土せず、また、重要な遺構も認められなかつた。これまでの調査から讃岐国分寺跡の南北半分は北半分に比べて遺構の残存状況はあまり良くないと考えられるが、遺構面は特に削平は受けていない。

(XIII) 31次調査

平成8年2月26日に土地所有者から旧国分寺町教育委員会に寺域西側の史跡地で家屋増築の現状変更申請が提出された。その内容は、家具を収納する部分のみ建物を増築するというものであった。平成5年にはすぐ西側で現状変更に伴う確認調査を実施しており、重要な遺構は存在しなかつた。対象地には大きな庭石があると同時に、コンクリート塀で囲まれております。広い範囲を調査することはできない状況であった。香川県教育委員会との協議の結果、当該地付近の基礎資料を得るために、調査範囲は狭いが確認調査を実施することとなった。そのため、庭石等を避け調査区を設定したことから変則的なトレンチ設定での調査となった。

(i) 基本層序 (第33図)

土層は、上から花崗土(表土)、灰褐色粘質土、地山(黒褐色粘質土)となる。

(ii) 遺構と遺物

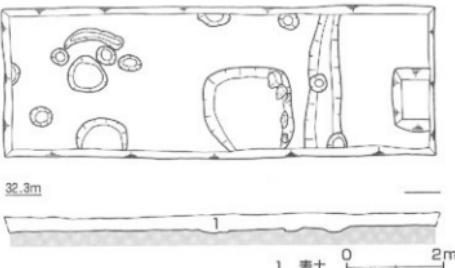
遺構・遺物は全く確認できなかった。地山面の標高は約33.5mとなり、平成5年の調査で確認したすぐ西側の地山面との比高差は約40cmとなる。

(iii) まとめ

今回の調査では、調査範囲が狭く、地山面の標高および土層を確認するにとどまった。寺域内の調査では、黄褐色粘質土、黒褐色粘質土、灰褐色粘質土の順に地山が堆積していることが判明しているが、今回検出した地山は、黒褐色粘質土であり、遺構面は若干削平を受けている可能性が想定される。

(XIV) 32次調査

平成12年12月12日に土地所有者から個人住宅新築に係る現状変更申請が提出された。旧国分寺町教育委員会では、現状変更申請予定地が整備対象外地区であり、建設予定地に限定して調査をすること、調査に



第32図 30次調査遺構平面図・土層断面図 (S=1/100)



第33図 31次調査遺構平面図・
土層断面図 (S=1/40)

際して重要な遺構が確認された場合、土地買上げか、設計変更によって保存を図ることなどについて合意に達した。

家屋建設予定地に南北72m、東西8mのトレンチを設定し、調査を行った。

(i) 基本層序（第34図）

土層は、上から耕作土、灰褐色粘質土、地山（灰黄褐色粘質土）となる。

(ii) 遺構と遺物

現代の土坑やピットが認められたが、柱穴として揃うものはなかった。

(iii) まとめ

今回の調査では、重要な遺構は確認できず、また、遺物も現代の瓦片を出土したにとどまった。また地形的に、一段上の水田より約1m低く、表土の下は地山が認められるなどから、水田造成に際して削平を受けている可能性が強いことが明らかになった。

(XV) 33次調査

平成14年3月29日に土地所有者から個人住宅新築に伴う問い合わせがあった。古い家屋を撤去し、新たに家屋を建設しようとするものであった。協議の結果、現状変更申請予定地が整備対象外地区であり、建設予定地に限定して調査すること、調査に際して重要な遺構が確認された場合、土地買上げか設計変更によって保存を図ることなどについて合意に達した。家屋建設予定地に南北5m、東西8mのトレンチを設定し、確認調査を行った。

(i) 基本層序（第35図）

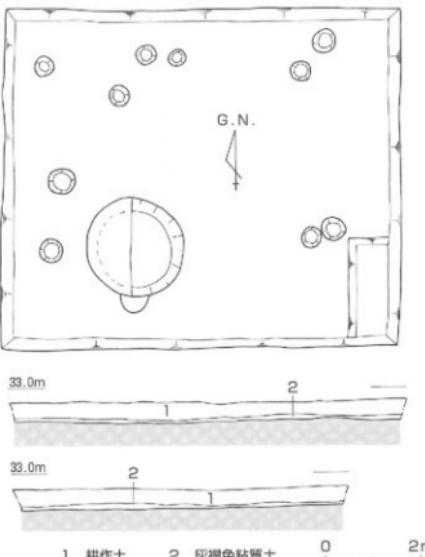
土層は、上から表土、床土（黄褐色粘質土）、灰褐色粘質土、地山（灰黄褐色粘質土）となる。周囲の地形より約70cm低い。

(ii) 遺構と遺物

調査区東側の土坑からは戦前の家屋に使用されていた瓦が多く出土したが、中央、西側の土坑からは特に遺物は出土しなかった。その他にもピットは検出されたが、柱穴として揃うものは認められなかった。すぐ北側で昭和63年度に調査を実施しているが、標高からも削平を受けているとは考えられない。

(iii) まとめ

今回の調査では重要な遺構は認められず、また、遺物も現代の瓦片を出土するにとどまった。寺域西側墓地中央部西隣接地においては、14・16・20・29・33次と5回の調査を実施したが、いずれも古代の遺物や遺構が検出されなかったことから、堀跡一帯には古代の讃岐国分寺に関連する施設は存在しなかったものと考えられる。



第34図 32次調査遺構平面図・土層断面図 (S=1/100)

(XIV) 34次調査

本調査は、宝林寺の庫裏増築工事に伴い現状変更許可申請が国分寺町教育委員会に提出されたことを契機とする。対象地は寺域内であったが、宝林寺の寺院機能を維持するために必要不可欠であると判断したため、28次調査と同様に、建設予定地に限定して調査すること、調査に際し重要な遺構が確認された場合、土地買主による保存措置を講ぜず設計変更等によって保存を図ることなどについて合意に達した。これにより平成16年度に調査を実施した。

対象地の平面形に沿ってL字形にトレチを設定し、遺構を確認した西側については、調査区を対象地全面に拡張して実施した。

(i) 基本層序（第36図）

基本層序は、造成土（花崗土）下に旧耕作土ないし近代の造成土（暗灰黄色粘質土）を認め、19世紀前半以降の整地層である灰黄褐色粘質シルトおよび灰色粘質土が堆積している。そして、暗褐色粘質土（6層）を経て、地山である黄褐色粘質土となる。なお、一部ではあるが、地山直上に近世段階の整地層（灰褐色粘質土）が残っていた。

(ii) 遺構と遺物

遺構は基盤層ないし整地層（7層）上面で検出した。遺構の大半は出土遺物から、19世紀前半ないし近・現代に属し、「讃岐国分寺跡」に関連した遺構は確認できなかった。なお、SX03については、出土遺物が確認できなかったが、埋土の特徴から19世紀前半の所産と考えられる。

SD01（第37図120～129）

120は、肥前系磁器の青磁皿で、内面見込み部の軸を蛇の目状に搔きとっている。その部分には砂粒が付着している。121は、磁器碗で、体部下半部に沈線状の文様がある。122は京・信楽系陶器の端反碗で口縁部に縁軸、体部に灰軸をかける。19世紀代に比定できる。123は軒平瓦のSKH05Aの破片である。124は軒丸瓦で巴の尾の一部と4つの珠文が遺存している。125は丸瓦の破片である。凹面に糸切り痕跡を残し、凸面はナデによって仕上げている。126～129は平瓦で、いずれも凹面には布目が残り、凸面は粗い斜方向の繩目叩き（126）、縦方向の繩目叩き（127・128）、平行叩き（129）によって整形を行っている。

SD02（第37図130～132）

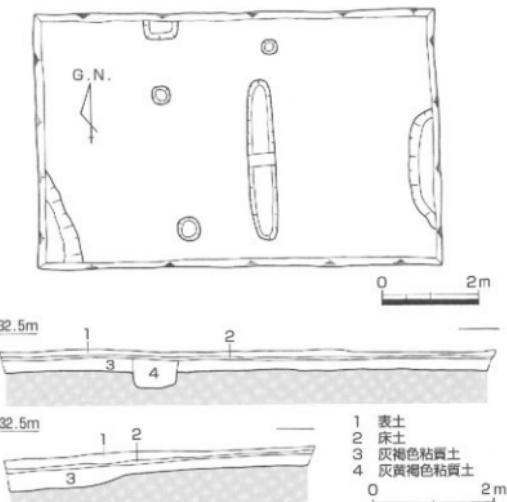
130は土師質土器で、器種については不明であるが、高台がつくものか、蓋となる可能性が考えられる。内面には粗い刷毛目状の痕跡が認められる。131は軒平瓦で、中心飾りは不明であるが、唐草が上下に2回転する。胎土は緻密で淡黄茶褐色を呈する。132は平瓦で凹面に布目が残り、凸面は繩目叩きによって整形されている。

SP01（第38図133）

133は、陶器の行平蓋である。生産地については不明である。

SX02（第38図134～137）

134・135は、肥前系磁器で134は青磁染付蓋で18世紀第3四半期、135は碗で19世紀中葉。136は丸瓦で、



第35図 33次調査遺構平面図(S=1/100)・土層断面図(S=1/80)

内面には、模骨痕が残り、外面は板状の工具でナデ調整を施すことで表面を平滑に整えている。137は平瓦で、凹面はナデ調整を施しているが、一部に糸切り痕跡状の跡が認められる。凸面は綱目叩きによって整形されている。埋没時期は、磁器などから19世紀中葉頃と考えられる。

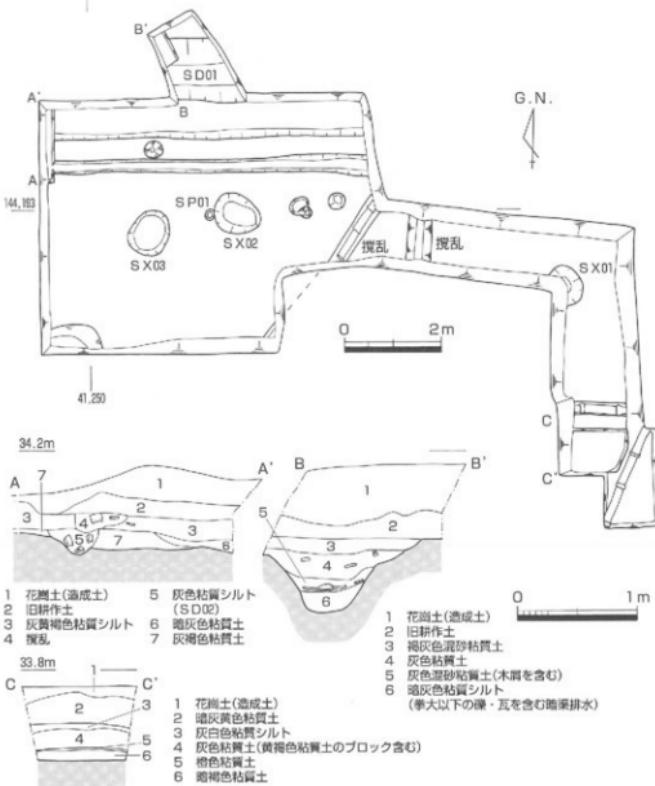
覆土出土土器 (第38図138~145)

138・139は須恵器で138が高台を有する壺で、外面が茶褐色を呈し、139は直口壺の口縁部である。140~144は磁器で、140

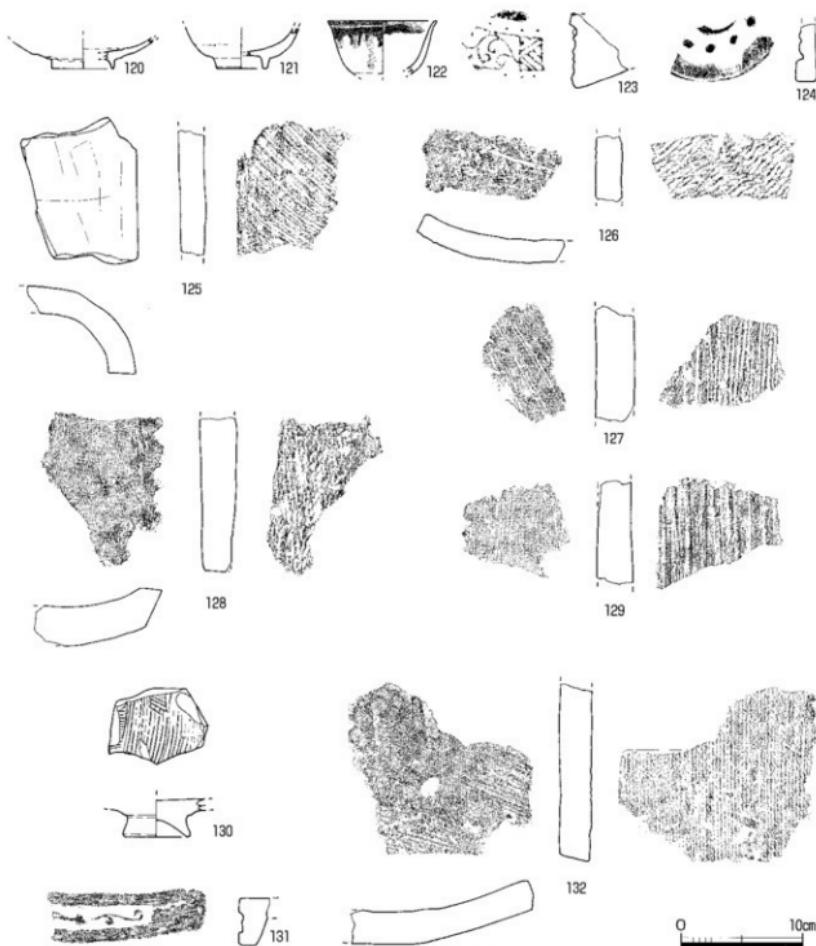
が肥前系磁器の蓋で、高台脇にかなり形のくずれた「○×」文が認められ、高台内には「□春」という銘が残されている。これは「富貴長春」「永保長春」となる可能性が高く、銘から17世紀末~18世紀全般のなかで位置づけられる。141は京・信楽系陶器の小杉碗で、19世紀前半。142は肥前系磁器の青磁染付碗で、143は瀬戸美濃系磁器の端反碗である。144は瀬戸美濃系陶器の水甕の底部で、外側に灰釉を施釉している。内底部には目痕が残る。145は軒丸瓦である。巴の尾は短く巻き込み、珠文数は9個に復元できる。丸瓦部の接合痕が残る。

(iii)まとめ

対象地は、特別史跡諸岐国分寺跡の東端部に位置する。現存する伽藍配置や過去の調査例によれば、主要伽藍配置は寺域の西半部に集中し、対象地を含む東半部には明確な遺構は確認されていない。本確認調査の結果、検出した遺構はいずれも近世に属し(19世紀前半)、古代国分寺に関連する遺構は確認できなかった。地形的には東半部では溜水状態を示す埋土を認め、西半部では遺構検出面直上に近世包含層(4層)ないし旧耕作土(2層)を認めることから、西から東へ傾斜する旧地形が復元でき、西半分については削平を受けた状況が復元できる。こうした旧地形と遺構の状況から、国分寺に関連した遺構は削平により消失したか、遺構として認識できない畠等であったと考えられる。



第36図 34次調査遺構平面図 (S=1/100)・土層断面図 (S=1/40)

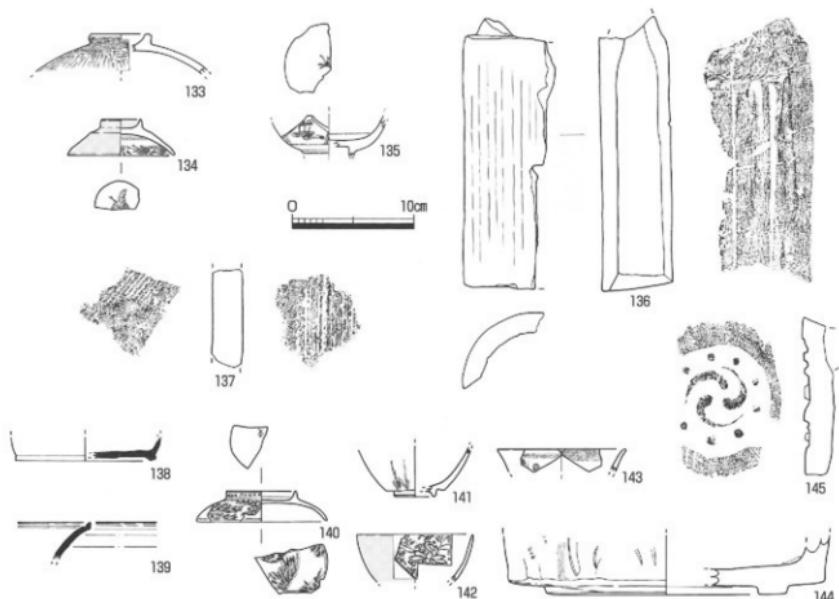


第37図 34次調査出土遺物① (S=1/4)

なお、本調査は宝林寺庫裡増築工事予定地の遺構状況を確認することが目的である。調査結果は上記のとおり、古代国分寺に関する遺構は検出できず、対象地東側に一部未掘部分が残るが、調査結果からみて調査箇所と同様の遺構内容と推測できる。

(XVII) 35次調査 (第39図)

本調査は、土地所有者から史跡地内における宅地造成の要望に伴い、旧国分寺町教育委員会が平成17年2月18日付けで確認調査に伴う現状変更申請を提出したことを契機とする。本調査区は、国分2037-2番地に所在し、讃岐国分寺の西側桑地の外側に位置している。金堂跡のおおよそ真西に位置し、現況では農地である。また、17次調査によって東側の隣接地において確認調査が行われているが、讃岐国分寺に関連す



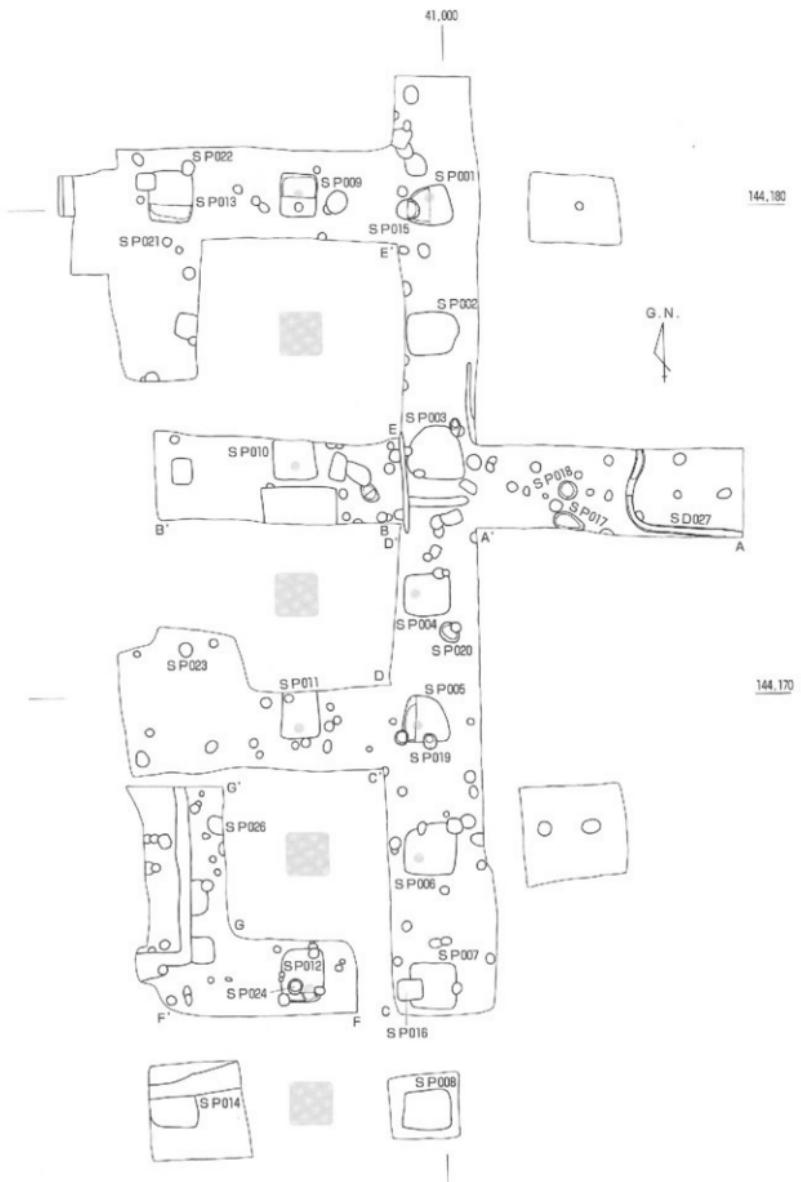
第38図 34次調査出土遺物② (S=1/4)

る遺構や遺物は検出されていない。本調査においても、これまでと同様に現状変更について検討するため、文化庁と香川県教育委員会の指導のもと、平成17年7月5日から22日にかけての期間に対象地において確認調査を実施した。また、検出された遺構の一部については、保存を前提として、遺構の性格や時期を検討するために掘削を行った。

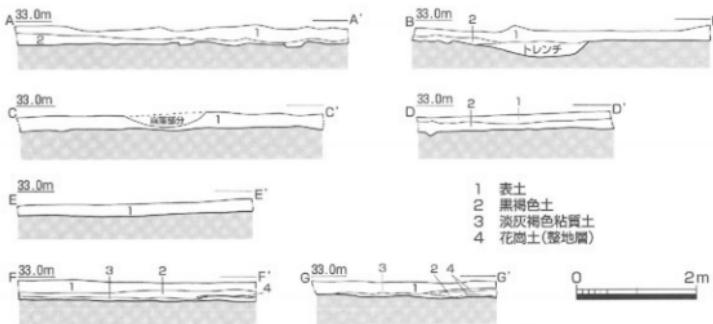
本調査は、まず対象地内のほぼ中央部に十字のトレーニングを設定し、掘削を行って遺構面の確認を行った。その結果、南北トレーニングに掘立柱建物跡の柱穴と考えられる1m弱大の隅丸方形のピットが5つ並んで検出できた。そこで、柱穴の性格とその規模を確認するために新たにトレーニングを設定することとした。その際、柱穴が調査区の西側に伸びることが予想されたため、東西のトレーニングに平行して南北トレーニングの最北端と最南端の西側に新たにトレーニングを設定することとし、さらに、南北方向にもトレーニングを拡大した。一方、東側に柱穴が伸びないかを確認するため、柱穴が検出される可能性がある箇所に約2m四方のトレーニングを南北それぞれ2ヶ所に設定した。その後、調査区の最南端、南東部、北西部でもトレーニングを設定し、掘立柱建物跡の規模等について検討するために柱穴の検出を試みた。その結果については後に詳述するが、調査区の範囲で、掘立柱建物跡の規模は南北7間、東西2間となり、さらに調査区の西側にも伸びる可能性が高いことが確認できた。また、それ以外にも、その建物とは明確に時期の異なる多数の小型のピット群等を検出した。その後、平成18年10月3～4日に実施した現状変更に伴う遺構保護層設置工事の立会調査において、既述の掘立柱建物跡の想定された柱穴についても確認できた。

(i) 基本層序 (第40図)

調査区の土層は、上層から農地の甘土(黒褐色土)、黒褐色粘質土、淡灰褐色粘質土、地山(黄灰褐色粘質土)の順で堆積している。このうち、甘土と黒褐色粘質土が表土と認識でき、黄灰褐色粘質土は、これまでの讃岐国分寺跡の確認調査と同様で地山に当たる層である。



第39図 35次調査遺構平面図 (S=1/100)



第40図 35次調査土層断面図 (S=1/80)

本調査区では、ほとんどの箇所で表土直下から黄灰褐色の地山が検出でき、調査区南西部のみで表土と地山の間に淡灰暗褐色粘質土が認められた。しかし、遺構の埋土は青灰褐色土と暗褐色土の大きく2種類が認められ、南西部で確認できた淡灰暗褐色粘質土層が本来なら面的に存在していたと想定でき、後世に農地として使用された際に、大きく削平されたものと考えられる。

(ii) 遺構と遺物

掘立柱建物跡 (SB01) と多数の小型のピット群が確認された。個別については、以下に詳述するが、掘立柱建物跡の柱穴と小型のピット群の大きく2つに分けられる。遺構の切り合いや埋土の状況から、掘立柱建物跡が古い時期のものであることが明らかとなった。

SB01 (第41図)

SB01は、約1m前後の大きさで隅丸方形を呈する柱穴が、柱穴の中心間を約2.64m (天平尺 (1尺 = 0.293m) で約9尺) の間隔で並び、調査区内で南北7間、東西2間 (18.48m × 5.3m) の規模となる。東側の一間分は庇となる可能性が高い。建物の柱穴が調査区の西側に延びる可能性が高く、その場合、12次調査において講堂跡の西側で検出された東西に庇がつく、もしくは東側のみに庇がつく桁行7間、梁2間の掘立柱建物跡 (SB30) に類似したやや規模の小さな建物になると考えられる。このSB01の主軸は南北方向でN-1' - E (G.N.) となり、讃岐国分寺跡の伽藍の中軸線と類似しているものの、これまでに調査された伽藍を構成する建物群のようにN-2' - Wという主軸とは一致しない。建替えはなく、柱抜き取り痕跡は認められなかった。検出した柱穴は北東隅から南北方向に順にSP001～014と呼称する。柱穴の多くは隅丸方形で、そのうち8つから柱痕を確認することができた。その中で2つの柱穴 (SP001・SP007) では、同様な埋土で切り合うピットが認められ、これらは間仕切りもしくは床東や縁東などと想定される。しかし、調査区の関係などを含めてすべての柱穴で認められるものではなく、現状ではその柱穴の意味については不明である。また、SP001では、建物の柱穴を切るピット (SP015) に、瓦を礎板状に敷き詰めて根固めもしくは柱の高さの調整材としていたことが確認できた。柱穴の一部については掘削を行い、柱穴の状況を確認した。掘削を行った各柱穴について次に詳述する。なお、現状変更に伴う保護層設置工事の立会の際に、東側2列目の未検出柱穴についても確認することができた。

SP001 (第42図)

調査区の北東部に位置し、柱穴の形状は西側がやや格円状を呈するが、ほぼ隅丸方形となっている。その一部を同様な埋土の格円のピット (SP015) に切られている。直径が15~20cm程度の柱痕が確認できた。

出土遺物 (第43図146・147)

146・147は平瓦片である。ともに凹面には布目が残り、最終的には、ナデや割りによって平滑に仕上げている。凸面は繩目叩きを施したのち、ナデ調整によって表面を平滑に仕上げているため、繩目叩き痕が

わずかに残存している。

SP015（第42図）

SP001を切る小型のピットであるが、埋土はSP001と同様な色調である。柱穴の基底部に瓦を敷き詰めた基礎固めが確認できた。柱穴における礎板状の瓦の構造は、ピットの底面に丸瓦を半裁したものを2つ並べた後、大きめに割った瓦を敷き詰め（②）、最後に小さく割れた瓦を敷き詰めて（①）あった。

出土遺物（第43図148、第44図）

148はピットの底に置かれた丸瓦である。凸面は丁寧なナデ調整によって仕上げられ、凹面には、布目やその綴じ紐の痕跡が認められる。149～152は、平瓦である。碎片化され、敷き詰められたものは接合でき、数枚の瓦片を割って使用されたものと分かった。凹面には布目が残り、凸面は、平行叩き（149～151）による整形もしくは叩き縮めた後のナデ調整（152）によって仕上げられている。152は軒瓦の破片と考えられる。色調や胎土は異なるが、叩きの工具は類似している。

SP005（第45図）

東側列の柱穴で北から5番目のもので、やや台形状を呈し、その一部がSP019に切られている。この柱穴の南東部に直径が15～20cm程度の柱痕が確認でき、半裁後、掘り下げた結果、断面でも柱の腐食部分を確認できた。またSP015と同様に、柱痕の下側には瓦を礎板状に敷き詰めている状況が確認できた。その構造は、大きめに割った瓦を敷き詰めた上に、比較的細かく碎いた瓦を敷き詰めるというものであった。

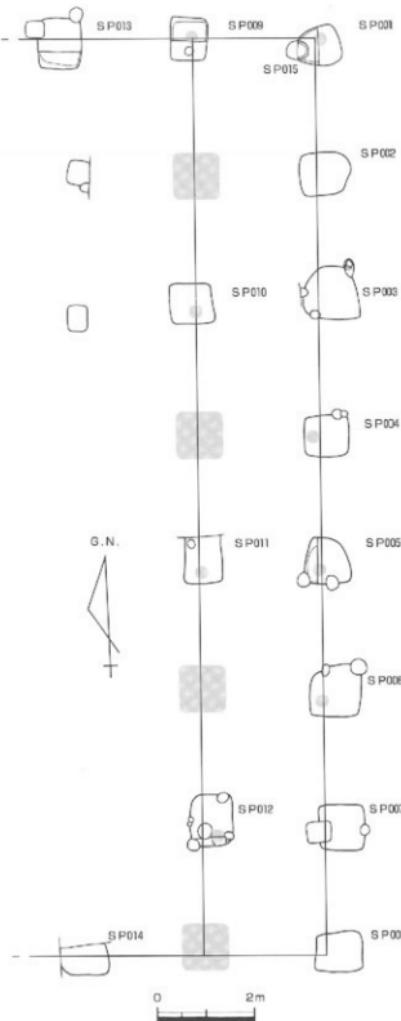
出土遺物（第46図、第47図163）

153～163は平瓦片である。接合するものや、同一個体であろうと考えられるものもあり、いくつかの瓦片を割って敷き詰めたものと考えられる。凹面に布目が残り、凸面は、平行叩き（153）、縄目叩き（154～163）によって整形している。ただし、縄目叩きについては、いくつかのパターンが認められる。

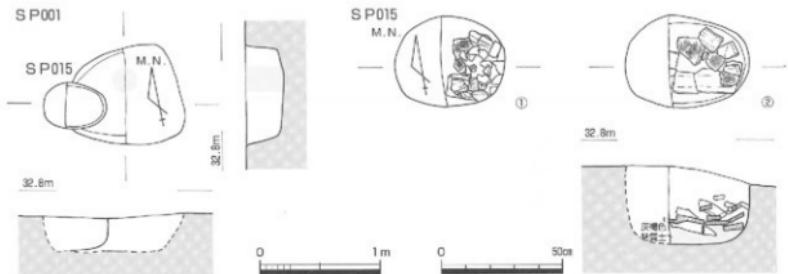
これは、全面を叩いて整形した後、ナデ調整による仕上げが異なっているために生じているものである。そのバリエーションは大きく、縄目をそのまま残すもの（161・162）、一部ナデ消すもの（154・163）、大部分をナデ消すもの（155～160）などに分けられる。なお、156～160は接合しないが同一個体の可能性がある。

SP009（第43図）

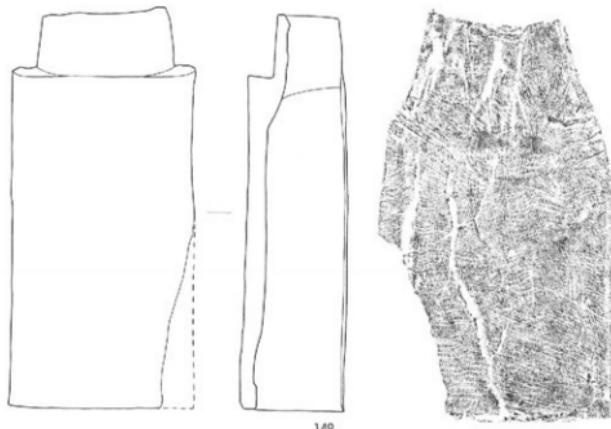
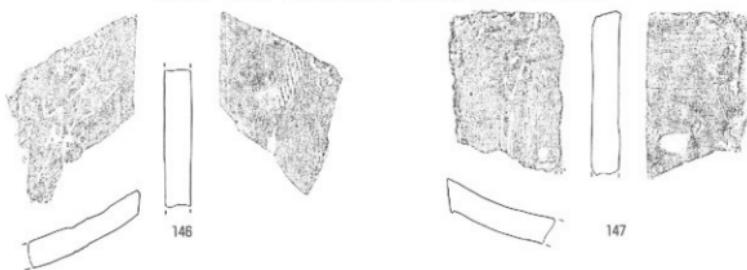
SP001の西隣に位置し、隅丸方形を呈する柱穴である。検出時に柱痕と考えられるものが認められた



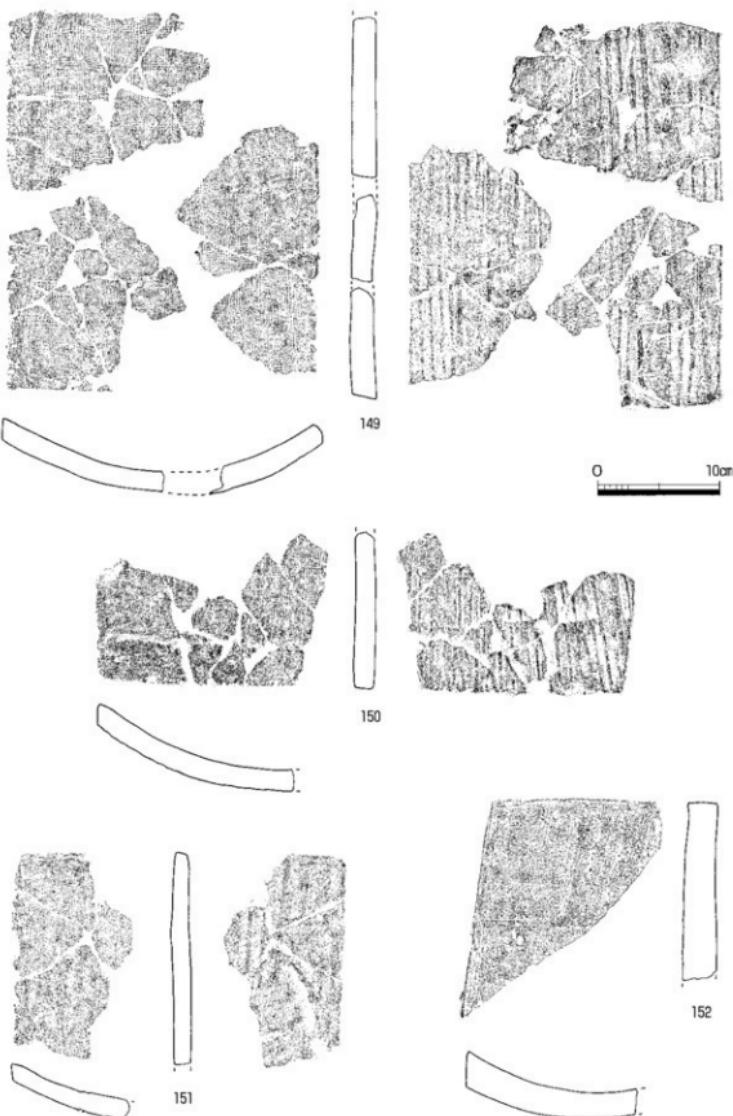
第41図 SB01平面図 (S=1/100)



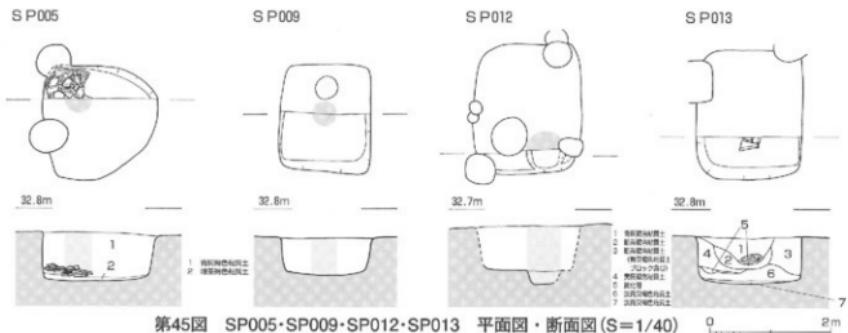
第42図 SP001・SP015平面図・断面図 ($S=1/40\cdot1/20$)



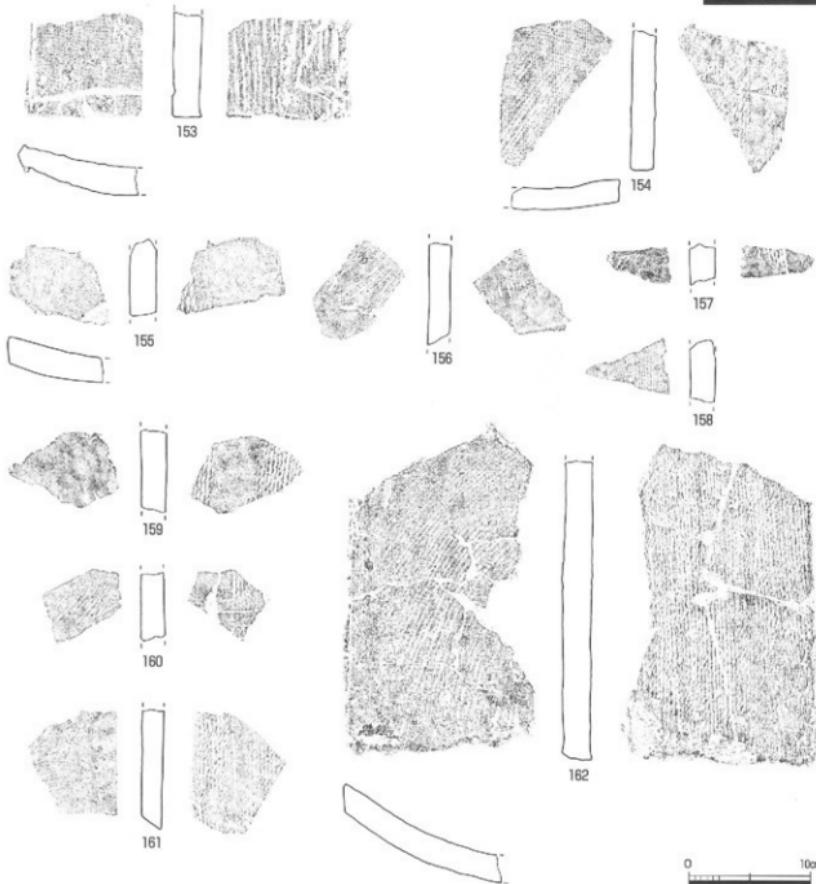
第43図 SP001・SP015出土遺物 ($S=1/4$)



第44図 SP015出土遺物 (S=1/4)



第45図 SP005・SP009・SP012・SP013 平面図・断面図 ($S=1/40$)



第46図 SP005・SP009・SP012・SP013出土遺物① ($S=1/4$)

が、埋上の色調やその位置などが異なっており、柱痕ではないと判断され、推定部分で半裁した結果、底近くで柱の痕跡を確認できた。

出土遺物（第47図164）

164は平瓦で、凹面に布目や糸切り痕が残り、凸面は縄目叩きによって整形している。

SP012（第45図）

南北方向柱穴列の中央列の南から2つ目の柱穴である。隅丸方形を呈し、SP024をはじめとした多くの小型ピットに切られている。検出時に柱穴の南東隅で柱痕を確認でき、そこで半裁した。基礎固めなどの状況は確認できなかった。

出土遺物（第47図165）

165は平瓦で、凹面に布目が残り、凸面は縄目叩きによって整形している。

SP013（第45図）

調査区の北西隅の柱穴で隅丸方形を呈する。遺構検出時に柱痕と考えられる部分が認められ、その部分で半裁を行った。その結果、柱痕と考えられた部分は、柱穴の底まで達しておらず、柱穴が埋まつた後に何らかの行為によって掘削されたものもしくは窪んでいた部分に瓦が入ったものと考えられる。その瓦の下層からは焼土層（炭化層）や小石程度の焼けた粘土が数点出土している。柱穴の埋土が他のものとやや異なる状況を呈しているが、その詳細は不明である。

出土遺物（第47図166・167）

166は軒丸瓦片である。小片のため、型式について詳細は分からぬが、鋸歯文等からSKM06の可能性を指摘しておきたい。167は平瓦片で、凹面に布目が残り、凸面は縄目叩きによる整形後ナデ調整によって仕上げている。

この他の柱穴出土遺物（第48図）

この他の柱穴については掘削を行っていないが、遺構検出時に採集され、帰属遺構の明確な遺物についてここで報告しておく。

SP002 168は平瓦で、凹面に布目が残るが、一部がナデ消されている。凸面は縄目叩きによって整形している。

SP004 169は平瓦で、凹面に布目が残り、凸面は縄目叩きによって整形している。側面付近はヘラ切りによって段状になっている。

SP006 170～172は平瓦で、凹面に布目が残り、凸面は平行叩きによって整形するもの（172）と縦目叩きによる整形後、ナデによって仕上げるもの（170・171）とがある。後者は、凹凸面とともに、側端部付近を丁寧なナデ調整を施している。

SP011 173・174は平瓦で、凹面に布目が残り、凸面は縦目叩きによって整形するもの（173）と格子目叩き（174）によって整形するものがある。173は横方向にスライドしながら叩きを施した状況が認められる。

SP016（175） 175は平瓦で、凹面に布目が残り、凸面は縦目叩きによって整形している。

その他の遺構（第49図）

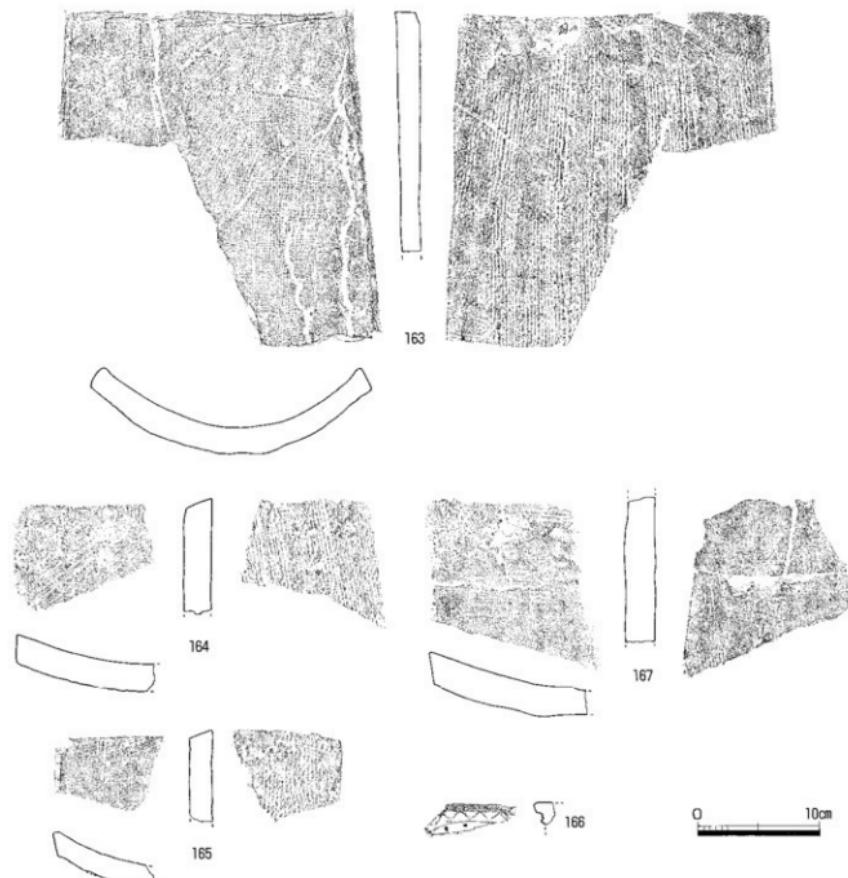
この他に、掘立柱建物跡の柱穴とは埋土が全く異なり、暗褐色を呈する埋土の小型のピットが多数検出された。遺構の切り合い、埋土の状況、遺物等から、これらの遺構は、SB01より新しい時代に形成された遺構の一群と考えられる。

SP017（第49図） 長幅70cm、短幅35cmの楕円形のピットである。

出土遺物（第50図） 176は土師質土器の鍋で、15世紀頃に比定できる。内外面に煤・こげの付着が著しい。

SP018（第49図） 直径40cmの円形のピットである。

出土遺物（第50図） 177は上部質土器足釜の口縁部片である。14世紀代に比定できる。



第47図 SP005・SP009・SP012・SP013出土遺物② (S=1/4)

SP019 (第49図) 直径30cmの円形のピットである。出土遺物は認められなかった。

SP020 (第49図) 直径30cmの円形のピットである。出土遺物は認められなかった。

SP024 (第49図) 直径30cmの円形のピットで、SP021を切っている。

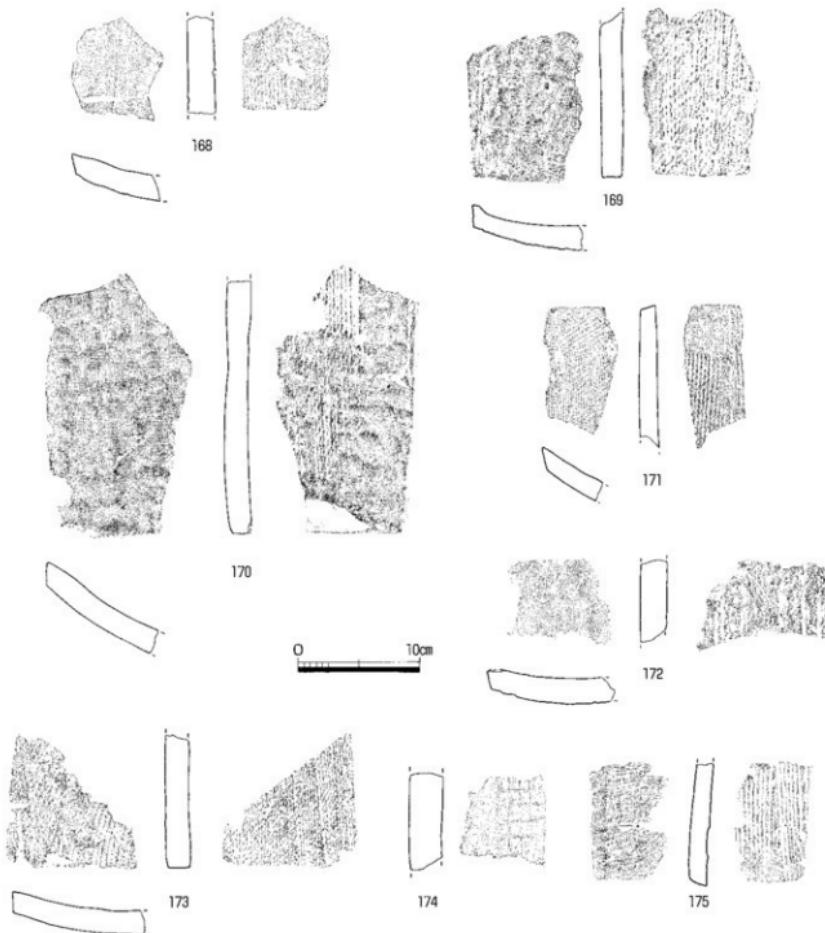
出土遺物 (第50図) 179は肥前系磁器の碗である。高台部は無袖で、17世紀中頃に比定できる。

SD027 (第49図)

東西トレングの東側に位置し、幅15cm、深さ6~10cmの逆L字状を呈する溝状造構である。

出土遺物 (第50図181・182) 181・182は上海質土器で、181は土鍋、182は足釜の脚部の破片である。181は176と同一個体の可能性がある。

以上のような出土遺物から、暗褐色の埋土の遺構群は中世以降に形成されたものと判断できる。



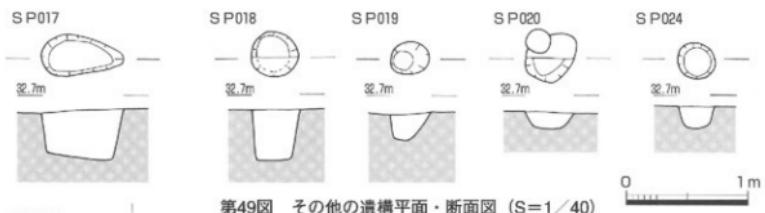
第48図 その他の柱穴出土遺物 (S=1/4)

その他の遺物

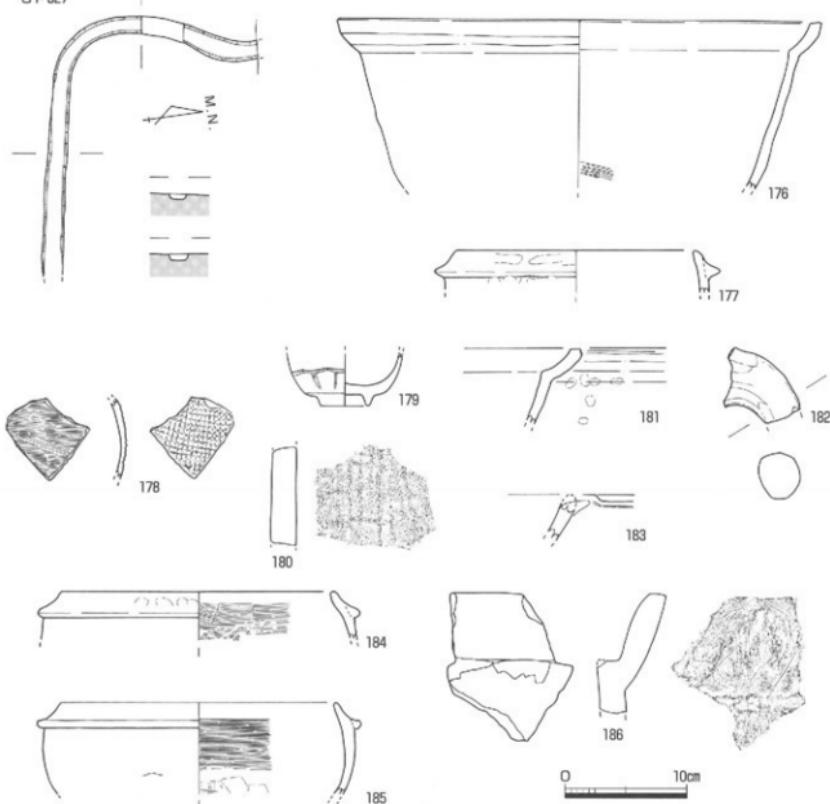
掘削を行っていないが、遺構検出の際に遺構上面で取り上げることができた遺物を遺構ごとに紹介する。SP021（第50図178）178は亀山窯産の須恵器甕の破片である。内面に刷毛目調整、外面に格子目叩きを施している。

SP026（第50図180）180は平瓦で、凹凸面ともに磨耗が著しいが、凸面に格子目叩きが認められる。表土・覆土出土（第50図）

183は土師質土器捏鉢の口縁部片である。184・185は土師質上器の足釜である。186は丸瓦の破片である。凹面には布目が残り、凸面はナデ調整によって仕上げられている。



第49図 その他の遺構平面・断面図 ($S=1/40$)



第50図 その他の遺構の出土遺物 ($S=1/4$)

(iii) まとめ

今回の調査によって、大きく2つの時期の遺構を検出した。その時期は、出土遺物から古代と14~15世紀を中心とする時期に属するものである。特に、寺城の外に、讃岐国分寺と同じ時期の建物が確認されたこ

とは大きな成果であった。しかし、本調査で検出された掘立柱建物跡（SB01）は、先述したように、建物の主軸が北で東に約1度振れており、讃岐国分寺を構成する主要伽藍とは約3度異なっている。そのため、当時の讃岐国分寺の造営（整備）計画の中に組み込まれていた建物として考えることは難しく、伽藍の整備後に建てられた可能性が高い。しかし、北を意識している点からも、伽藍を意識して建てられていることは明らかである。SB01の性格・機能については、瓦以外の出土遺物（須恵器など）がほとんど認められないことから、それを具体的に明らかにすることはできない。また、検出された各柱穴の深さは40～50cmであることから、平面プランが同規模のものでは、80～100cm程度になることが一般的である（山中2003）ことに比べると明らかに浅いことが分かる。のことからも、造構の上部は、削平されていると考えられる。

【参考文献】

山中敏史 2003『柱穴』『古代の宮衙遺跡・造構編』独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所

第3章 如意輪寺窯跡

第1節 調査の経緯

当該地は、平成10年度から旧国分寺町が如意輪寺公園整備事業の実施に伴い、工事を実施していたところ、工事箇所において窯跡が発見され、発見者から連絡が入った。連絡を受けた香川県教育委員会と旧国分寺町教育委員会で11月9日に協議。その後11月13日に現地確認を行い、遺跡発見届などの手続きを行った。現地では、工事により池の水が抜かれていたため、山越池の北岸に露出した2基の窯跡の一部を確認できた。そのため、公園整備対象地における遺跡の範囲を確認する目的で、確認調査を実施した。調査の結果、発見された窯跡以外は特に顕著な造構・遺物が存在せず、窯跡以外の地区的保護策は不要と判断した。窯跡の保存については、事業担当課と協議を行ったが、工事計画の変更が困難であることから、平成11年3月～4月にかけて本調査を実施し、造構の残存状況を確かめることになった。その結果を受けて、県教育委員会を含めて協議を行うこととした。

第2節 調査の経過

予定どおり平成11年3月～4月にかけて窯跡の本調査を実施した。調査後の再協議の結果を受けて、保護措置を講じて窯跡を埋め戻した。

第3節 調査の方法

今回窯跡が確認された周辺も含めて、トレンチ調査を実施した（第52図）。発見された窯跡周辺に4ヶ所、図示していないがこの他に、如意輪寺周辺に2ヶ所、窯跡西側に1ヶ所の計7ヶ所にトレンチを設定した。しかし、顕著な造構や遺物が確認されなかったため、その後、窯跡の主要部を面的に調査した。次節では、窯の調査において出土した造構・遺物について報告を行う。

第4節 調査の成果

(i) 基本上層（第53図）

上層は、上から表土、床土、灰褐色粘質土、旧床土、灰茶褐色粘質土という順序で堆積し、これらの層は、窯を覆っていた土となる。窯の内部は、上から窯が埋没してしまう際に流れ込んだ灰茶褐色粘質土、灰褐色粘質土、炭を多量に含む黒褐色粘質土という順に堆積していた。

(ii) 造構と遺物（第53図）

灰原の存在が予想された窯の南部（池の中）の2ヶ所のトレンチや、その他周辺部3ヶ所のトレンチでは、特に造構や遺物は確認されなかった。また、窯跡の北側のトレンチでは、排水施設と考えられる溝

を確認するにとどまつた。

以上のような窯跡周辺の状況から、確認できました2基の半地下式有牀平窯を中心に調査を実施した。次に各窯跡について詳説する。

1号窯跡（東側）

1号窯は、半地下式有牀平窯で、残存する窯体全長は3.2mである。残存部は焚き口、燃焼室、焼成室である。焚き口の最下層は、厚さ10cmの炭を多く含む黒褐色粘質土で埋まっていた。最大幅1.8mで焼成室に向かって内傾しており、形状は舟底形を呈する。焚き口付近は窯付近を粘土で塗り付けるように補修していた。燃焼室は幅1.2m、長さ18m残存していた。窯床は燃焼室からほぼ垂直に立ち上がり、焼成室では徐々に勾配が緩やかになる。牀は2条であり、各々の幅は20cmで燃焼室側が狭く、奥壁側がやや広くなる。牀の高さは燃焼室側で約70cm、中央部では約30cmとなる。両側壁には縁が設けられていたはずであるが、確認できなかつた。また、前庭・灰原の位置にあたる場所に試掘トレンチを設定したが、遺構・遺物は認められなかった。

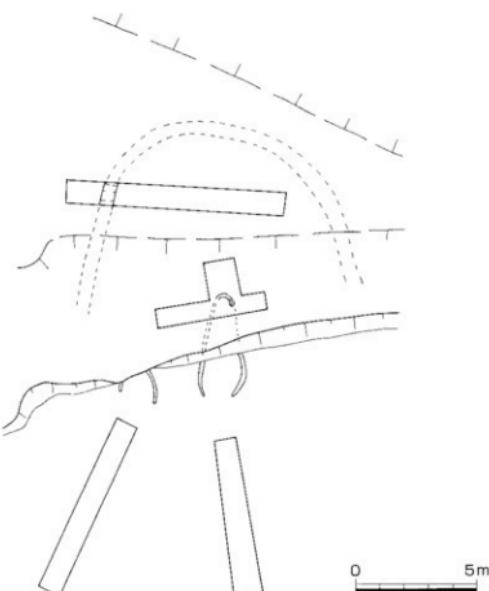
窯体は花崗岩風化土で構築されており、特に牀部は出土瓦と同様に青灰色を呈し、焼成は非常に堅徹であった。また、側壁と地山の間に約10cmの幅で全体に焼土が確認できた。

出土遺物（第53図）

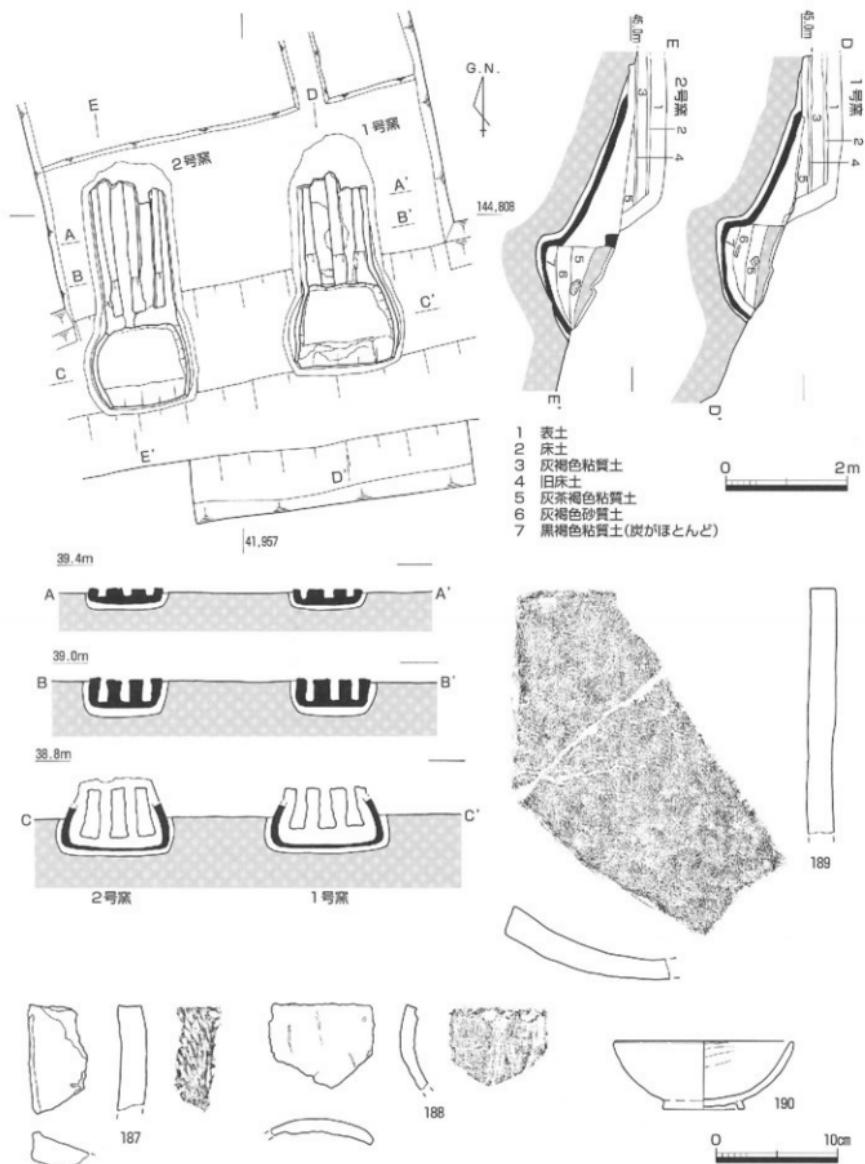
187・188は瓦片である。187は表面の摩滅が著しいが、凸面は、粗い縄目叩きによって整形している。



第51図 如意輪寺窯跡位置図 (S=1/1,000)



第52図 トレンチ配置図 (S=1/200)



第53図 1号窯・2号窯跡平面図・断面図 (S=1/80) および出土遺物 (S=1/4)

188は薄く、丸みがあり、丸瓦状を呈する。凹面には布目が残り、凸面はナデ調整によって仕上げている。

2号窯跡（西側）

2号窯跡は半地下式有牀平窯で、残存する窯体全長は3.9mである。残存部は焚き口、燃焼室、焼成室及び隔壁部の一部である。焚き口の最下層は、1号窯と同様に厚さ10cmの炭を多量に含む黒褐色粘質土で埋まっていた。最大幅1.6mで焼成室に向かって内傾し、形状は舟底状を呈する。焼成室は幅1.2m、長さ2.2mが残存する。窯床は燃焼室からほぼ垂直に立ち上がり、焼成室では徐々に勾配が緩やかになる。牀は2条で、各々の幅は20cmで燃焼室側が狭く、奥壁側がやや広くなる。牀の高さは燃焼室側で約65cm、中央部では約30cmとなる。2号窯でも両側壁には縁が設けられていたはずであるが、確認できなかつた。また、前庭・灰原の位置にあたる場所に試掘トレンチを設定したが、遺構・遺物は認められなかつた。窯体は1号窯跡同様に粘土を使って構築したのか、特に牀部は焼成が非常に堅鐵である。

出土遺物（第53図）

189は窯内出土の平瓦片である。凹凸面ともに摩滅が著しいが、凹面には布目が残っている。190は、燃焼室の第2層から出土した黒色土器の破片である。内面と外面口縁部付近が黒色化している。内外面ともに器面の磨耗が著しく、調整については不明であるが、器形などから12世紀前半頃に推定される。この他に、平瓦、丸瓦の小片が数点出土している。

その他の出土遺物（第54~56図）

この他にも両窯跡から平瓦、丸瓦、土器の破片が出土している。また、調査以前に窯跡付近から採取されていた瓦についてもあわせて報告する。なお、これらの軒瓦については、すでに安藤文良氏（1988）や藏本晋司氏（2005）によって報告されている。各型式の呼称については、藏本氏の型式名を踏襲する。

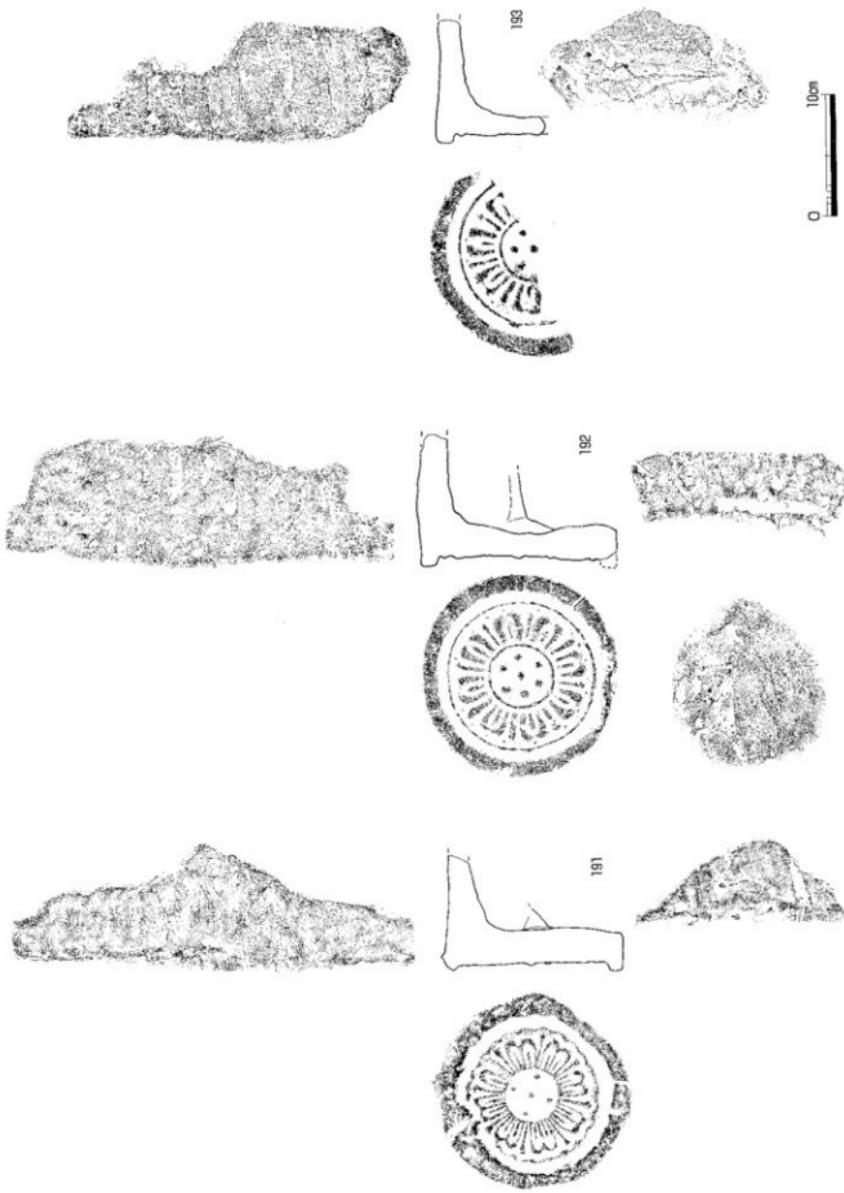
191~193は軒丸瓦、194~196は軒平瓦である。191はNRM01で、八葉複弁連華文軒丸瓦である。范彫りが非常に粗雑で、後述する同一文様の瓦に比べると花弁などが線的に表現されており、退化傾向を示す。剥離面から粘土接合の状況が確認できる。瓦当部裏側から丸瓦部凹面にかけてナデ調整を施した後、丸当部の裏側下半を円弧上にヘラ削りを施す。丸瓦部外面は、ナデ調整を施しているようであるが、凹凸が著しく粗雑な仕上がりである。色調は淡灰褐色で、胎土は砂粒を多量に含み粗い。同一文様の瓦が、綾川町十瓶山瓦窯跡群の北条池北窯や西村1号窯跡灰原、坂出市開法寺跡、京都府鳥羽南殿から出土しており、詳細は第6章で後述するが、12世紀前葉に比定できると考えられる。192~193はNRM02で、八葉單弁蓮華文軒丸瓦である。文様の状況から、両者は同範の瓦ではない。これらの瓦当部裏側や丸瓦部にも191と同様な痕跡が認められ、同様な製作技法による製作と考えられるが、NRM02の方が比較的丁寧なつくりである。胎土は砂粒を多量に含み、色調は淡灰黄褐色で焼成はやや軟質である。194~196はNRH01で、C字上向の中心飾に対し三葉蕨手を単位として左右に三転した均整唐草文の軒平瓦である。194は磨耗のため不明であるが、195~196は、粗い繩目叩きを弧状に施すことによって整形している。凹面は布目が残り、瓦当面付近をヘラ削りしている。195は青灰褐色を呈し、焼成も硬質であるが、194~196は、淡灰褐色もしくは淡灰黄褐色を呈し、焼成もやや軟質である。軒平瓦は、いずれも、凸面側の側面に粘土がパリ状に突出しており、叩き整形後側面調整を行っていない。この調整の特徴は、平瓦の小片にも認められる痕跡である。同一文様とされるものが、綾川町十瓶山空跡群の西村1号窯跡灰原、丸龜市本島八幡神社、京都府鳥羽南殿や平安宮朝堂院から出土している。詳細は後述するが、軒丸瓦NRM01と同様に12世紀前葉に比定できると考えられる。

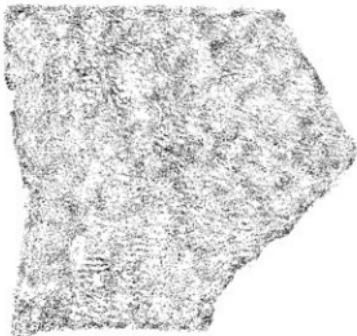
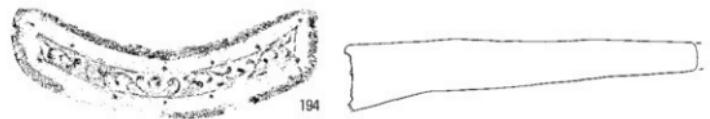
第5節　まとめ

今回の調査により、発見された2基の瓦窯跡は、窯跡の分布状況や出土遺物及び採取された軒瓦などから、同時に構築され、12世紀前葉ごろを中心操業されていたと考えられる。焼成室は途中で削平を受けているが、上方の地山面で焼土が残っており、同時代の窯跡や地形からみて、全長は4.0m前後になると想定される。また、窯跡の上方には排水溝があったと想定されるが、水田造成の際に削平を受けたようである。

今回報告した軒瓦は文様構成及び平瓦の粗い繩目叩きなどの調整技法から十瓶山周辺に窯を営んでいた工人の技術的系譜に位置付けられる（松本1996、藏本2005）。讃岐国分寺跡では、11~12世紀代の瓦が少な

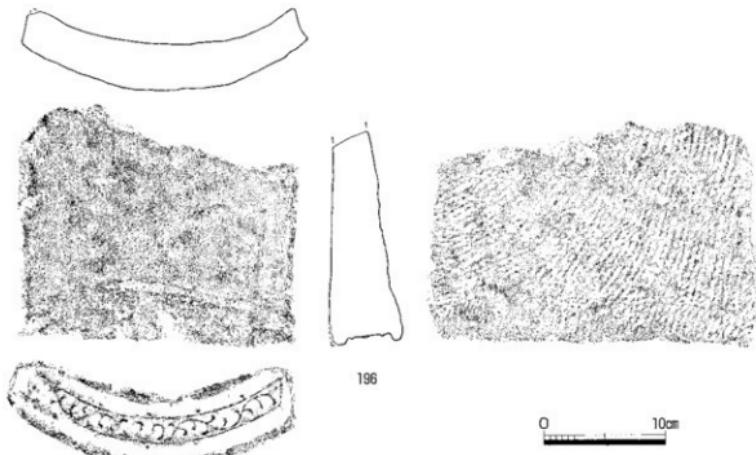
第54図 黒跡周辺採集遺物① ($S = 1/4$)





0 10cm

第55図 窯跡周辺採集遺物② (S=1/4)



第56図 窯跡周辺採集遺物③ (S=1/4)

からず出土しており、十瓶山窯跡群からの供給が想定されている(松本1996)。今回報告した軒瓦の供給先として国分寺は十分想定される存在ではあるが、現状では国分寺跡からの出土は確認されておらず、如意輪寺窯跡で製作された瓦の供給先は不明である。加えて、当時の国分寺周辺寺院についても考慮しておく必要があり、供給先などの詳細については今後の資料の増加を待ちたい。

いずれにしても11世紀後半から12世紀にかけて平安京の造営や造寺にからんで瓦生産・供給をおこなった十瓶山窯を操業していた工人集団が、如意輪寺窯跡の瓦工集団に技術指導をしていたということは、古代末における讃岐国の瓦生産および供給体制を解明していく上で重要な資料となろう。

【参考文献】

- 松木忠幸 2000 「如意輪寺窯跡」『香川県埋蔵文化財調査年報』平成10年度 香川県教育委員会
(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999 『京都府遺跡調査報告書第27号 奈良山瓦窯跡群』

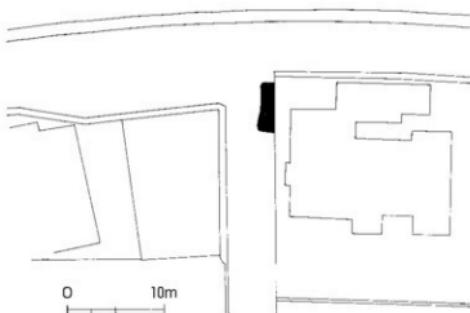
第4章 国分中西遺跡

第1節 調査の経緯

町道中西中原線の道路改良工事中に五輪塔水輪部と土師質土器壺・足釜、須恵器片、瓦片、陶磁器片、礫などが多数出土したことから、中世墓の可能性を考慮し、工事の一時中止後、遺跡発見届けを提出し、香川県教育委員会より遺跡の保護上必要な勧告を受け、工事立会を実施した。

第2節 調査の経過

5月17・18日に調査を実施し、記録図面の作成、遺物の取り上げなどを行った。中世の塚と思われる遺構は確認されなかったため、その後工事が再開された。出土



第57図 国分中西遺跡位置図 (S=1/500)

した五輪塔水輪部は、土地所有者によって町道西側に、埋められ祠が建てられている。

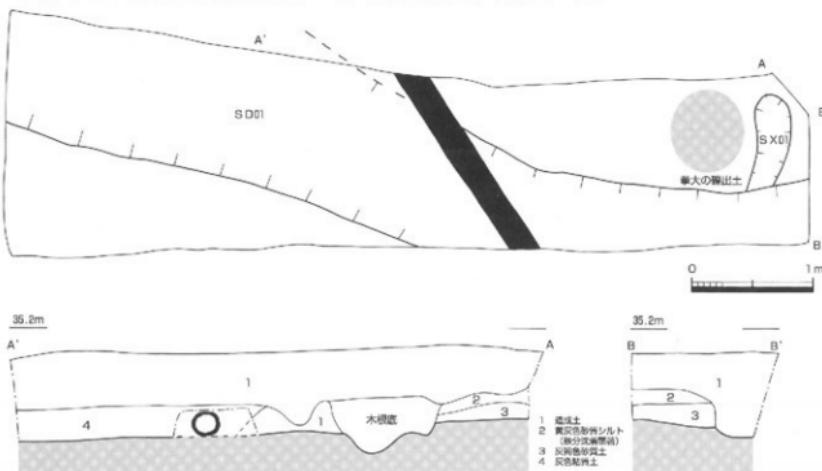
第3節 調査の方法

工事のために掘削された部分を精査し、遺構検出後記録図面の作成を行った。

第4節 調査の成果

(i) 基本層序（第58図）

上層は、上から造成土、黄灰色砂質シルト、灰褐色粘質土が堆積していた。



第58図 トレンチ平面図・断面図 (S=1/40)

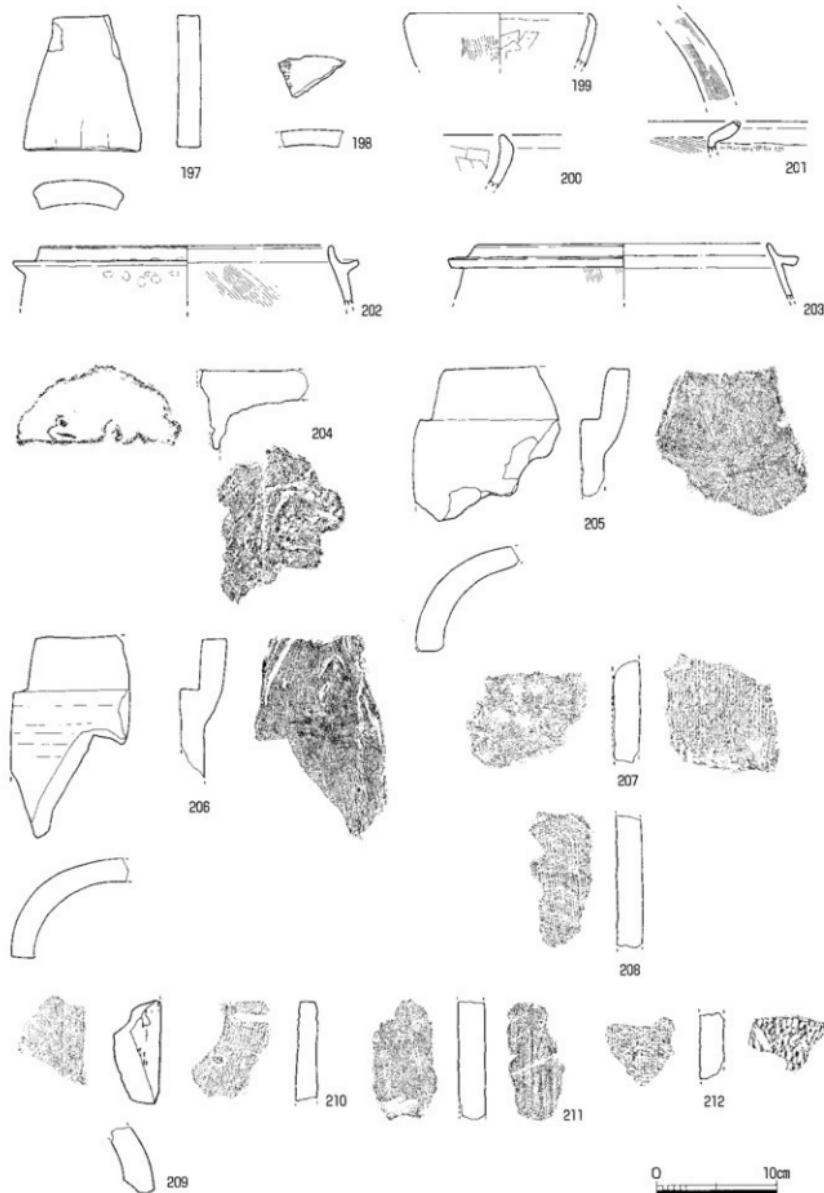
(ii) 遺構と遺物

溝状遺構 (SD01) を1条確認した。溝幅は約1mをはかり、埋土は拳大の礫を多く含む暗灰褐色粘質土であった。出土遺物は19世紀後半から近代の土器・陶磁器・瓦片であった。対象地は里境に合致し、開削時期は不明であるが、里境に沿って開削された溝であると判断される。

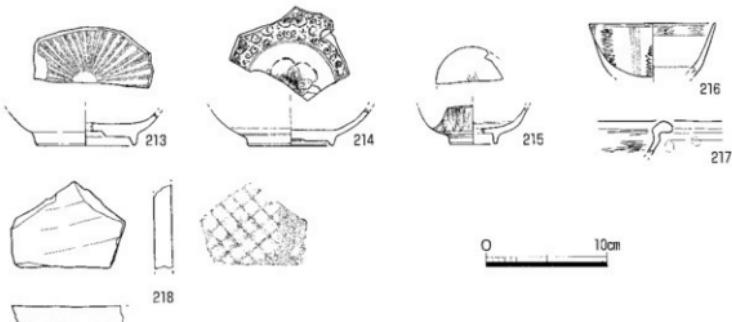
出土遺物（第59-60図）

塚状遺構（第59図197～208）

礫が集中していた箇所から、多数の遺物が出土している。出土遺物は古代～中世に及ぶもので、後述するように、塚を構成していた土に包含されていた遺物が、何らかの要因で再堆積したものと想定される。出土遺物は、上層・下層に分けて取り上げた。上層から197・198の瓦片が出土している。198には遺存部に「得右衛」という文字が刻まれており、両面ともに焼している。199～208までが下層から出土した遺物である。199は口縁に加え、器面の剥落が著しい点などから製塙土器となる可能性が想定される。200は土師質土器鉢の口縁部破片で15世紀に比定できる。201は、土師質土器土鍋の口縁部破片で16世紀頃のものと考えられる。202・203は土師質土器足釜の口縁部破片で、13世紀後半に比定できる。204は複弁蓮華文軒丸瓦であるが、剥落が著しく文様構成の詳細は不明である。205・206は丸瓦で、前者は表面の磨耗が著しい。にぶい黄橙色を呈し、焼成も軟質である。後者は凹面に布目を残し、凸面はナデ調整によって仕上げられている。胎土は密で焼成も硬質である。207・208は、平瓦の破片で207は繩目叩きによって整形されている。205を除けば、丸平瓦（206～208）のいずれも焼成は軟質であった。



第59図 出土遺物① ($S=1/4$)



第60図 出土遺物② (S=1/4)

SD01 (第59図209~212)

209・210は丸瓦で、凹面に布目を残し、凸面は209が縄目叩きによる整形後ナデ調整、210はナデ調整によって仕上げられている。211・212が平瓦で、211は凸面を平行叩き、212は粗い縄目叩きによって整形している。瓦片いずれも焼成は軟質である。

表土および覆土 (第60図213~218)

213~215は肥前系磁器である。213・214は、蛇の目凹型高台の皿で、前者は型打成型の菊花皿である。216は瀬戸・美濃系磁器の端反碗である。これらの磁器は19世紀前半～幕末の時期に比定される。217は上師質上器で御庭系の熔炉で、先の磁器と同様な時間に比定される。218は斜格子目叩きを施す平瓦である。胎土は粗く、凹凸面ともに惣している。

第5節 まとめ

工事中に出土した五輪塔やそれに共伴する土器、陶磁器、人頭大以下の藤群の存在から、塚の存在に留意したが、塚の存在を背負できる証拠を得ることはできなかった。しかし、これらの出土遺物は、工事箇所付近にのみ認める径3mを上回る木根跡から出土したものであることが判明した。元来、極めて近接した位置に所在したであろう中世の塚の構成土が何らかの要因で木根痕跡に堆積し、溝深い等により今回検出した溝から近現代に属する遺物が混入し、工事中に確認されたものと理解できる。

また、古代の瓦が出土しており、讃岐国分寺跡から離れていることを考慮すると、近隣に瓦を使用した施設があった可能性なども想定される。詳細については不明であるが、今後、周辺での資料の蓄積が待たれる。

【参考文献】

松本和彦2005「国分中西遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報』平成16年度 香川県教育委員会

第5章 兔子山遺跡

第1節 調査の経緯

平成17年11月にNTTドコモ四国アンテナ基地の間設工事に伴う埋蔵文化財包蔵地の照会が施工業者の協和エクシオより旧国分寺町教育委員会にあった。照会地は、旧石器の散布地として周知の埋蔵文化財包蔵地であったが、その包蔵地の状況が不明確であったため、協和エクシオとの協議の上、土地所有者である(株)朝日通商の協力を得て事前の確認調査を実施した。その結果、サスカイトの剥片等が数点出土

したものの、散布地としての域を超えるものではなかった。その旨を香川県教育委員会に、埋蔵文化財調査報告として提出した。

その後、NTTドコモ四国は、平成17年12月12日に香川県教育委員会へ「埋蔵文化財発掘の届出」を提出し、工事立会を実施するよう指示を受けた。平成18年3月13日に工事立会を行ったが、掘削対象範囲からは遺構および遺物は確認されなかった。

第2節 調査の経過

調査の経過については以下の通りである。

平成17年12月5日に調査用器材の搬入と調査区を2ヶ所設定した。12月6日に人力掘削によるトレンチ掘削を開始し、出土遺物の収集と測量を行った。その後、埋め戻しを行い、調査を終了した。後述するようにサスカイト剥片を数点採取できたが、遺構は特に確認できなかった。

第3節 調査の方法

事前の確認調査であったため、アンテナ基地開設の予定地と仮設の工事用道路設置場所の空閑地でトレンチ調査を実施することとした。重機が入ることができないことから人力による掘削を行い、その後、図面の作成を行った。

第4節 調査の成果

(i) 基本層序 (第62図)

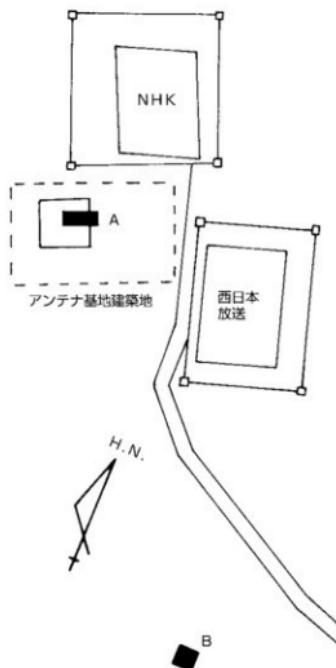
A・Bトレンチとともに表土(腐葉土)から、灰白褐色土、黄灰色土の順で堆積しており、同様な堆積を確認したが、各層の厚さが若干異なっていた。黄灰色土が地山面であったが、遺物が非常に少なかったことと工事による掘削がさらに下位まで及ぶため、さらに掘削を行った。その結果、地山面の下には、5~10cm程度の角礫を多量に含む黄灰色土が深く統いでいる様相が確認できた。

(ii) 遺構と遺物

A・Bトレンチとともに遺構は検出されなかった。Aトレンチは腐葉土層の下よりサスカイトの非常に小さく薄い剥片を1点採取した。Bトレンチでは、Aトレンチと同様なサスカイトの剥片を9点確認した。その他、Aトレンチ付近で第63図の剥片を採取した。風化の状況等から旧石器時代に属する可能性は低い。一部に刃部を作ろうとしたような小さな剥離が認められるが、詳細な時代・器種ともに不明である。

第5節 まとめ

兎子山は花崗岩を基盤としており、本調査で採取されたような安山岩質の石材のものは頂上部周辺では基本的に採集できない。そのため、本調査で採取された剥片は、人為的に持ち込まれたものと判断できる。具体的に時代を知りうる資料は採取できなかったが、昭和45年に調査された際には、サスカイトの原石や石鎚が数点出土している。これらの調査は東側斜面での調査であり、今回採取された剥片類もBトレンチの方が多かったことを考慮すると木津川の周辺に広がる平野部を見下ろす山頂部東側で石器製作等が

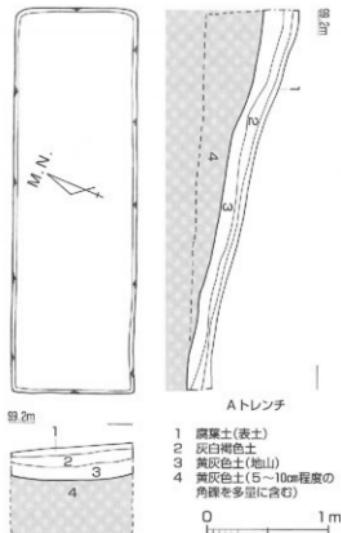


第61図 兎子山遺跡トレンチ位置図(S=1/1,000)

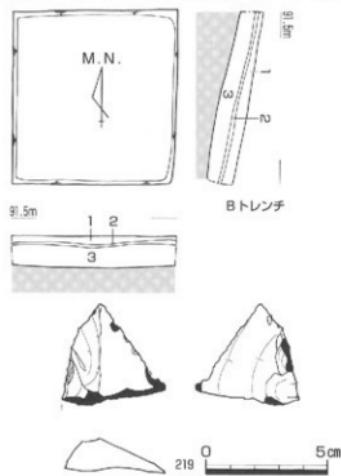
行われた可能性が想定される。また、昭和45年度調査では石器が出土しており、旧石器時代以降、弥生時代くらいまで断続的に兎子山の山頂部が利用される状況があったようである。

【参考文献】

国分寺町1975「国分寺町史」



第62図 トレンチ平面・断面図 (S=1/40)



第63図 周辺採集遺物 (S=1/2)

第6章 総括

創建以後、長い歴史の中で大きく変化しながら現在に至っている讃岐国分寺は、これまで史跡整備をはじめとした発掘調査によって様々なことが解明されてきている。しかし、依然その歴史の大部分はブラックボックスとして我々の前にたちはだかっており、各時代において形態を変えながらも地域社会で果たしてきた役割やその歴史的意義の解明は今後の調査研究の大きな課題と言える。また、讃岐国分寺周辺域の社会様相も第1章でも述べた通り、資料の蓄積は進んでおらず、不明確な部分が非常に多い。

そのような中で、本書では、これまで特別史跡讃岐国分寺跡の寺域西側において実施してきた発掘調査成果と旧国分寺町域内で実施した発掘調査の成果を報告した。これらの成果は、上記の問題を解決していく上で一つの手がかりとなるものであり、今後さらなる詳細な検討が必要となることは言うまでもない。本書所収の調査成果や資料をもとに、本章では以下の2点について整理を行い、今後の調査研究に備えることとしたい。

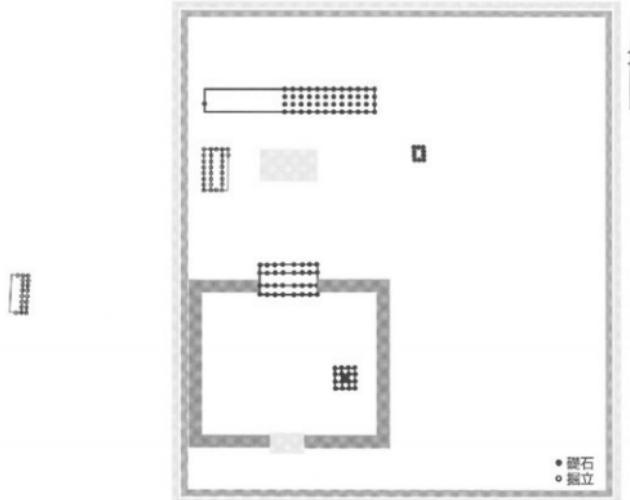
- I) 35次調査で確認された掘立柱建物跡SB01から派生する問題
- II) 如意輪寺窯跡採集軒瓦の時間的位置づけとその意義

第1節 35次調査で確認された掘立柱建物跡SB01から派生する問題

～寺域周辺の土地利用のあり方について～

本書では、讃岐国分寺跡指定史跡地内における現状変更許可申請に伴う発掘調査の成果を報告した。結論から言えば、現状では七堂伽藍の西側で確認されている古代讃岐国分寺に関連する明確な遺構は35次調査のみであり、讃岐国分寺に関連する建物を時間軸を無視して配置すると第64図のようになる。しかし、これまで調査面積が限られていた点、史跡地内西側においても一部を除けば比較的高低差が少ない点などから考えて、今後、寺域西側で古代讃岐国分寺に関連する同様な施設が確認される可能性も残されている。また、既述したように35次調査で確認されたSB01は建物規模も大きく、伽藍とは主軸が若干異なるものの伽藍を意識して造営されたことは確実であり、国分寺に関連する施設であったことは間違いない。後述するように掘立柱建物の立地において寺域西側でも高く平坦な場所が選択され、計画的に建築されている点からも理解できる。その機能に関しては瓦以外の遺物が認められないため

不明と言わざるを得ないが、今後の周辺での調査に備え、寺院研究に認められる寺院施設のあり方やこれまで諸国の国分寺の発掘調査によつて確認された寺域周辺の建物等について検討し、35次調査で確認された建物の機能や今後の注意点等について整理し、それを踏まえて現状での讃岐国分寺周辺の状況について整理を



第64図 讃岐国分寺跡の伽藍とSB01遺構 (S=1/2,400)

試みたい。

a) 寺院地と付属施設

- i) 寺院における空間概念

最初に、国分寺を構成する空間概念について整理しておきたい。これまで讃岐国分寺の報告では、築地盤によって囲まれた空間を寺域として報告してきたが、35次調査の成果のみならず、石田茂作氏の先駆的な研究以降、近年に至るまで大規模な寺院をはじめとし国分寺周辺に展開していた建物群や諸施設に関する検討が文献史学・考古学の両面から追求されている（石田1965、上原1986、石村1987・1991、山路1994、須田1994、糸原1997、川尻2001など）。その成果によれば、七堂伽藍以外にも寺院周辺に運営管理のための寺務などを執り行う施設が存在していたことが解明されており、それらを総合的に把握していくことが寺院研究においても重要と考えられている⁶²⁾。しかし、その空間の分節方法やその呼称法については研究諸氏で異なっており、現状では共通見解までは至っていない。上原真入氏などの建物本来の性格を分類基準として、仏の空間と僧侶の空間に区分する見解⁶³⁾は妥当であると考えるが、川尻秋生氏が指摘するように各建物の意味付け（性格）の時代的変遷（川尻2001）や、付属施設で寺院の管理運営に携わった人々の中には俗人も含まれていたものと考えられることなどを考慮すると、僧侶の空間（僧地）としての分類単位が実情にそぐわない点も存在することになる。また、各地の国分寺周辺域の状況を概観すると、伽藍が展開する空間と付属施設が展開する空間は明確に分かれている場合が多く⁶⁴⁾、後述するように多くの場合、このような空間は溝や堀（一部が自然地形などの場合もある）の区画施設を伴っている。そのため、山路直充氏や須田勉氏による呼称法および空間分節方法の方が把握しやすい。そのような点から、本書ではその分節方法を踏襲して使用し、伽藍地と付属院地の空間を合わせて寺院地と呼ぶこととする（山路1994、須田1994）。さらに、上総国分尼寺跡の寺院地北部に隣接する坊作遺跡などの例のように寺院地外の隣接地に展開する掘立柱建物や竪穴住居などの関連施設や空間等は、寺地として捉えることとする。

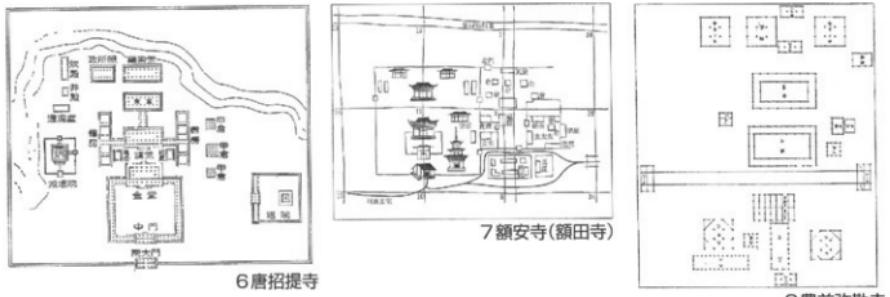
第3表 寺院空間呼称法

	金堂・塔	講堂・僧房など	付属施設	国分寺周辺
石 田 (1966)		寺 域		
坂 詰 (1982)	仏 地	僧 地	俗 地	
上 原 (1986)	仏 地	僧 地	僧地（補助空間）	俗 地
須 田、山 道 (1994)		伽藍地 (寺院地)	付属院地	寺 地
糸 原 (1997)	仏 地	僧 地	属 地	

- ii) 付属院

古代における寺院施設のあり方について見ておきたい。これまで学史において指摘されているように、大寺や国分寺クラスの寺院では伽藍を構成する空間を取り巻くように様々な建物が配置されていたことが、「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」、「薬師寺縁起・去天平乃宝龟年中注錄寺家流記」、「西大寺流記資財帳」、「上野交代実録帳」などから明らかである。具体的には寺院を構成する施設として、塔金堂並僧房等院などと呼ばれるいわゆる七堂伽藍の他に、大衆院、政所院、倉垣院（正倉院）、温室院、修理院、花園院、践院、馬屋房などと呼ばれる諸施設が存在し、寺院の運営管理を行っていたことが既に整理されている（太田1979、石村1987・1991、山路1994、須田1994など）。

国分寺の場合は、発掘調査の成果によって、地方への仏教強化、国分寺造成推進事業や宗教上の質的向上などのために設置・派遣された国師、講師や読師が在中したと考えられる国師院や講院などの施設（国師院、講院、講師院）をはじめとして、この他にも墨書き上器から「一院」、「新院」、「東院」、「上院」、「西館」、「油菜所」、「大衆」、「倉」、「蘭」、「説」、「政」と称されたいくつかの施設が存在していたことが確認されている（山路2001など）。また、上述した諸施設の中で考古学的に確認可能な対象としては、生産や



第65図 寺院の空間構造 (1~6・8: 石村1987より, 7: 太田1979より)

施設管理に関わる施設である「修理院」、「薬院」、「苑院」が挙げることができる。この存在を示唆するものとして、鍛冶および鋳造構造、銅・鉄滓、坩堝、輪羽口、とりべ、カナハシなどの鍛冶・鋳造に関わる遺物²⁰。植物遺存体、さらには施設が存在しないもしくは遺物が非常に希薄な範囲などの空間の特徴を挙げることができ、これらをもとに「修理院」、「薬院」、「苑院」などといった施設や空間の性格を特定し、寺院周辺域の土地利用の状況を推定することが可能であり、すでに確認されている事例もある。国分寺の場合、下野国分寺、下總国分寺、上總国分尼寺、安芸国分寺などを挙げることができる。この他聚穴住居などが多い区画は賤院と推定されている。以上の施設の中でも、国分寺において特に注目されるのが、先の講師が在中していたであろう「講院」であり、信濃國分寺付近、下野国分寺、陸奥國分寺、遠江國分寺、甲斐國分寺、上總國分寺、安芸國分寺、肥後國分寺など多くの国分寺で、その存在を示す「講院」などと墨書きされた上器が出土し、相当する施設（建物）が確認されるケースもある。その講師の前身である国師に関わる施設とされる建物も安芸國分寺で確認され、国師⇒講師という制度上の変化と施設の変化が一致する可能性も指摘されている（妹尾2006）。

この他に、伽藍地周辺に国分寺に関連する建物遺構などが確認されている例は、既述したものも含めて管見するだけでも、上野国分寺、下野国分寺、上總国分寺、下總国分寺、武藏国分寺、相模国分寺、遠江国分寺、美濃国分寺、能登国分寺、伊勢国分寺、伯耆国分寺、安芸国分寺、土佐国分寺、日向国分寺、薩摩国分寺などを挙げることができる。

-iii) 付属院の空間配置と計画性

次に寺院においてこれらの施設がどのように配置されているのかを知るために石村氏（1987）の提示した薬師寺、大安寺、西大寺、法華寺などの寺院地の配置図（第65図）を概観してみたい。一部を除いて寺院の多くは、門のある塀/垣（築地塀も含む）などの区画施設によって寺院地をいくつかの区画に区分し、七堂伽藍が配置される空間を取り囲むように、小区画が配置されている。その各区画が、これまで述べてきた「院」に当たる。その配置は、寺院の建立された立地に影響を受けながらも、塔が伽藍地の南側に配置される場合を除けば、寺院が基本的に南面するため、伽藍地の北側を中心に東西方向を取り囲むように配置されることが多いようである。一方、国分寺の場合も現状では北側を中心に諸施設が展開する場合が多い。寺院地を溝および塀/垣などで区画するが、さらに伽藍地を区画する場合と区画しない場合も存在し（山路2001）、前者の場合は築地塀や溝な



第66図 上總國分尼寺の寺院地と政所院の建物配置
(上：小出ほか編2002、下：宮本1998より)

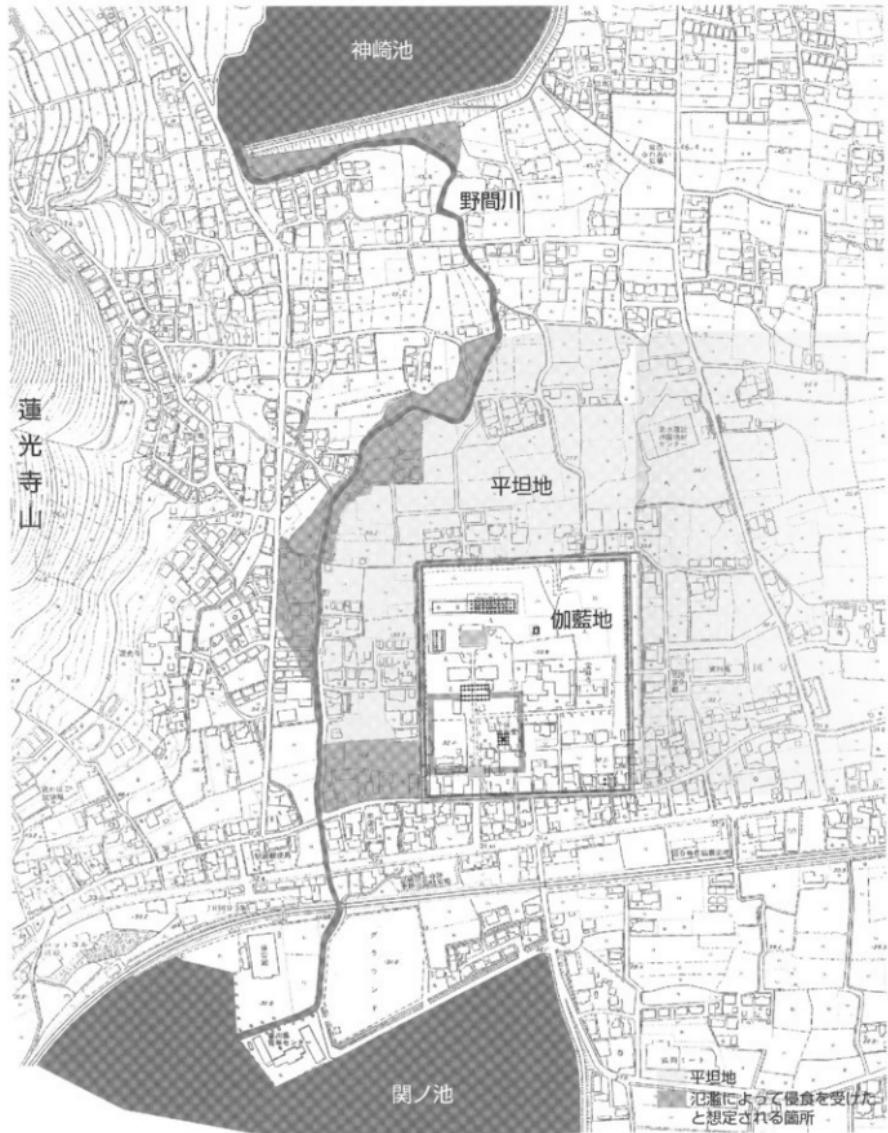
どの区画施設を伴っている。現状で、前者に相当する状況が確認されているのは、武藏国分寺、上総国分寺、上総国分尼寺、上野国分寺、下野国分寺、伊勢国分寺、安芸国分寺、讃岐国分寺などである。

付属院の中で挙げた大衆院の中には、政所、食堂、大炊屋、厨、竈屋、客室などの施設が包摂され、政所は寺院規模が大きくなると大衆院から独立していたようである（川尻2001）。また、国分寺クラスの寺院の場合、「上野国交代実録」などから推定されているようにこの大衆院が寺院地の中に設置され、その中に政所、厨房、食堂、倉などが設けられていたとされている（川尻2001）。いずれにしても、このような寺務を執り行う中枢施設には、いくつかの建物が包摂され、配置されていたことが分かる。このような指摘に対して、発掘調査によってそれを裏付ける事例が既に確認されており、区画施設の有無を問わず建物遺構が密集して確認される場合や上総国分寺、上総国分尼寺（第66図）のようにコの字を下に向かた形態というような官衙風の計画的配置がなされた建物群が確認される場合が存在していたことが分かっている。まとまって確認された建物がそれぞれどのような機能を担っていたかという点は困難な問題であるが、墨書き上器等の出土遺物や遺構の状況などから判断していくほかないであろう。いずれにしても、このような政所院や大衆院といった寺務を執り行う中枢的施設が伽藍地の周辺に存在し、遺構として複数棟の建物が計画的に配置された状況で確認される可能性が高いことは確実である。また、土地利用の観点からもこうした施設は、安定した比較的広い土地の確保が重要であり、国分寺の伽藍地周辺でも特に高台や微高地で、比較的平坦で開けた箇所は先の施設群が確認される可能性が考えられ、讃岐国分寺のみならず諸国の国分寺周辺での調査に注意が必要である²⁵⁾。

そして、以上のこと加えて、官寺としての国分寺は、地方への仏教政策および文化の拠点として役割を担うべく造営されており、その存在ばかりでなく、その総体としての景観が重視されたことは想像に難くないことから伽藍以外の諸施設も寺院景観の構成要素として重要であったと考えられ、付属施設は寺院景観を復元する上でも必要不可欠である。また同時に、周辺に配置された建物の主軸や伽藍との位置関係のあり方は、造営の実態を解明する上で重要で、これまでにも注目されてきた。国分寺の造営・整備に際して立地ばかりでなく寺院領域や諸施設の配置等の諸々の設計において縦密に計画が練られものと想定され、設計図の有無や、造営工事の実施における計画性、工事の実態を、これらの付属施設を含めて総合的に捉えて解明していくなければならない。諸国での国分寺造営における具体的な計画性については、統一された規則性等は現状では見出し難く、寺院地の規模も時期によって変化する点、伽藍地の整備よりかなり遅れて建設される建物遺構の例なども多く確認されている点などから、諸国の国司・国師さらには実質的な造成主体であったであろう都司層の政治的・社会的な力量や諸国財政をはじめとした諸々の事情の影響によって大いに計画は変更されたものと想定される。そうは言ても、国分寺造営において必要な施設や寺院総体の景観などに関する概念やその造営技術は中央からある程度移入されていたものと想定でき、寺院造営におけるある一定の共有された認識のもとで、寺院領域の設定やその空間における諸施設の配置が計画され、先に述べた諸国の諸々の状況や事情に応じて随時計画変更がなされていったものと考えておきたい。そのため、国分寺造営および整備計画に関する検討を行う上で先の付属院の時間空間上における位置を明らかにしておくことは必須であり、周辺環境を含めた土地利用のあり方を踏まえた上で国分寺創建に関わる一連の造営・整備事業の時間的変遷を具に追及することによって、設計変更などを含めた国分寺造営・整備事業の実態解明が可能になるものと考えられる。

-iv) 小結

本書の調査成果では、以上に整理した事項に関するすべてを解明することはできないが、周辺の地形から施設群の配置が想定される空間や先に挙げたいくつかの注意点について検討することは可能であると考えられる。また、現状で寺院地の規模は発掘調査の進んでいる関東などの国分寺を例に挙げると3～5町四方となる場合が多く、地域差は存在するであろうが、同様な規模の範囲に既述したような寺院の管理運営などを行なう多様な施設群が展開していたことは想定される。そのため、遺構の広がりについて現在の地形から想定しておくことは今後の調査にも大きく影響してくるものであり、次項では、現地の踏査をもとに周辺の状況について検討しておきたい。



第67図 讀岐国分寺周辺の残存地形

b) 讃岐国分寺周辺の残存地形と国分寺の寺院地の領域

以上の整理した事項を踏まえた上で、現存する周辺地形の起伏の現地踏査の結果を加えて、現状で想定される讃岐国分寺における寺院地の領域についてここでまとめておきたい。ただし、現存する地形が古地形の起伏を表現しているというのは作業仮説であり、考古事象による検証作業が必要であることは言うまでもない（中島1999）。起伏の所見をトーンによって表示してまとめたものが第67図である。

図のように国分寺周辺の自然地形は、国分台と蓮光寺山の間から南東へと広がる扇状地となっており、北西から南東方向に傾斜している。現在の県道33号線より南側は、国分寺の立地する場所よりさらに低くなっている。閑ノ池や下所という字の土地が存在するなど、安定した土地の確保が難しい地域であったと考えられる。こうした地形からも、第1章で述べたように国分寺建立にあたって安定した土地が選択されていることが分かる。次に、より詳細に地形を検討すると、この国分台および蓮光寺山からのびる扇状地の中でも起伏に違いが認められ、蓮光寺山から野間川にかけては、かなりの起伏や傾斜が存在し、平坦面を造成すると隣接地との高低差が著しくなるばかりではなく、造成コスト面からも寺院の付属施設等を展開させる立地には適していなかったものと考えられる。また、野間川周辺部では、野間川に沿って周辺の土地よりも一段低く、また、段差が著しい箇所が存在し、そのような箇所は川の氾濫などで侵食を受けていたことが想定でき、施設の立地上適当でなかったものと考えられる。

その一方で、図のトーン部分が示すように、野間川以東では土地の起伏が少なく、東側への傾斜が認められず、比較的広い平坦地が存在しており、寺域北方から国分寺周辺を取り囲むように広がっていることが分かる。なお、その平坦地の北側は、神崎池から南東に向かって傾斜して次第に低くなっている状況が現在の地形から確認できる。

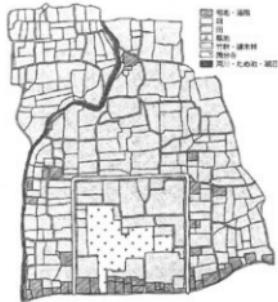
①北方の平坦地

北方の平坦地は、野間川が西へと蛇行しはじめる箇所から北面築地塀までの間に展開している。その範囲は方形とはならないが、下野国分寺など他の国分寺においても自然地形に制約を受けながら寺院地が展開していることを考慮すれば、その点はあまり問題とはならなかったと考えられる。比較的広い平坦地であることから、まとまった建物群が確認される可能性が想定できる。「端岡村大字国分寺上所地籍図」を基に作成された土地利用図（第68図：井口2005 pp125）をみると、伽藍地の東西に位置する南北方向の築地塀の延長線上に見られる地割を示す線（築地塀の位置に相当する）が北へと伸びることが確認でき、国分寺を意識した地割が存在したことが確認でき、条里と国分寺の造営を考える上においても興味深い³⁶⁾。しかし、現在は、宅地もしくは田として土地利用がなされているため、埋蔵文化財の状況は不明である。

②西方の平坦地

西方の平坦地は、野間川と西面築地塀に挟まれた箇所であり、現在の史跡地の一部にあたる箇所である。北方からの一連の平坦地の連続の中でみていくと比較的の高低差は少ない。しかし、史跡地南西部などに一部低地が存在していること、西側に野間川が存在していることなどから広い平坦地は確保できない。また、21次調査では、35次調査よりも高い立地で比較的平坦な箇所を調査しているにもかかわらず、特に古代讃岐国分寺に関連する遺構は認められていない。以上のことを総合して考えると、寺域の西方では複数まとめて建物が確認される可能性よりは、35次調査で確認されたような建物が単体もしくは、数棟程度でいくつか今後確認される可能性の方が高いと考えられる。また、野間川は、国分寺建立に際して現在のような流路変更がなされたとする説もあり（唐木2005）、国分寺創建以降、自然地形を利用した西側の区画施設として機能していた可能性も想定される。

以上のことから、現状でおおよそ南北4町、東西3町規模の寺院地が想定されることとなる。なお、寺



第68図 阿野郡端岡村大字国分寺上所周辺の土地利用（明治期）
(井口ほか2005より)

域の東側部分でも、北方の平坦地から連続する箇所が存在するが、現状では地割等が不明確で（上原2005 pp228）、どの範囲まで寺院地が広がるのかを推定することは困難である。寺院地の確定については既述してきたように、溝などの区画施設の検出が必要であり、その意味で周辺での今後の埋蔵文化財調査成果の蓄積が期待されることは言うまでもない。また、寺領の範囲を含めて国分寺周囲の景観復元も大きな課題である。いずれにしても、本節の検討によって、周辺には関連施設が展開する可能性が高いことが想定できた。

第2節 如意輪寺窯跡採集軒瓦の時間的位置づけとその意義

本節では、如意輪寺窯跡周辺採集軒瓦（以下「如意輪寺資料」という。）である先述したNRH01およびNRM01を取り上げ、検討を行い、当瓦窯業者当時の社会における瓦生産やその意義について考えていく。

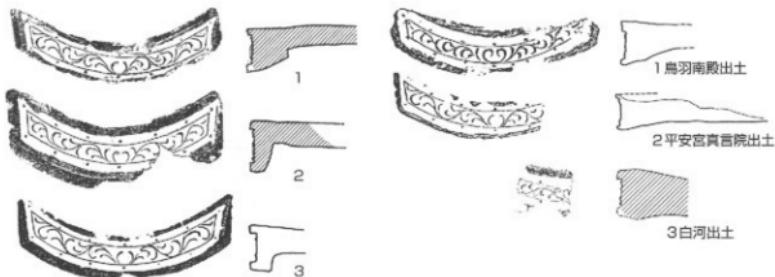
如意輪寺窯跡周辺で採取された瓦（NRH01およびNRM01）の瓦当に施された文様は、瓦当の文様構成から興福寺や法隆寺などがある南都で製作・使用された南都系軒瓦の系譜の影響を受けて成立したと解釈されている（上原1978）。しかし、当該瓦生産における影響は、その最新の意匠の導入のみにとどまり、伝統的技術体系は保持され、生産組織やその体制は大きく変容していない点は注目される（上原1978）。また、この如意輪寺資料は、既述したように型式学的序列、実年代等（安藤1988、歳本2005）、さらには、同一文様をもつ瓦やその瓦が出土した窯跡の年代（廣瀬1982、松井1987、片桐1992、佐藤2000など）⁴⁷⁾について先行研究において検討・議論してきた。本節では、それらの成果を踏まえながら、如意輪寺資料NRH01およびNRM01の文様および製作技法の検討を中心として、その系譜や年代的位置について再度整理しておく。

a) 軒平瓦NRH01（第69・70図）

まず系譜について整理しておく。既述したように、NRH01の文様は南都系瓦に求めることができるという指摘がある（上原1978）。NRH01と同様の唐草文をもつ軒平瓦は、平安京周辺出土の軒瓦を除けば、南都の法隆寺の出土瓦（第69図）の中に近似した文様をもつ瓦を見出すことができる。しかし、法隆寺出土資料は法隆寺の瓦編年で12世紀前半に位置づけられるものであり（毛利光1992）、現状で最も古く11世紀末に位置づけられる同一文様の瓦（1086年に造営された鳥羽南殿出土のもの）との間に時間的齟齬が生じている。南都における瓦窯の様相も不明確であるなど、系譜の粗形を辿る材料が現状では乏しく、その粗形については不明と言わざるを得ない。なお、このほかに同一文様の瓦は県内では、当資料のほかに西村1号窯跡、本烏八幡神社、内間瓦窑支群⁴⁸⁾の資料が知られている。

次に、当資料と同一文様をもつ瓦に関する先行研究を整理しながら、検討項目を抽出していきたい。既述したように、NRH01はこれまで紹介されており（安藤1988、歳本2005）。特に、平安京周辺に供給されていることから、平安時代末期の讃岐国と京とのつながりやその社会的背景に関心が寄せられてきた（上原1978・安藤1988・田中1988など）。当資料の詳細な年代については歳本普司氏が言及している。歳本氏は、十瓶山窯跡群資料（以下「十瓶山資料」と呼ぶ）との細部の比較をもとに、NRH01が十瓶山資料より後出し、11世紀後半でも末に近いという結論を導き出している。ただし、この見解に至る詳細な根拠については、町誌という書物の性格上、詳細に提示されていない。そのため、ここでは、同一文様の瓦との詳細な比較とそれに基づいた型式組列の措定、年代の付与という手順を再度踏む必要があろう。そして、その上で先行研究との対比を行いながら、瓦製作から踏み込むことのできる当時の社会について検討していくべきと考える。

ここでは、資料点数が限られていること、すでに松井忠春氏によって当資料と同一系譜と考えられる文様をもつ軒平瓦の型式変化が詳細にトレースされており（松井1987）、この研究成果をもとにしながら以下に検討を進めていきたい。その際、先に松井氏の見解を整理し、注目すべき文様の属性を取り出し、検討を行う。さらに、上原氏が述べているように、文様のみならず、製作技法を組みこんだ技法の複合体としての技術体系（上原1978）を検討することで、その先にある問題へのアプローチが可能となるものと考え、製作技法についても検討を行う。



如意輪寺窯跡採集

西村1号窯跡出土
(香川県教委 1969より)

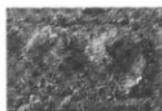
本島八幡神社採集
(安藤文良氏所蔵)

内間瓦窯支群採集^{註8)}
(田村久雄氏所蔵)

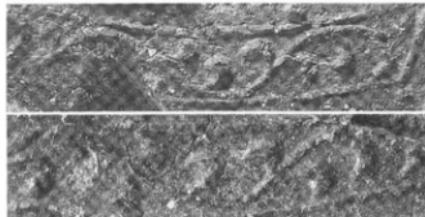
讃岐出土 S = 1 / 6

第69図 NRH01と同一紋章をもつ軒平波

如意輪寺窯跡



本島八幡神社



第70図 文様間の比較

- (i) 唐草文

松井氏によれば、唐草文の変化が鋭敏に時間差を示す属性として有効であり、特に中心飾りの対向C字形が重要であるとされる（松井1987）。具体的には、その中心飾りの対向C字形の左右に展開する唐草文と連続するものから分離するものへという変化。C字の先端部の巻が強いものから緩やかなものへという変化、左右に三反転する唐草の三反転目が断絶しているものから連続するものへという変化、主にこの3つの変化を取り上げて、検討の際に取り上げた資料の組列を鳥羽南殿例→平安宮朝堂院例→本島八幡神社・西村1号窯跡という様に想定した。そして、最終的に実年代の一つの定点を、『扶桑略記』に見られる応徳3年（1086）に造営された鳥羽南殿に求め、鳥羽南殿例はおよそ11世紀末に推定できるとした。先の組列上で新しい型式に位置づけられた本島八幡神社資料や西村1号窯跡資料には12世紀初頭という年代を付与している。

以上の松井氏の挙げた属性を踏まえて、如意輪寺資料について考えてみたい³⁹⁾。当資料は、中心飾りのC字形が唐草文から分離している点、唐草文の上茎やその周辺に配置される子葉が一連のものとなっている点から西村1号窯跡や本島八幡神社資料⁴⁰⁾に近いことは明らかである。さらに詳細に検討すると、唐草の子葉の展開の仕方についても違いが認められる。西村1号窯跡資料は唐草に沿うように茎が伸びた後に子葉が展開し、文様全体に伸びやかさが残る。西村1号窯跡資料と比べると、本島八幡神社資料は茎の伸びが少なく子葉が展開する。子葉もかなり肥厚しており、全体的に唐草文が形骸化している（第70図）。如意輪寺資料も本島八幡神社資料に子葉の様相に近く、主茎が全体的に細くなっている、より形骸化した文様となっている（第70図）。本島八幡神社資料は中心飾りが欠損しているために同一尺度で比較はできないものの、以上のことから文様の形骸化を時間差として捉えるとするならば、型式学的には西村1号窯跡→（本島八幡神社→如意輪寺資料）という組列が想定できそうである。ただし、本島八幡神社資料と如意輪寺資料の間の差異は僅かであり、どこまで時間差として認識できるかはやや問題が残る。

- (ii) 製作技法

次に、製作技法について検討しておきたい。既述したように同一文様の点から十瓶山（陶）窯跡群との技術的関係が想定されている（歳本2005）。加えて、如意輪寺資料に認められる平瓦もしくは軒平瓦の平瓦部の弧状を描く粗い縄目叩き痕は讃岐産瓦の特徴でもあると同時に、その中心であった十瓶山窯跡群の技術系譜を示すものもある。しかし、製作技法についてはこれまでその表面的な類似性の指摘に留まってしまっており、諸属性總体としての製作技法の復元やその相対化による製作者のクセの抽出という視点は欠如しております。そういう観点からの整理が必要であると考えられる。ここで観察結果をもとに西村遺跡などをはじめとした十瓶山窯で確認された軒平瓦および平瓦の凸面に施された縄目叩きについて整理を行い、如意輪寺資料に認められる製作技法の位置づけについてまとめておく。

西村遺跡、丸山窯跡、ますえ畑窯跡などで出土した軒平瓦の平瓦部および平瓦に認められる縄目叩き痕は、おむね細かいものと粗いものの2者が存在することが既に指摘されている（香川県教委1968、渡邊2003）。そのうち平瓦には、広・狭端部に製作台から瓦をはずす際の布目がそのまま残るものと、その後ヘラ削りを行い、布目が残らないもしくは一部が削り取られるものがある。側面の調整では、ヘラ削りするもの、その後にさらに面取りするもの、もしくは全くヘラ削りを行わないものが存在する点などが指摘されている（渡邊2003）。これらの見解を踏まえて西村1・2号窯跡出土資料、ますえ畑窯跡出土資料を実見した結果、既述の優れた指摘を追認することとなったが、これらの特徴を成形から調整へという一枚の瓦製作という一連の行為として捉え直し、特徴をまとめ上げることで以下のような分類単位を抽出することができる⁴¹⁾。先に挙げた資料を下記の類型で考えると、西村1・2号窯跡資料は両方に該当し、ますえ畑窯跡資料は類型1が大部分を占めるほか、鳥羽離宮金剛心院出土平瓦は類型2に属すると考えられるものが多数存在している（鈴木ほか2002）。

類型1：一枚作り特有の広・狭端部および側面に残る布目を切る形で各面にヘラ削りが施されているものである。つまり、叩き整形後、広・狭端部および側面の調整を施すものである。凸面の縄目

の大きさも変異幅はあるものの比較的細かいもの、もしくは整ったものが主体である。さらにこれは、端部のヘラ削りの仕方から次のような2つに細分され、縄目の細かさもおおむねaが細かく、bの方が粗いというように対応する。

a:ヘラ削り後、面取りを行う。

b:ヘラ削りのみ

類型2：凸面の縄目叩き後に、ヘラ削りを行わない。そのため、凸面側の粘土が成形台の棱の上にバリ状に張り出したままになっている。縄目も相対的ではあるが、類型1に比べ粗く、その施し方も雑になっている。

以上の分類を製作方法という視点から捉え直すと、製作の最終段階において端部調整を丁寧に行なうものと行わないものという分類であると言える。これは、読み替えると製作者個人や造瓦集団のクセの違い（すなわち造瓦集団の差）、もしくは製作工程における省略・手抜きとして捉えると時間差（類型1→2）として認識することができる。後者について、さらに古代瓦の多くが端部をヘラ削りおよび面取りしていることを考慮すれば、類型1（a→b）→類型2という変化の方向が推定でき、後者の見解の方が理解しやすいこととなる²³²⁾。一方、軒平瓦の平瓦部については、12世紀前半に位置づけられますえ畠窯跡出土資料や12世紀中葉以降に位置づけられる西村遺跡灰原出土の巴文軒平瓦（上原1978）などの側面は、叩き整形後ヘラ削りを施すもの、さらに丁寧な面取りを行っているものも存在し、これらの資料は類型1に該当する。つまり、十瓶山窯産の軒平瓦では丁寧な端部調整が継続して行われており、側面端部調整を丁寧に行なう伝統が保持され、平瓦の製作技法との間に差異が認められるのである²³³⁾。時間軸上でこの製作技法の変遷を整理しておく必要があるが、本項では、11世紀後半から12世紀代における十瓶山窯での平瓦系の製作技法には先の2つの類型が存在することの指摘にとどめておく²³⁴⁾。

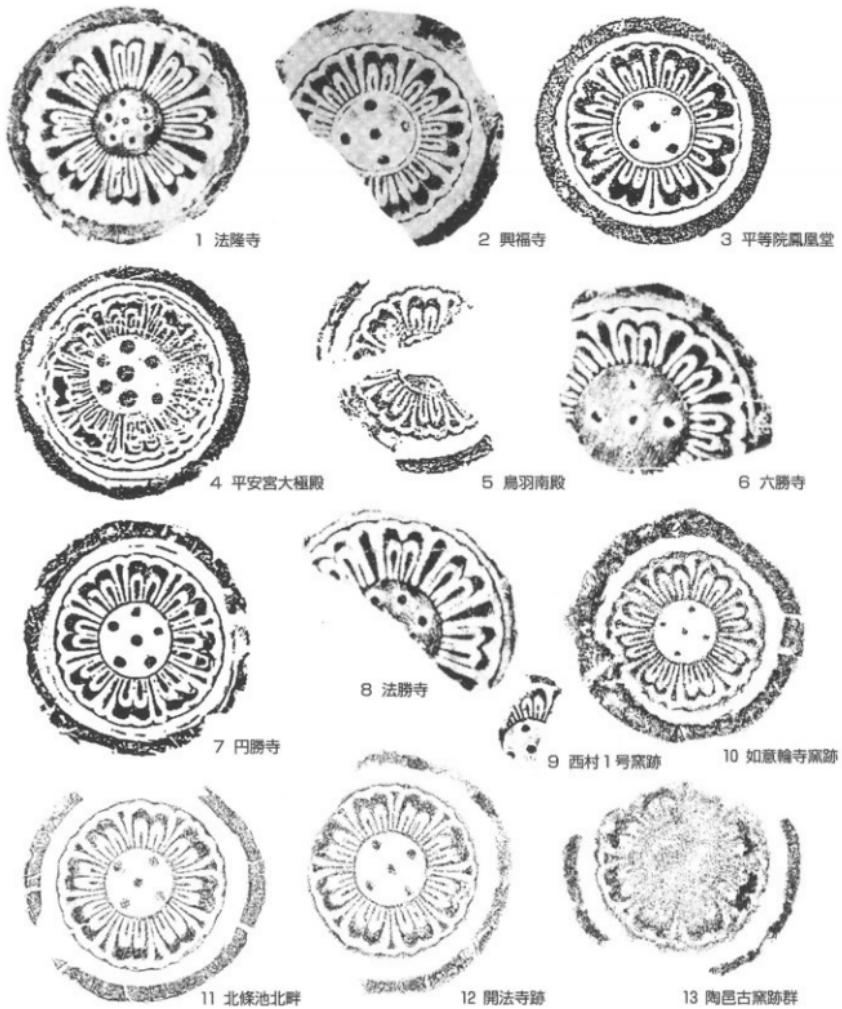
以上の点に留意しながら、先の3つの資料を観察すると、西村1号窯跡資料は側面が遺存しておらず確認できないが、本島八幡神社資料の側面にはヘラ削りが認められ、側面に丁寧な調整を行っている状況が認められ、類型1に該当することが分かる。一方、如意輪寺資料は、既に述べたように類型2のバリ状の張り出しが側面の凸面側に明瞭に確認できる。この他に讃岐系瓦、すなわち十瓶山窯の製作技法の特徴としては瓦当側の凹面にヘラ削りが施される点を挙げることができ（上原1978）、これに該当するものが、内村1号窯跡資料、本島八幡神社資料で、如意輪寺資料ではヘラ削りが凹面側にしか施されていない。

このような特徴から、軒平瓦に認められる表面的な類似性とは別に、既に上原氏が指摘している讃岐系瓦の特徴とされる軒平瓦の瓦当付近の凹凸両面に施されるヘラ削り（上原1978 pp30）や、既述したような十瓶山窯跡群の軒平瓦の側面の端部調整などといった特徴が欠落している状況が確認され、如意輪寺の造瓦集団のクセとでも呼ぶべき特徴が浮き彫りとなる。同様な工具を使用して同様な行為によって瓦を作成し、同様な文様を瓦に施すという意味では同じ系譜として認識できるが、その中の製作行為の中で造瓦集団の差異が存在しており、その差異の発現要因を検討する必要があろう。

以上をまとめると、文様から読み取られた組列や製作技術における十瓶山窯周辺の造瓦集団との差異に加えて、平瓦の破片に類型2の製作技法が認められる点、西村1・2号窯跡をはじめとした十瓶山窯出土瓦とは異なり粗い粘土を選択している点などから総合的に判断すると、如意輪寺資料は、先に挙げた資料よりも相対的に新しい時期に位置付けることができる。

b) 軒丸瓦NRM01（第71-72図）

軒丸瓦NRM01と同一文様の瓦は、既述したように南都系瓦の影響のもと成立した文様と指摘されており（上原1978）、南都に所在している興福寺や法隆寺などで瓦当文様の近似する軒丸瓦が出土し、その他にも同一文様もしくは近似する文様をもつものが平安宮、鳥羽南殿、金剛心院、平等院鳳凰堂、法勝寺、円勝寺で確認されている（第71図）。造営年代をもとに興福寺や平等院鳳凰堂出土のものが11世紀中頃、既述したように鳥羽南殿出土のものが11世紀末という年代比定がなされている。この平等院鳳凰堂をはじめとした平安京周辺出土のこの軒丸瓦の一群は讃岐系瓦屋産のものと南都系瓦屋産のものとが混在し、今後、詳細な観察によって弁別していく必要がある。現状では、先の年代比定をもとに考えると11世紀中頃



第71図 NRM01と同一／近似文様をもつ軒丸瓦

(1:「法隆寺の至寶」1992より, 2-6-8: 関野1940より, 3~5-7: 上原1978, 9: 香川県教委1969より)

が初現期と考えられる。この瓦の蓮華文は中房を2重の圓線で区画するが、鳥羽南殿資料以降は1重の圓線で区画しており、圓線数が減少していることが分かる。そのため、現状で初現期まで遡るNRM01と同一文様の讃岐系瓦屋産資料は確認されていないことになる。したがって、讃岐系と呼ばれるNRM01と同

資料



北條池北畔採集



開法寺跡採集

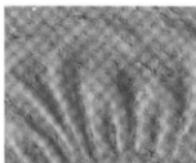


如意輪寺窯跡採集

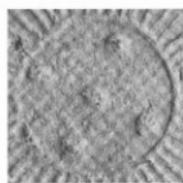
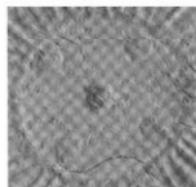
界線



花弁と間弁



中房



第72図 NRM01と同一文様をもつ軒丸瓦の各属性

一文様の系列は、11世紀後葉前後に興福寺や平等院鳳凰堂出土瓦の影響^[23]を受けて成立したものと考えておきたい。次にこの系列の文様変化について考えてみたい。これまで具体的な文様の変化などに関する指摘はなされていないが、他の資料との比較を行っておくこととする。現状で同一文様のものは、西村1号窯跡出土、開法寺跡採集、北條池北畔採集、陶邑古窯跡出土とされるものが県内では知られている^[24]。西村1号窯跡資料は小片であり十分な比較はできないが、他の資料との比較を行なながらその位置付けについても検討を行っておく（第72図）。先に列挙した軒丸瓦の文様を詳細に検討すると、花弁と間弁の部分に大きな差異を見出すことができる。

まず、西村1号窯跡資料をはじめとした軒丸瓦は、花弁の花びら部分を立体的かつ面的に表現しているのに対して、NRM01の花弁は非常に貧弱で、太めの突線状を呈し、輪郭のみを表現しているものが多い。個々の花弁は複弁ではあるが、二つの単弁を合わせたような表現に近い。一方、間弁に関しては、NRM01以外の資料は先端部が花弁側に反りながら扇状に開く形態を呈するが、NRM01は間弁が棒状もしくは先端部が肥厚した形態を呈する。間弁は均等に配置されず隣接する花弁と接合してしまっているものさえある。これらの特徴から、NRM01は、他のものと比べて文様の崩れが進んでおり、相対的に新しい時期に位置づけられるものと考えられる。

さらに、この文様の崩れは、瓦范作成時の蓮華文の彫り込みにおける細かな配慮が欠如した状態を示すものである。このことに加えて全体の調整も粗雑で、胎土も軒平瓦のように粗い胎土を選択していること

から、窯に残される失敗品であることを考慮しても十瓶山窯のものとは異なり、如意輪寺窯を操業していく造瓦集団の瓦製作における特徴が製品としての瓦に色濃く認められる。

c) 小結

ここで、これまで整理した事柄をまとめ、平安時代末期の讃岐国における瓦生産に若干触れてまとめておきたい。

これまでの軒瓦の文様および製作技法に関する検討の結果、特に文様の崩れを重視して考えると、如意輪寺資料は他の同一文様の資料よりも時期的に新しい段階に位置づけられる。その結果、松井氏の提示した年代観をもとに如意輪寺資料の実年代を考えると、12世紀前葉以降に位置づけることができる。一方、如意輪寺資料に認められる製作における粗雑化などの特徴は、当該期における瓦生産の中心であった十瓶山窯造瓦集団の製作技法系譜の中で捉えることができるものの、既述してきたように製作技法総体でみるとクセとも言うべき一つの特徴の抽出が可能である。先の類型1が12世紀中葉以降も軒平瓦において存続することを考慮すると、十瓶山窯における造瓦組織の影響を大きく受けながらも、実際の製作において独自性が入り込む余地が存在したことを見認める現象と認識できる。その独自性とは、既述したように手抜き的側面の強いものである。

以上のような現象は、瓦生産において中心的存在であった十瓶山窯を操業していた造瓦組織の製作に関する技術指導を含め、周辺域の造瓦組織との諸関係が形成されていたこととその影響力の内容を示すものとして読み替えることもできる。

ここで、十瓶山窯以外での造瓦組織の形成と新規の窯の操業について考えてみると、下記のようなケースが想定される。

A: 新しい集団に十瓶山窯の集団が技術指導を行う場合。

B: 十瓶山窯跡の造瓦集団から分節した集団が新たに窯を操業する場合（臨時のケースも含む）。

以上のパターンについて具体的に如意輪寺窯の場合で考えてみると、同一文様を使用し、造瓦行為における類似性と手抜き的側面を時間差として認識すればBのタイプが想定できる。またAの場合、手抜き的側面と捉えたクセは、十瓶山窯の造瓦組織の技術指導を受けたものの、その技術を習得する際にいくつかの製作に関する情報が欠落してしまったものとして認識できる。しかし、ここで重要な点は、これまで述べてきたように、いずれのケースにしても、周辺以外で新たな瓦窯の操業を行う上で、十瓶山窯の造瓦組織との技術指導などを含めた諸関係が形成されていたということである。

これまでの検討から、いずれにしても11世紀後半から12世紀代における讃岐国における瓦生産は、その中心であった十瓶山窯の集団が何らかの形態で関与していること（上原1978）は明らかである。当該期における讃岐国では、この十瓶山窯跡以外に大規模な瓦窯群は現状では確認されておらず、如意輪寺窯のように小規模に操業したであろう窯²¹⁽¹⁾が多数存在していたことから、讃岐国内に大きく分けて2タイプの造瓦集団のありかたが存在していたことが想定される。この小規模の瓦窯の多くは、寺院付属瓦窯である。しかし、片桐孝浩氏が紹介した大水上神社周辺採集の瓦に認められるように、付属の瓦窯をもつ寺院からも十瓶山窯産の瓦が認められる場合がある。このことは、実際の寺院の造営もしくは修造時には十瓶山窯からも瓦が供給されていたことを示すもので、その供給先が12世紀中葉以降、讃岐国内の寺院へと変化していく可能性が想定される²¹⁽²⁾。つまり、十瓶山窯を操業した集団は、瓦や既製品の提供をはじめとする諸形態での技術指導体制を整えていただけなく、瓦の供給面での協力体制も整えていたということになる。

十瓶山窯とこのような如意輪寺窯のような小規模な瓦窯との関係のあり方は、十瓶山窯から寺院付属の瓦窯が存在する寺院への瓦の供給が開始された12世紀前葉から中葉前後に開始した可能性が想定される。造瓦に関しては、技術的差異が細部に認められ、その行為の細部に渡って規制を受けるようなものではなかったと考えられる。そのため、両者は、瓦の供給という側面に重点を置いた補完的関係を形成していたものと考えておきたい²¹⁽³⁾。

以上のような様相は、現状では12世紀中葉以降において確認できるが、先に述べた小規模の窯跡の存在は、新たに瓦生産を行なう小規模な集団の出現もしくは十瓶山窯を操業する集団の分節が、平安京での修

造・造寺が一段落した後、讃岐国内の寺院の修造や造寺などに伴って瓦の需要の増加によって起こった結果の所産として考えられる。しかし、先に述べたような十瓶山窯と周辺の小規模な窯との関係がどのような社会背景によって形成されたのかという点については今後の課題としておきたい。これまでの検討は、今後、窯構造などを含めて技術系譜および時期比定などの検討を詳細に行った上で、讃岐国における瓦生産の系譜とその展開について再論する必要があろう。また瓦の年代についても、今回の検討は非常に少ない個体数での比較であるため、資料の増加を待って今後さらに同一文様の時間的変遷について、より詳細な検討作業を積み重ねていく必要があることは言うまでもない。

第3節 讃岐国分寺跡を取り巻く問題

最後に、讃岐国分寺跡の取り巻く問題についてまとめて本稿を終えることとしたい。近年、渡部明夫氏による讃岐国分寺跡出土軒瓦に関する研究（渡部2003・2004・2005・2006）によって軒瓦の詳細な駆年が組み立てられ、その成果をもとに国分寺の成立や再整備の実態に関する見解が提示されている。渡部氏の見解は、讃岐国分寺の伽藍地の創建と整備に関して見直しを迫るものと同時に、これまでの全国の国分寺の調査研究成果によって提示された創建そして伽藍の整備という変遷モデル（須田1994・岡本2002など）との対比を可能とするものである。ただし、氏の見解は遺物論からの提示であり、今後、主要伽藍地の発掘調査を含めて渡部氏の見解に関する検証作業は必要となろう。

これまで、発掘調査成果をもとに伽藍地の規模やその構造等が次第に明らかになってきたが、今後、考古学的研究の強みである通時的視点での国分寺の変遷の実態を解明していくことが、国分寺の存在した在地社会との関わり、すなわち在地社会における位置づけや機能の解明へと繋がることとなり非常に重要であると考える。国家的施設として創建された国分寺は、国家的・官的側面をもつと同時に在地社会における歴史的・社会的脈絡の中で存在していたことは疑う余地なく、その脈絡の中で捉えていく必要があり、その点からも、讃岐国分寺跡を取り巻く社会、そしてその歴史に関する調査研究を進める中で、今後、整備事業に伴い実施した確認調査（58年度～61年度・平成3年度）で出土した遺物の整理・分析を進めていくことも重要である。

いずれにしても、これまでに提示された讃岐国分寺像は、伽藍の構造の概要にとどまるものであり、更なる考古学的研究方法による検討の必要があることは言うまでもなく、今後、史跡地の公有化を推進し発掘調査をはじめとする調査研究の進展が望まれている。

【註】

- 註1) この場合、国分寺の寺域の規模の捉え方が問題となる。石田茂作氏の研究（1966）によって、多くの国分寺の寺域は方2町であるとされ、七条伽藍を中心とする空間はおよそその規模に取まることが発掘調査によって明らかにされ、讃岐国分寺もその一つである。しかし、既に須田氏らが指摘しているように付属施設が展開していることは確実で、石田氏の寺域がどの範囲に対応する用語であるのかが重要なとなる。
- 註2) 上原真人氏は、仏地と僧地の関係について整理し、寺院によってその構成施設が異なることを指摘している（上原1986）。そのため、講堂が必ず僧地の構成施設とはならない場合も存在することとなり、寺院によって僧地と仏地としての認識が異なっていたと想定される。
- 註3) ただし、山路直充氏が指摘するように、伽藍地内に寺務施設が入る事例もある（山路2001）。
- 註4) 未報告ではあるが、讃岐国分寺の伽藍周辺の調査でも鍛冶・鋳造関連遺物が出土していることから、恒常的な施設とは別にその利用がかなり短期間のものも存在したようである。
- 註5) 調査面積にも影響されるため、空間的広がりや機能を特定する際に非常に困難な場合もあり、付属施設の検討は慎重に行わなければならない。建物構造が単体で確認された場合でも主軸方位や伽藍との位置関係における計画性の有無が重要となろう。
- 註6) 讃岐国分寺と条里との関係についてはすでに木下順一氏（1997）、木下良氏（2001）によって検討され、条里との関係が想定されている。また、この点については渡部明夫氏からも様々なご教示をいただいた。記して謝意を表したい。
- 註7) 如意輪寺瓦と同一文様の軒瓦およびその出土構の年代統については下記のように指摘されている。
上原真人（1978） 国・文様が南都法隆寺を中心に11世紀後半～12世紀初頭にかけて盛行した文様としている。

- 渡部明夫 (1980) 須恵器・軒丸の検討から西村2号窯跡⇒1号窯 1号窯跡:11世紀末前後に比定している。
- 廣瀬常雄 (1981-1982) 黒色土器碗の変遷から2号窯跡⇒3号窯跡⇒1号窯跡 (11世紀末頃) という序例と年代観を提示している。
- 松井忠春 (1987) 軒平瓦の文様の検討から本島八幡神社、西村1号窯跡を12世紀初頭に比定している。
- 片桐孝浩 (1992) 上器編年の中で西村2号窯跡を11世紀中頃、1号窯跡を12世紀前半に比定している。
- 佐藤竜馬 (2000) 土器編年の中に西村2号窯跡を11世紀中葉～第3四半期、1号窯跡を12世紀前半 (第1四半期～第2四半期) に比定している。
- 森木晋司 (2005) 如意輪寺窯跡の年代を瓦および土器の検討から11世紀末に比定している。
- 以上の年代観については、其伴した瓦を実年代の根据とする場合も含めている。また、以上のようにやや年代観には研究者によって幅があるのが現状である。
- 註8) 内間瓦窯跡支群資料は、田村久雄氏採集品である。田村氏には貴重な資料の実見および写真の掲載を許可していただいた。記して謝意を表したい。
- 註9) 文様や製作技法については、片桐孝浩氏、渡部明夫氏より様々なご教示をいただいたことを明記しておく。
- 註10) 本島八幡神社採集瓦は安藤文良氏所蔵品である。貴重な資料を実見させていただいた上に、拓本掲載についても快諾していただいた。記して謝意を表したい。
- 註11) 当然であるが、この類型の中間的様相をもつものも存在する。
- 註12) ただし、ここで想定している時間差は、同一の窯の採集内におさまる時間差である。また、この二つの分類単位を妥易に、これまで指摘されているような西村遺跡の2号窯⇒1号窯に対応可能かどうかに関しては現状では未検討である。
- 註13) この平丸と軒平丸の製作技法の差異は、上原氏の指摘する平瓦製作法の簡素化および特殊化 (上原1990 pp708) の現象の一つとしても理解ができる。しかし、この点については今後、十数山窯跡における瓦の製作技法の通時的变化と製作集団の系統差などの検討を踏まえた上で結論を出す必要があろう。
- 註14) 瓦ごとに製作技法のくせがまとまりとして認識できる可能性もあり、十数山窯跡の中でも製作におけるクセの抽出と瓦当文様との関係などを詳細に検討することによって複数の技術系統の集団の存在を解明する可能性も想定される。
- 註15) 影響という言葉の内容が問題となるが、その内容については今後の課題としておきたい。
- 註16) なお、西村1号窯跡出土資料 (第71-9) は香川県埋蔵文化財センター所蔵、南法寺跡採集資料 (第71-12) は萩原文庫所蔵、北條池跡採集資料は日吉町市立所蔵 (第71-11)、南邑古窯址出土資料 (71-13) は香川県歴史博物館所蔵である。諸氏、諸機関には貴重な資料を実見させていただいた。また、北条池北堀採集資料、南法寺跡採集資料については写真および拓本の掲載、陶古窯跡出土資料については拓本の掲載について快諾していただいた。記して謝意を表したい。
- 註17) 龍崎国内にはこの他に、丸亀市三谷寺瓦窯跡、善通寺市大麻瓦窯跡、三豊市大水土神社瓦窯跡、法華寺瓦窯跡、道音寺瓦窯跡などの小規模な窯跡が存在している (安藤1967、香川県教委1969、上原1978、片桐1999など)。
- 註18) 片桐氏からご教示頂いた。
- 註19) このような体制の背後には、藏本氏の指摘するような岡田の存在 (藏本2005) が想定できよう。その影響力をどの程度想定するかは、更なる検討が必要であろう。

【参考文献】

- 「大安寺伽藍縁起並流記資財帳」(『奈寧造文』中巻366頁参照)
- 「楽師寺跡起・去天平乃宝龜年中注釋家流記」(『大日本佛教全書』寺誌叢書第2-243頁参照)
- 「西大寺流記資財帳」(『奈寧造文』中巻395頁参照)
- 安藤 寛 1994 「第Ⅷ章 平成5年度調査のまとめ」[平成5年度造江国分寺跡周辺 国分寺・国府台遺跡] 鰐田市教育委员会
- 安藤文良 1967 「讃岐古瓦図録」[文化財協会報] 特別号八 香川県文化財協会
- 1988 「(7) 讳岐の古瓦」[古代の讃岐] 美術社
- 石田茂作 1966 「東大寺と国分寺」 至文堂
- 石村喜美 1987 「第2章 初期寺院構成施設の研究」[日本古代仏教文化史論考] 山喜房津書林
- 1991 「古代寺院に見る大衆院の性格」[日本佛教史学] 第25号 日本佛教史学会
- 糸原 清 1997 「Ⅴ各論 2寺院と仏堂・付属施設」[千葉県文化財センター研究紀要] 18 (財) 千葉県文化財センター
- 上杉和央 2005 「4南海道と桑理地割」「さぬき国分寺町誌」国分寺町
- 上原真人 1978 「古代末期における瓦生産体制の変革」[古代研究] 13-14 元興寺文化財研究所考古学研究室
- 1986 「仏教」[新波瀬日本考古学] 第4巻集落と祭祀 岩波書店
- 1990 「平瓦製作法の変遷 -近世造瓦技術成立の前提」[今里幾次先生古稀記念 挿画考古学論叢] 今里幾次先生古稀記念論文集刊行会
- 2006 「寺院造営と土器」[記念的建造物の成立] 東京大学出版会
- 宇山知昌・上杉和央・井口洋 2005 「第4章地形圖に要ほうする地域の姿を読む」「さぬき国分寺町誌」国分寺町

- 太田博太郎 1979 「南都六宗寺跡の建築構成」『日本古寺美術全集』2 法隆寺と斑鳩の古寺 集英社
- 大脇 淑 1995 「第V章考察 第1節寺院地と伽藍配置の復元」『遠江国分寺跡の調査』財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 岡本東三 2002 『古代寺院の成立と展開』山川出版社
- 香川県教育委員会 1969 「香川県陶邑古窯跡群調査報告」
- 1980 「内村遺跡」一般国道32号岐南バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
- 片桐孝浩 1992 「第5章考察 - 古代から中世にかけての土器様相」『中小河川大東川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』川津元結木進藤・香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財センター
- 1999 「人水上神社所蔵古瓦について」『香川考古』第7号 香川考古刊行会
- 唐木裕志 2005 「Ⅲ中世 4 水利と交通路」『さぬき国分寺町誌』 国分寺町
- 川尻秋生 2001 「資材帳からみた伽藍と大衆院・政所」『古代』第110号 早稲田大学考古学会
- 北山雅一郎 1995 「瓦へ進ちゃんのはるかな旅」『讀賣-あゆみ、わざ、えー』(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 木澤博明 1994 「上野国分寺」「シンボジウム 開東の国分寺」 開東古瓦研究会
- 木下晴一 1997 「讀賣国分寺跡」『空から見た古代遺跡と条里』 条里研究会
- 木下 良 2001 「国分寺と条里」『古代』第110号 早稲田大学考古学会
- 藏本吉司 2005 「7中世の考古学」「さぬき国分寺町誌」 国分寺町
- 小出紳夫ほか編 2002 「坊作遺跡」 市原市教育委員会
- 財團法人京都市埋蔵文化財研究所 1996 「木村捷三郎収集瓦図録」
- 坂清秀・1982 「初期伽藍の様相認識と帝廟の崩壊」『歴史考古学研究』II ニューサイエンス社
- 佐藤竜也 2000 「高松平野と周辺地域における中興土器の福井」「空港跡地遺跡調査」(財)香川県埋蔵文化財センター
- 鈴木久男ほか編 2002 「鳥羽御宮跡」「金剛院院跡の調査」 財團法人京都都市埋蔵文化財センター
- 須田 魁 1994 「四分寺創建の諸問題」「シンボジウム 開東の四分寺」 開東古瓦研究会
- 関野 真 1940 「日本古瓦文様史」「日本の建築と芸術」上巻 岩波書店 (太田博太郎編集)
- 妹尾周三 2006 「古代寺院の伽藍配置」『考古学ジャーナル』No.545 ニューサイエンス社
- 竹内理三 1998 「寺院成立の要素」「奈良朝時代に於ける寺院経済の研究」角川書店
- 田中健二 1988 「第八章莊園と公領 第1節荘户と初期花園」『香川県史』第1卷通史編 原始・古代 香川県
- 千葉幸伸 1980 「外区の草薙のめぐらし軒丸瓦」「瀬戸内海歴史民俗資料館年報」9 濱戸内海歴史民俗資料館
- 1981 「平安後期讀賣古瓦の地方的様相」「瀬戸内海歴史民俗資料館年報」6 濱戸内海歴史民俗資料館
- 中島恒次郎 1999 「筑前国分寺跡の規模と環境」「古文化談叢」第42集 九州古文化研究会
- 羽田正明 1983 「讀賣古瓦で題・陶で焼かれた古瓦をめぐって」『香川史学』第12号 香川歴史学会
- 廣瀬常雄編 1981 「西村遺跡II」 香川県教育委員会
- 1982 「西村遺跡III」 香川県教育委員会
- 前沢和之 1988 「第Ⅷ章 まとめ」「史跡上野国分寺」発掘調査報告書・本文編 香川県教育委員会
- 松本忠春 1987 「香川県西村遺跡1号出土軒先瓦を廻って—その製作使用年代について—」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 松尾忠幸編 1996 「特別史跡讀賣四分寺跡保存整備事業報告書」 四分寺町教育委員会
- 松本忠幸 2000 「如意輪寺跡」「香川県埋蔵文化財調査年報」 平成10年度 香川県教育委員会
- 宮本敬一 1998 「土佐国分尼寺跡」「千葉県の歴史」資料編考古3 千葉県
- 毛利光彦彦 1992 「平安時代の瓦」「平安時代における東西伽藍配置」「法隆寺の至寶」瓦 昭和資財報15 小学館
- 山口英男 2001 「古代莊園園に見る寺域の構成」『古代』第110号 早稲田大学考古学会
- 山路直充 1994 「寺院地といふ用語」「下龍国分寺跡 平成元~5年度発掘調査報告書」市川市立考古博物館研究調査報告 第6回 市川市教育委員会・市川市立考古博物館
- 1995 「下龍国分寺」市立市川考古博物館
- 1998 「下龍国分僧跡」「千葉県の歴史」資料編考古3 千葉県
- 2001 「国分寺における寺院地と伽藍地(上)」「古代」第110号 早稲田大学考古学会
- 渡部明夫 1980 「讀賣國の須佐先生について」『鏡山先生古稀記念古文化論叢』鏡山先生古稀記念古文化論叢刊行会
- 2003 「平行叩き目をもつ讀賣國分寺創建時軒平瓦」「香川史学」第30号 香川歴史学会
- 2004 「軒平瓦SKH1の瓦当文様からみた讀賣國分寺の造営年代」「香川史学」第31号 香川歴史学会
- 2005 「天平勝宝以前の讀賣國分寺」香川県埋蔵文化財センター研究紀要 I 香川県埋蔵文化財センター
- 2006 「讀賣國分寺跡出土軒丸瓦の福井-子葉間に仕切り線をもたない複弁蓮華文軒丸瓦の福井について-」「香川県埋蔵文化財センター研究紀要 II 香川県埋蔵文化財センター
- 渡邊淳子 2003 「野田院跡の瓦」「史跡有岡古墳群(野田院古墳)保存整備事業報告書」普通寺市教育委員会

第4表 遺物観察表

i) 士器

特別史跡 謝岐國分寺跡

16次

番号	種類	器種	寸法(cm)		調 整	色 調	胎 土	焼成	備考
			口径	底面					
1	須恵器	壺	(14.0)	(L1)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:黒褐5Y R3/1 内面:灰白5Y R6/6	1mm以下の石英・長石 を含む	良	
2	須恵器	壺×火			外面:ナデ	内面:ナデ	1mm以下の石英・長石 を含む	良好	
3	土器	壺			外面:ナデ	内面:ナデ	1mm以下の石英・長石 を含む	良好	
4	土器	小壺	(1.0)	(6.0)	内面:ナデ	内面:ナデ	1mm以下の石英・長石 を含む	良好	
11	土器	小瓶	(1.0)	(6.1)	外面:ナデ	内面:ナデ	1mm以下の石英・長石 を含む	良	
12	土器	杯	(2.4)	(7.8)	外面:ナデ	内面:ナデ	1mm以下の石英・長石 を含む	良	
15	須恵器	壺	(19.0)	(1.7)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	内面:灰口5Y R3/1 内面:灰口5Y R6/6	1mm以下の石英・長石 を含む	良	
16	須恵器	杯	(0.5)	(10.5)	内面:ヨコナデ	内面:ヨコナデ、ヘラ切り	1mm以下の石英・長石 を含む	良	
17	須恵器	杯	(2.0)	(12.3)	外面:ナデ	内面:ナデ	1mm以下の石英・長石 を含む	良	
18	土器	壺	(13.6)	(32)	外面:ヨコナデ	内面:銀鏡模様	1~2mm以下の石英・ 長石を含む	良	
19	土器質	足盤	(23.8)	(4.6)	外面:ヨコナデ	内面:ナデ	2mm以下の石英・長石 を含む	良	
20	土器質	鋸×火	(6.1)	(16.2)	外面:ナデ	内面:ナデ	1mm以下の石英・長石 を含む	良	

番号	種類	器種	寸法(cm)		調 整	色 調	胎 土	焼成	備考
			口径	底面					
28	土器	十輪			外面:薄緑が美しいヨコナデ 内面:施毛が美しいヨコナデ	外面:灰青5Y R7/4 内面:灰青5Y R8/3	かなり緑良	良	
29	土器質	十輪	(22.3)	(3.9)	外面:指擦痕	内面:白5Y R8/2	2mm以下の石英・長石 を含む	良	
30	土器質	十輪	(24.0)	(2.9)	外面:指擦痕	内面:白5Y R8/2	1mm以下の石英・長石 を含む	良	
31	陶器	鉢	(22.8)	(7.0)	外面:施毛	内面:灰5Y R4/1	石英	良好	肥前系
32	陶器	鉢	(20.4)	(7.9)	外面:施毛	内面:灰5Y R2/1	1mm程度の白色の 砂粒をわずかに含む	良好	肥前系
33	陶器	鉢	(2.6)	(4.4)	外面:施毛	内面:灰5Y R2/1	精良	良好	肥前系?
48	須恵器	要×透			外面:ナデ	内面:ヨコナデ	1mm以下の砂粒を多量 に含む	良好	
49	須恵器	要×透の 口透形			外面:ナデ	内面:灰5Y R5/1	砂粒を含まない	良好	
50	土器質	鉢			外面:施毛	内面:白5Y R8/2	3mm以下の石英・長石 を含む	良	
51	土器質	上巻			外面:ナデ	内面:白5Y R8/3	4mm以下の石英・長石 を含む	良	
52	土器質	足盤			外面:ナデ	内面:白5Y R8/2	2mm以下の石英・長石 を含む	良	
53	七輪器	足盤			外面:ナデ	内面:ナデ	1mm以下の石英・長石 を含む	良好	
54	土器質	脚C	26.0	(3.1)	外面:ナデ	内面:白5Y R8/2	1mm以下の石英・長石 を含む	良	
55	土器質	土鍋	22.3	(6.2)	外面:施毛	内面:灰5Y R2/1	1mm以下の石英・長石 を含む	良	
56	土器質	鉢	(25.2)	(7.2)	外面:ナデ	内面:白5Y R8/2	1~2mm以下の石英・ 長石を含む	良	
74	土製品	塙			外面:ナデ	内面:白5Y R8/2	1mm以下の白色の砂粒 を含む	良	
25	須恵器	蓋			外面:天井部	内面:ヨコナデ、ナデ仕上げ	1mm以下の白色の砂粒 を少量含む	良	
75	土製品	錠	11.6	6.3	外面:ナデ	内面:灰5Y R6/6	良	良	

番号	種類	器種	寸法(cm)		調 整	色 調	胎 土	焼成	備考
			口径	底面					
84	須恵器	壺			外面:平行引き	外面:灰5Y R6/1 内面:ナデ	1mm以下の石英・長石 を含む	良	
85	須恵器	高杯	(3.5)		外面:ナデ	外面:灰5Y R6/1	1mm以下の石英・長石 を含む	良	
86	土器	杯	(0.9)	(8.0)	外面:ナデ	内面:ナデ	1mm以下の石英・長石 を含む	良	
87	土器	杯?	(1.9)	(6.4)	外面:ナデ	内面:ナデ	2mm以下の石英・長石 を含む	良	
88	土器質	漏斗	(3.5)	(10.2)	外面:指擦印模	外面:灰5Y R8/1 内面:ナデ	1mm以下の石英・長石 を含む	良	
89	土器質	足盤	(26.0)	(3.1)	外面:ナデ	内面:ナデ	1~2mm以下の石英・ 長石を含む	良	
90	土器質	足盤			外面:ナデ	内面:ナデ	2mm以下の石英・長石 を含む	良	
91	土器質	足盤			外面:ナデ	内面:ナデ	3mm以下の石英・長石 を含む	良	
92	土器質	土鍋	(25.4)	(9.6)	外面:ナデ	内面:ナデ	1~2mm以下の石英・ 長石を含む	良	
93	土器質	火鉢			外面:ナデ	内面:ナデ	2mm以下の石英・長石 を含む	良	
94	土器質	土鍋	(42.2)	(8.5)	外面:ナデ	内面:ナデ	1~2mm以下の石英・ 長石を含む	良	

番号	種類	器種	寸法(cm)		質 種	色 調	胎 土	焼成	備考
			口径	底面					
101	陶器	瓶	(10.2)	6.2	5.8	釉:灰5Y R7/1 底:灰5Y R8/1	精良	細口美濃造	
102	陶器	瓶	(2.4)	4.5		釉:無鉛5Y R2/3 底:灰5Y R7/2	1mm以下の石英・長石 を含む	良	細口美濃造
103	須恵器	杯	17.0	(4.6)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:灰5Y 内面:灰5Y	1mm以下の石英・長石 を含むが少	良	

番号	種類	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	高さ					
104	須賀器	盃	13.2	(28)	外側:ナデ 内側:ナコナデ	外側:灰5/ 内側:灰10YR 8/4	1mm以下の石英・長石 を含む	良好 燒成		
105	十輪質 土器	足盤	(17.4)	(41)	外側:ナデ 内側:ナコナデ	外側:灰5/ 内側:灰5Y R6.6	1mm以下の石英・長石 を含む	良好 燒成		
106	十輪質 土器	土器	(26)		外側:ナデ 内側:ナコナデ	外側:灰5Y R6.6 内側:灰5Y R7.6	1mm以下の石英・長石 を含む	良 備、こげ有		
107	十輪質 土器	足盤			外側:ナデ 内側:ナコナデ	外側:にふい青黄灰10Y 8/3 内側:	1mm以下の石英・長石 を含む	良好 燒成		
119	土器品	壺		厚2.8	外側:灰白	外側:灰白2Y 8/2				

番号	種類	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	高さ					
120	須賀器	青磁皿	(25)	(50)	外側:青磁 内側:白	外側:青磁G7/1 内側:灰白&白	良好	肥前系		
121	須賀器	碗	(3.4)	(5.6)	外側:ナデ 内側:ナコナデ	外側:オーバー灰25G Y6/6 内側:灰7N/7	良好			
122	陶器	堆反碗	(8.6)	(45)	外側:ナデ 内側:ナコナデ	外側:青25Y 8/3 内側:灰白&白	審	良 京、紀楽系		
130	十輪質 土器	蓋?	(3.1)	7.0	外側:ナデ 内側:ナコナデ	外側:灰5Y R6/3 内側:にふい青黄灰10Y 8/3	1mm以下の貯石・内凹 を含む	良好 底部外側:底部有 石を含む		
133	陶器	石平皿	(3.0)	(49)	外側:ナコナデ 内側:	外側:青5V 5/3 内側:灰白	審	良好	肥前系	
134	陶器	青磁蓋	8.8	2.9	3.4	外側:灰白 内側:青白	外側:灰白10Y 6/7 内側:灰白N/7	稍欠	良好	肥前系
135	須賀器	碗				種:水玉 外側:青白&白 内側:白	良好	肥前系		
136	須賀器	杯	(1.9)	(11.1)	外側:ナデ 内側:ナコナデ	外側:灰5Y R5/3 内側:灰7N 5Y 5/3	1mm以下の石英・長石 を含む	良		
139	須賀器	甕?			外側:ナデ 内側:ナコナデ	外側:灰1/1 内側:灰 N/6	1mm以下の石英・長石 を含む	良好		
140	須賀器	蓋?	(10.8)	2.5	(58)	外側:ナデ 内側:ナコナデ	外側:透明白 内側:灰白	審	良好	肥前系
141	陶器	小侈輪		(4.0)	(3.4)	外側:ナコナデ	外側:灰10G Y8/1	審	良 京、紀楽系	
142	須賀器	青磁染付	(9.6)	(3.9)		外側:灰白N/8 内側:青白	明暦10G 10Y 7/1. 稼	良	肥前系	
143	須賀器	堆反碗	(10.6)	(1.9)		外側:灰白N/8 内側:青白	透明釉	審	良 京、紀楽系	
144	須賀器	水甕		(3.0)	(19.9)	外側:青白5V 7/3 内側:青白2Y 7/4	2mm以下の石英・長石 を含む	良	肥前系	

番号	社名	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	高さ					
176	十輪質 土器	盃	(40.0)	(13.9)	外側:ナデ 内側:ナコナデ	外側:灰4/ 内側:灰N/4	1mm以下の石英・長石 を少々含む	良 備、こげ有		
177	十輪質 土器	足盤	19.8	(35)	外側:ナデ 内側:ナコナデ	外側:にふい青黄灰10Y 7/3 内側:灰 N/7	1mm以下の石英・長石 を含む	良好		
178	須賀器	蓋?	(6.7)	覆5.8	(0.45)	外側:ナコナデ 内側:ハリナ	外側:灰4/ 内側:灰 N/4	1mm以下の石英・長石 を含む	良 亀山宮	
179	須賀器	染付瓶	(4.4)	3.8		外側:青磁 内側:明暦灰7.5Y 8/1	外側:明暦灰7.5Y 8/1 内側:明暦灰7.5Y 8/1	審	肥前系	
181	土師質 土器	甕	(6.3)		外側:ナコナデ 内側:ナコナデ	外側:にふい青5Y R5/3 内側:青5Y R4/3	1mm以下の石英・長石 を少々含む	良 外面:輝石有		
182	十輪質 土器	足盤			外側:ナコナデ 内側:ナコナデ	外側:にふい青5Y R6/4	1~2mm以下の石英・ 長石を含む	良		
183	十輪質 土器	徑鉢		(3.3)	外側:ナコナデ 内側:ナコナデ	外側:灰4/ 内側:灰 N/4	1mm以下の石英・長石 を含む	良 備、いぶしみ		
184	十輪質 土器	足盤	22.6	(4.0)	外側:ナコナデ 内側:ヨコナデ	外側:灰4/ 内側:灰白	1~2mm以下の石英・ 長石を含む	良 摺付有		
185	十輪質 土器	足盤	22.8	(7.8)	外側:ナコナデ 内側:ヨコナデ	外側:にふい青5Y R4/3 内側:にふい青5Y R7/3	1~2mm以下の石英・ 長石・角閃石を含む	良 備、こげ有		

如意輪寺跡

番号	社名	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	高さ					
190	黒色 土器	瓶	(14.3)	5.6	57	外側:ナデ 内側:ナコナデ	外側:浅黄灰10Y R8/3 内側:灰 N/4	1mm以下の石英・長石 を含む	良 黒化	
191	國分寺中西遺跡									

番号	社名	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	高さ					
199	上輪質	絞成十輪器	14.8	(4.4)	外側:ハケ目 内側:ヘラ彫り	外側:にふい青10Y R7/3 内側:灰 N/4	2mm以下の石英・長石 を含む	良		
200	土師質	盆		(4.4)	外側:ナコナデ 内側:ナコナデ	外側:灰 N/4 内側:灰白10Y R8/1	2mm以下の内色 の胎土	良		
201	十輪質 土器	上酒		(2.8)	外側:超ハケ目 内側:細かいハケ目	外側:にふい青10Y R5/4 内側:にふい青10Y R5/4	1mm以下の石英・長石 を含む	良		
202	十輪質 土器	足盤	(24.0)	(5.6)	外側:ナコナデ 内側:ハケ目	外側:灰4/ 内側:にふい青10Y R7/3	2mm以下の石英・ 長石を含む	良		
203	十輪質 土器	足盤	(24.2)	(4.6)	外側:ナコナデ 内側:ヨコナデ	外側:細目Y R6/6 内側:灰白N/6	1mm以下の石英・長石 を含む	良		
213	須賀器	壺	(2.6)	8.0		外側:灰白N/6 内側:灰白N/6	2mm以下の石英・長石 を含む	良 車輪焼きの跡が残る		
214	須賀器	重	(3.1)	(7.0)		外側:透明釉 内側:灰白N/8	透明釉	良好	肥前系	
215	須賀器	染付碗	(3.1)	(3.8)		外側:透明釉 内側:灰白N/8	透明釉	良好	肥前系	
216	須賀器	堆反碗	(10.6)	(4.3)		外側:透明釉 内側:灰白N/8	透明釉	良好	瀬戸美濃系	
217	上輪質 土器	焰壺	(2.8)		外側:ナデ 内側:ナコナデ	外側:灰白5Y R7/2 内側:灰白5Y R4/2	1mm以下の石英・長石 を含む	良好		

日ノ出 鬼子母山遺跡

番号	種類	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	高さ					
219	不明	小明	4.2	4.3	1.3					

iii) 瓦
特別史跡講岐田分寺跡
165c

番号	種類	器種	法量 (cm)		調査	色 調	施 土	焼成	備 考
			長軸	短軸					
5	丸瓦	土様式			凸面: ナデ 凹面: 布目	灰N6/	1mm以下の白灰、長石 を含む	良	
6	平瓦				凸面: 橢円叩き後ナデ 凹面: 布目	灰白N7/	良	良	
7	平瓦				凸面: 鴨嘴叩き、一部ナデ済 凹面: 布目	灰N6/	1mm以下の石英、長 石を含む	良	
8	平瓦				凸面: 鴨嘴叩き 凹面: 楕円叩き、ヘラ削り、 横切方針のナデ 凹面: 布目	灰N2/	2mm以下の石英、長石、 角閃石を含む 1mm以下の石英、長 石、角閃石を含む	良 慢燃	
9	平瓦				凸面: 鴨嘴叩き 凹面: 布目	灰N6/	3mm以下の石英、長石 を含む	良好	
10	平瓦				凸面: 鴨嘴叩き、ヘラ削り、 横切方針のナデ 凹面: 布目	灰白N7/	3mm以下の石英、長石 を含む	良	
11	平瓦				凸面: 鴨嘴叩き、 凹面: 布目	灰N6/	1mm以下の石英、長石、 長石を含む	良	
12	平瓦				凸面: 鴨嘴叩き 凹面: 布目 (黒鉛が著しい)	灰N6/	1mm以下の石英、長石 を含む	良好	
13	平瓦				凸面: 鴨嘴叩き 凹面: 布目	灰N6/	8mm以下の石英、長石 を含む	良好	
14	平瓦				凸面: 鴨嘴叩き 凹面: 鴨嘴叩き、ヘラ削り、柔り直す	灰N6/	8mm以下の石英、長石 を含む	不良	
21	軒平瓦				凸面: 鴨嘴叩き 凹面: 黒鉛 (ナデ?)	灰N6/	4mm以下の石英、長石 を含む	良	
22	丸瓦	下様式			凸面: ナデ 凹面: 布目、とじひも痕	灰N6/	2mm以下の石英、長石 を含む	良好	
23	平瓦				凸面: 橢円叩き 凹面: 売目 (墨鉛が著しい)	灰白N7/	2mm以下の石英、長石、 角閃石を含む	良	
24	平瓦				凸面: 鴨嘴叩き 凹面: 布目	灰白N7/	2mm以下の石英、長石 を含む	良好	
25	平瓦				凸面: 橢円叩き 凹面: 布目	灰白N7/	2~3mm以下の石英、 長石を含む	良	
26	平瓦				凸面: 橢円叩き、一部ナデ消し 凹面: 布目	灰N6/	1~3mm以下の石英、 長石を含む	良	
27	平瓦				凸面: 鴨嘴叩き 凹面: 布目	灰白N7/	3mm以下の石英、長石 を含む	良	

番号	種類	器種	法量 (cm)		調査	色 調	施 土	焼成	備 考
			長軸	短軸					
34	軒平瓦	SKJ101			凸面: ナデ 凹面: 布目	灰N6/	1~5mm程度の白、黑 色の砂粒を多量に含む	良	丸太文様: 斜面背面 直線文様
35	丸瓦	土様式			凸面: ナデ or ガキ 凹面: 布目、ナデ	灰N3/	1~2mm程度の白、黑色 の砂粒を多量に含む 灰白: 灰白 (2.5G Y8/1)	良	
36	丸瓦	土様式			凸面: 橢円叩き後ナデ 凹面: 布目	灰N6/	1mm以下の白の砂 粒を多量に含む	良	
37	平瓦				凸面: 橢円叩き 凹面: 布目	灰白T3 Y7/1	1~3mm程度の白の砂 粒を少量に含む		
38	平瓦				凸面: 橢円叩き後ナデ 凹面: 布目、有目をナデ消す	灰N6/	1~3mm程度の白、黑 色の砂粒を少量に含む	良好	
39	平瓦				凸面: 楕円目跡 凹面: 布目 (ほんと脱形)	灰白T3 Y8/1	1~3mm程度の白、黑 色の砂粒を多量に含む	良	
40	平瓦				凸面: 楕円目叩き×楕円子叩 (小形叩)	灰白T3 Y8/1	1~3mm程度の白、黑 色の砂粒を多量に含む	良	
41	平瓦				凸面: 楕円子叩 凹面: 布目	灰白T3 Y7/1	1mm以下の白、黑色 の砂粒を少量に含む	良	
42	平瓦				凸面: 楕円子叩後ナデ 凹面: 布目	灰白T3 Y8/1	砂粒を含まない	良	
43	平瓦				凸面: 手打叩き 凹面: 布目、手切り風	灰白25Y7/1	1mm以下の白の砂 粒を多量に含む	不良	
44	平瓦				凸面: 手打叩きT.具による平行叩 凹面: 布目、手切り風	灰白: 黄褐色10 Y8/2	1~3mm程度の白、黑色 の砂粒を多量に含む	不良	
45	平瓦				凸面: ナデ 凹面: 布目、一端ナデ	灰N3 Y7/1	1~5mm程度の白の砂 粒を少量に含む	良	
46	平瓦				凸面: 楕状工具による印叩 凹面: 布目	灰N6/1	1mm以下の白の砂 粒を多量に含む	良好	
47	平瓦				凸面: 楕円目叩き後脱形子ナデ 凹面: ナデ	灰N6/	1~2mm程度の白、黑 色の砂粒を少量に含む	良	
57	軒平瓦	SKH21系			凸面: ナデ 凹面: ナデ?	灰3Y/1	1mm以下の白、黑色 の砂粒を少量に含む	良	透輝文。擦
58	丸瓦	下様式			凸面: ナデ 凹面: 布目、ナデ	灰N6/	1mm以下の白の砂 粒を多量に含む	良	擦
59	丸瓦	丁様式			凸面: 楕円叩き後ナデ 凹面: 布目	灰白N7/	1~2mm程度の白、黑 色の砂粒を多量に含む	良	
60	丸瓦	行様式 (138)	22		凸面: 楕円叩き後ナデ 凹面: 布目	灰白25Y7/1	1~3mm程度の白の砂 粒を多量に含む	不良	
61	平瓦				凸面: 楕円叩き 凹面: 金目、燒成痕	灰白25Y7/2	1~3mm程度の白、黑 色の砂粒を多量に含む	良	
62	平瓦		22.9	(2.4)	凸面: 楕円叩き 凹面: 布目、手切り風	断面: 明オーリーブ灰25 G Y 7/1	1~5mm程度の白、黑 色の砂粒を多量に含む	良	擦・氣味
63	平瓦				凸面: 糙い椭円状工具による叩き凹 凹面: 布目、手切り痕	断面: 灰白10 R4/1	1~3m程度の白の砂 粒を多量に含む	良	
64	平瓦				凸面: 布目、手切り痕 凹面: 布目、手切り風	灰7.5 Y6/1	1mm程度の白の砂 粒を少量に含む	良好	粘土脱石付けを示す 手合せ日付
65	平瓦				凸面: 楕円目叩き 凹面: 布目→ナデ	灰白25 Y8/2	1mm以下の白の砂 粒を少量に含む	良	
66	平瓦				凸面: 楕円目叩き 凹面: 布目→ナデ	灰N6/	1mm程度の砂 粒をわずかに含む	良	
67	平瓦				凸面: 手打叩き (脱形子) 凹面: 布目、手切り、ヒト柱版 凹面: 布目、手切り、手打叩き	灰白5Y7/1	1mm程度の白、茶色の 砂粒を少量に含む	良	
68	平瓦				凸面: 布目	灰白10 R8/1	1mm程度の白の砂 粒をわずかに含む	良	
69	平瓦				凸面: 手打叩き 凹面: 布目	灰N3 Y7/1	1mm以下の砂 粒をわずかに含む	良	
70	平瓦				凸面: ナデ 凹面: 布目、手切り版 凹面: 板状工具による叩き凹 凹面: 布目	作50 P B6/1	2mm程度の白の砂 粒を少量に含む	良好	
71	平瓦				凸面: 布目 凹面: 布目、手切り痕	灰白N7/	1~3m程度の白の砂 粒を多量に含む	良	
72	平瓦				凸面: 布目 凹面: 布目、手切り痕	灰白25 Y7/1	1~2mm程度の白の砂 粒を多量に含む	良	擦
73	平瓦				凸面: ナデ 凹面: ナデ	灰N6/	1mm程度の白の砂 粒を多量に含む	良	擦

番号	種類	器種	法量(cm)			病変	色調	胎土	焼成	備考
			長幅	短幅	厚さ					
76	丸瓦	玉様式				凸面：ナデ 凹面：布目	灰白10YR 7/1	1~2mm程度の砂粒を含む やや密	良	
77	平瓦					凸面：横口叩き→ナデ 凹面：布目	灰白NT/	2mm以下の白色の砂粒を含む	良	
78	平瓦					凸面：横口叩き→ナデ 凹面：ナデ	灰白25Y 8/1	1mm程度の黒・白色的砂粒を多量に含む	良	
20次										
番号	種類	器種	法量(cm)			病変	色調	胎土	焼成	備考
			長幅	短幅	厚さ					
80	平瓦					凸面：横口叩き 凹面：布目	灰白NT/	1mm以下の石英・長石を含む やや密	良	
81	平瓦					凸面：横口叩き・角切り痕 凹面：布目	灰白5Y 8/1	2mm以下の石英・長石を含む	良	
82	平瓦					凸面：斜格子叩き 凹面：布目	青灰5Y BS 5/1	1mm以下の石英・長石を含む	良	
83	平瓦					凸面：横口叩き 凹面：布目	灰白NT/	やや密	良	
20次										
番号	種類	器種	法量(cm)			病変	色調	胎土	焼成	備考
			長幅	短幅	厚さ					
95	丸瓦					凸面：ナデ 凹面：布目・角切り痕 内面：横口叩き	灰青K 5B 3/1	密	良	
96	平瓦					凸面：横口叩き→ナデ 凹面：布目	鐵灰3Y R 6/6	3mm以下の石英・長石を含む	良	
97	平瓦					凸面：横口叩き 凹面：布目・角切り痕	灰内N 8/	密	良	
98	平瓦					凸面：横口叩き→ナデ 凹面：布目	灰白NT/	1mm以下の石英・長石を含む	良	
99	平瓦					凸面：平行叩き 凹面：布目	灰N 6/	4~5mm以下の石英・長石を多量に含む	良	
100	平瓦					凸面：ナデ 凹面：布目→ナデ	鐵灰7Y R 7/6 灰白10Y R 7/2	3mm以上の石英・長石を含む	良	
21次										
番号	種類	器種	法量(cm)			病変	色調	胎土	焼成	備考
			長幅	短幅	厚さ					
108	丸瓦	土様式				凸面：ナデ 凹面：布目・角切り痕 内面：横口叩き	灰白25Y 8/2	2mm以上の石英・長石を多量に含む	良	
109	平瓦					凸面：横口叩き 凹面：布目→ナデ・模擬板	灰N 6/	1mm以下の長石を含む	良	
110	平瓦					凸面：横口叩き 凹面：布目→輪廓を削る・角切り痕	灰N 4/	2mm以下のせきえい・長石を含む	良好	
111	平瓦					凸面：横口叩き 凹面：布目・ナデ・角切り痕	灰白5Y 7/1	1~2mm以下の石英・長石をわずかに含む	良	
112	平瓦					凸面：横口叩き 凹面：布目	灰白25Y 8/1	1mm以下の石英・長石を含む	良	
113	平瓦					凸面：横口叩き 凹面：布目	灰N 6/	1mm以下の石英・長石を含む	良好	
114	平瓦					凸面：平行叩き 凹面：布目	灰白7Y	1mm以下の長石を含む	良好	
115	平瓦					凸面：横口叩き→ナデ 凹面：布目・ナデ(一部)・角切り痕	浅黃灰7Y R 6/6	1~2mm以下の石英・長石を多量に含む	良	
116	平瓦					凸面：横口叩き→ナデ 凹面：布目・ナデ・角切り痕	灰内N 6/	1~2mm以下の石英・長石を含む	良	
117	平瓦					凸面：横口叩き→ナデ 凹面：布目	灰10Y R 5/1	2mm以上の石英・長石・角閃石を少量含む	良好	
118	瓦					凸面：平行叩き後一部ナデ 凹面：布目	灰白NS/	1mm以下の長石を含む	良好	
22次										
番号	種類	器種	法量(cm)			病変	色調	胎土	焼成	備考
			長幅	短幅	厚さ					
123	軒平瓦	SKH05				凸面：ナデ 凹面：横口叩き	灰青10Y 7/3	1mm以下の長石を含む	良	
124	軒丸瓦					凸面：ナデ 凹面：横口叩き	灰N 6/	1mm以下の長石を含む	良好	瓦当文様：巴文施している。
125	丸瓦					凸面：角切り痕 凹面：横口叩き→ナデ	灰白7.5Y R 7/3	1mm以下の長石を含む	良好	
126	平瓦					凸面：横口叩き 凹面：布目	灰青10Y R 7/3	2mm以下の石英・長石を多量に含む	良	筋干にもみがらを含む
127	平瓦					凸面：横口叩き 凹面：布目・角切り痕	灰内N 7/	1mm以下の長石を含む	良好	
128	平瓦					凸面：横口叩き 凹面：布目・角切り痕	灰白2.5Y 7/1	1mm以下の石英・長石を多量に含む	良好	
129	平瓦					凸面：横口叩き 凹面：布目	灰白N 7/1	1mm以下の長石を含む	良	
131	軒平瓦					凸面：ナデ 凹面：ナデ	淡青系色	1mm以下の長石を含む	良	
132	平瓦					凸面：横口叩き 凹面：布目	灰青10Y R 7/2	1mm以下の長石を含む	良	
136	丸瓦	土様式	22.5	(7.7)	1.9	凸面：横口叩きのナデ 凹面：ナデ・粗骨質?	灰N 4/	1mm以下の石英・長石を多量に含む	良	燃燒している。
137	平瓦					凸面：横口叩き 凹面：布目	浅黃灰10Y R 8/3	2mm以下の石英・長石を少量含む	良	
145	軒丸瓦					凸面：ナデ 凹面：ナデ	灰N 6/	2mm以下の石英・長石を含む	良	瓦当文様：巴文施している。
33次										
番号	種類	器種	法量(cm)			病変	色調	胎土	焼成	備考
			長幅	短幅	厚さ					
146	平瓦					凸面：横口叩き後ナデ 凹面：粗骨質に角切り	灰白5Y 8/1	1~3mm以下の石英・長石を多量に含む	良	
147	平瓦					凸面：横口叩き後削り後ナデ 凹面：布目→削り後ナデ	灰白5Y 7/1	2mm以下の石英・長石を含む	良	
148	丸瓦	玉様式	27.3	15.0	1.6	凸面：ナデ 凹面：横口叩き	灰N 4/	密	良	
149	平瓦			(26.5)		凸面：横口叩き→運転 凹面：平行叩き	灰N 6/	1~3mm以下の長石を含む	良好	
150	平瓦					凸面：平行叩き 凹面：布目	灰白NS/	1mm以下の長石を含む	良	
151	平瓦					凸面：平行叩き(粗骨質が若しい) 凹面：布目	深灰10Y R 6/1	1~3mm以下の石英・長石を多量に含む	良	

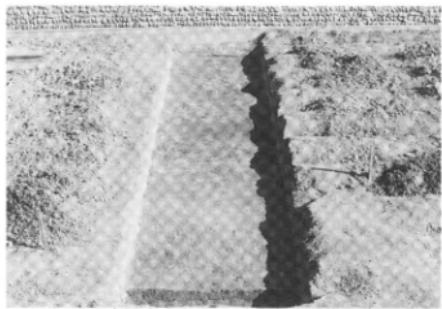
番号	種類	基準	法量 (cm) 延幅 切幅 厚さ	調査		色調	胎土	焼成 度	備考
				凸面	凹面				
152	平瓦			凸面:ナデ 凹面:裏目→ナデ		暗青灰5D 84/1	5mm以下の石英、長石 を多量含む	良	
153	平瓦			凸面:平行押き		外灰1 化5G 6/1	1~2mm以下の石英、 長石を含む	良	
154	平瓦			凹面:裏目		内灰1 化5G 6/1	1mm以下の石英、長石 を含む	良	
155	平瓦			凸面:裏口叩き後、一部ナデ 凹面:裏目→ナデ	外灰1 化5G 6/1 内灰1 化5G 6/1	外灰1 化5G 6/1 内灰1 化5G 6/1	5mm以下の石英、長石 を含む	良	
156	平瓦			凸面:裏目 凹面:裏目→ナデ		外灰1 化5G 6/1 内灰1 化5G 6/1	1mm以下の石英、長石 を含む	良好	表面をやや縮し気味
157	平瓦			凸面:裏口叩き後、一部ナデ		外灰1 化5G 6/1 内灰1 化5G 6/1	1mm以下の石英、長石 を含む	良	
158	平瓦			凸面:布目叩き後、一部ナデ 凹面:裏目→ナデ		外灰1 化5G 6/1 内灰1 化5G 6/1	1mm以下の石英、長石 を含む	良	
159	平瓦			凸面:裏口叩き後、一部ナデ 凹面:ナデ		外灰1 化5G 6/1 内灰1 化5G 6/1	2mm以下の石英、長石 を含む	良	やや縮し気味
160	平瓦			凸面:裏口叩き後、一部ナデ 凹面:裏目→ナデ		外灰1 化5G 6/1 内灰1 化5G 6/1	1mm以下の石英、長石 を含む	良	
161	平瓦			凸面:裏口叩き → 部ナデ 凹面:ナデ		外灰1 化5Y7/1	1~3mm以下の石英、 長石を含む	良	
162	平瓦			凸面:裏口叩き後、一部ナデ 凹面:裏目→ナデ		外灰1 化5Y7/1 内灰1 化5Y7/1	5mm以下の石英、長石 を含む	良	
163	平瓦			凸面:裏口叩き → 部ナデ 凹面:ナデ		外灰1 化5Y7/1 内灰1 化5Y7/1	1~2mm以下の石英、 長石を含む	良	
164	平瓦			凸面:裏口叩き 凹面:裏目→ナデ		外灰1 化5Y7/1	2mm以下の石英、長石 を含む	良	
165	平瓦			凸面:裏口叩き 凹面:ナデ		外灰1 化5Y7/1 内灰1 化5Y7/1	1~2mm以下の石英、 長石を含む	良	
166	軒丸瓦 SKM06?			凸面:ナデ		灰白N4/	1mm以下の長石を含む	良好	
167	平瓦			凸面:裏口叩き後、一部ナデ 凹面:布目		外灰1 化5G 6/1 内灰1 化5G 6/1	石	良	
168	平瓦			凸面:裏口叩き、ナデ 凹面:布目、ナデ		灰白N4/	石	良	
169	平瓦			凸面:裏口叩き 凹面:裏口叩き後、一部ナデ		灰白10Y R8/1	1~2mm以下の石英、 長石を含む	良	
170	平瓦			凸面:裏口叩き 凹面:布目		灰白7Y5/1	2mm以下の石英、長石 を含む	良	
171	平瓦			凸面:裏口叩き後、一部ナデ 凹面:裏目		外灰1 化5G 6/1 内灰1 化5G 6/1	1~3mm以下の石英、 長石を含む	良	
172	平瓦			凸面:裏口叩き 凹面:布目		外灰1 化5G 6/1 内灰1 化5Y6/1	1~3mm以下の石英、 長石を含む	良	
173	平瓦			凸面:裏口叩き 凹面:裏目		灰白5Y8/1	1~3mm以下の石英、 長石を含む	良	
174	平瓦			凸面:裏口叩き 凹面:裏目(在目)		灰白5Y8/1	3mm以下の石英、長石 を含む	良好	
175	平瓦			凸面:裏口叩き 凹面:布目		灰白N8/	4mm以下の石英、長石 を少量含む	良	
180	平瓦			凸面:格子叩き 凹面:波瀬		外灰1 化5Y R6/4 内灰1 化5Y R6/2	7mm以下の石英、長石 を含む	良	
186	丸瓦 土様式			凸面:ナデ 凹面:布目		外灰1 化5Y R6/4 内灰1 化5Y R6/2	2mm以下の石英、長石 を含む	良	
				凹面:波瀬		内灰1 化5Y R6/2	1mm以下の石英、長石 を含む	良	

如意輪寺窯跡

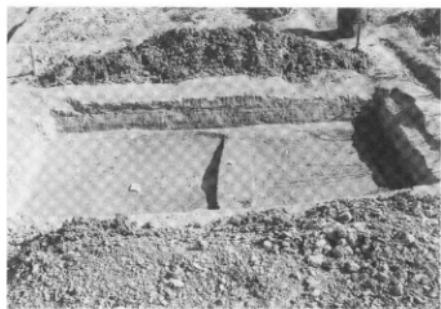
番号	種類	基準	法量 (cm) 延幅 切幅 厚さ	調査		色調	胎土	焼成 度	備考
				凸面	凹面				
187	平瓦			凸面:細い横目叩き		淡黄25Y8/3	1mm以下の石英、長石 を少量含む	良	
188	丸瓦			凸面:ナデ		灰N4/	1mm程度の内部の砂粒 を多量含む	良好	
189	平瓦			凸面:布目		灰白25Y7/1	3mm以下の石英、長石 を含む	良	
190	軒丸瓦 NRM01			凸面:ナデ 凹面:右目		灰白N8/	5mm以下の石英、長石 を多量含む	良	
192	軒丸瓦 NRM02			凸面:ナデ 凹面:左目		灰白5Y7/1, 灰5Y6/1	5mm以下の石英、長石 を多量含む	良	
193	軒丸瓦 NRM02			凸面:ナデ 凹面:右目		灰白5Y7/1	5mm以下の石英、長石 を多量含む	良	
194	軒丸瓦 NRH01			凸面:ナデ 凹面:右目		灰N5/	5mm以下の石英、長石 を多量含む	良	
195	軒丸瓦 NRH01	24.0		凸面:ナデ 凹面:右目		5mm以下の石英、長石 を多量含む	5mm以下の石英、長石 を多量含む	良	
196	軒丸瓦 NRH01			凸面:ナデ 凹面:右目		灰白5Y7/1	5mm以下の石英、長石 を多量含む	良好	

圓分中西遺跡

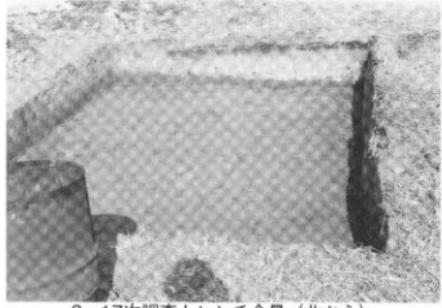
番号	種類	基準	法量 (cm) 延幅 切幅 厚さ	調査		色調	胎土	焼成 度	備考
				凸面	凹面				
197	丸瓦			凸面:ナデ(胎状が残存)		灰N5/	密	良好	
198	文子瓦			凸面:ナデ		灰N4/	1mm以下の石英、長石 を含む	良	
199	軒丸瓦			凸面:ナデ		灰N4/	1mm程度の内部の砂粒 を多量含む	良好	粗介離等有
200	丸瓦 土様式			凸面:右目 凹面:左目		灰灰N3/	3mm以下の石英、長石 を含む	良	
201	丸瓦 土様式			凸面:右目 凹面:左目		灰灰N3/	5mm以下の石英、長石 を多量含む	良	
202	丸瓦 土様式			凸面:右目 凹面:左目		灰N5/	5mm以下の石英、長石 を多量含む	良	
203	丸瓦 土様式			凸面:右目 凹面:左目		灰N5/	5mm以下の石英、長石 を多量含む	良	
204	丸瓦 土様式			凸面:右目 凹面:左目		灰N5/	5mm以下の石英、長石 を多量含む	良	
205	丸瓦 土様式			凸面:右目 凹面:左目		灰N5/	5mm以下の石英、長石 を多量含む	良	
206	丸瓦 土様式			凸面:右目 凹面:左目		灰N5/	5mm以下の石英、長石 を多量含む	良	
207	平瓦			凸面:横目叩き		灰黃褐10Y R5/2	2mm以下の石英、長石 を多量含む	良	
208	平瓦			凸面:裏底		灰黃褐10Y R7/4	1mm以下の石英、長石 を多量含む	良	
209	丸瓦 土様式			凸面:横目叩き→ナデ		灰黃25Y6/1	密	良好	
210	平瓦			凸面:右目		灰白10Y R8/2	2mm以下の石英、長石 を含む	良	
211	平瓦			凸面:平行叩き 凹面:左目		灰25Y R6/6, 暗灰10Y R6/1	2mm以下の石英、長石 を多量含む	良	
212	平瓦			凸面:長い横目叩き 凹面:左目		灰白25Y R8/2	密	良好	
213	平瓦	(6.9) (9.0)	16	凸面:ナデ、斜筋子叩き 凹面:ナデ		灰10Y6/1, 灰N4/	1mm以下の石英、長石 を含む	良好	



1 16次調査東西トレンチ全景（西から）



2 16次調査南北トレンチ全景（西から）



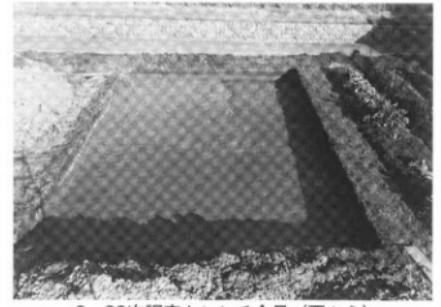
3 17次調査トレンチ全景（北から）



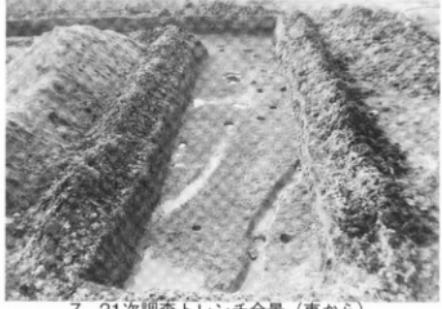
4 18次調査トレンチ全景（西から）



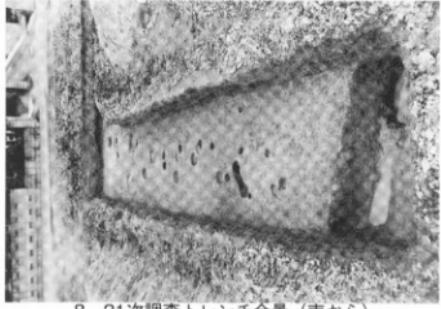
5 19次調査トレンチ全景（北から）



6 20次調査トレンチ全景（西から）



7 21次調査トレンチ全景（東から）



8 21次調査トレンチ全景（南から）